2017（平成 29）年度

新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語と宗教を核とした文化継承と維持

―ウイグル族の教育状況を手掛かりとして―

指導教員　片山隆裕

国際文化研究科国際文化専攻

アイネル・バラティ

新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語と宗教を核とした文化継承と維持
―ウイグル族の教育状況を手掛かりとして―

目次

序章……1
第1節　研究の目的と方法……1
第2節　先行研究……4
1.「双語教育」に関する先行研究……4
2. 宗教に関する先行研究……8
3. 文化人類学、教育と言語文化、教育と宗教文化に関する研究……9
第3節　論文の構成……11
第4節　論文の表記方法……12

第1章　新疆ウイグル自治区と調査地の概要……13
第１節　新疆ウイグル自治区の概要……13
1. 地理的特徴……13
2. 少数民族の分布……14
3. 新疆における少数民族の多彩な暮らしと習慣……16
第2節　調査地の概要……19
1. 所在地と民族分布……19
2. 調査地の生業と暮らし……21
第3節　ウイグル族について……21
1. ウイグル族の歴史的沿革……21
2. ウイグル族語と文字について……23
3. ウイグル族の暮らし……25
まとめ……28

第2章　中国の少数民族政策と少数民族教育政策……29
第1節　中華人民共和国民族区域自治法について……29
第2節　中国の少数民族地域における民族教育政策……30
第3節　民族教育政策の基本的構想、内容と実行状況……31
まとめ……37

第3章　新疆ウイグル自治区における「双語教育」……38
第1節　双語教育の導入……38
第2節　改革開放からの双語教育の拡大……38

第3節　事例研究―　コルラ市の場合 41
第4節　新疆ウイグル自治区の「双語教育」状況 43
1．学校における「双語教育」 44
1)幼稚園における「双語教育」 ―　事例報告 44
2）小学校における「双語教育」 ―　事例報告 48
3）中学校における「双語教育」 ―　事例報告 50
4）高等学校における「双語教育」―中国漢民族居住地における「新疆高校クラス」の実態 . 52
「新疆高校クラス」実態 53
深圳市松崗中学の場合 54
深圳市松岡中学の「新疆高校クラス」のウイグル族生徒を対象として行った調査報告 55
5）　新疆ウイグル自治区の大学における「双語教育」教育 60
2．家庭のおける「双語教育」 61
1)漢語ができない親の家庭 61
2)漢民族の学校を卒業した親の家庭 64
3)ウイグル語と漢語両方ができる親の家庭 65
まとめ 69

第4章　新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語文化の継承と維持 70
第1節　ウイグル族の言語意識 71
言語意識に関するアンケート調査 73
言語意識に関するインタビュー調査　 75
第2節　ウイグル族の言語使用状況 77
言語使用状況に関するアンケート調査 78
言語使用状況に関するインタビュー調査 80
まとめ 80

第5章　ウイグル族における宗教（イスラーム教）文化の受容 82
第1節　中央アジアの宗教(新疆ウイグル自治区) 83
第2節　イスラーム教の新疆への伝播 87
第3節　現代ウイグル文化でのイスラームの要素 92
第4節　ウイグル族の文化受容とイスラーム教 96
まとめ 102

第6章　新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の宗教文化の継承と維持 104
第1節　ウイグル族におけるイスラーム教の伝達 104
1．文化大革命以前 104

2. 文化大革命以降 ……106
第2節　事例報告……107
1. ウイグル族の一日の生活についてインタビュー調査……107
2. 宗教文化（イスラーム文化）の継承と維持に関する事例報告 ……110
まとめ ……113

終章　　まとめと今後の展望……115
第 1 節　論文のまとめ ……115
第2節　今後の課題……123
参考文献……125

新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語と宗教を核とした文化継承と維持
ウイグル族の教育状況を手掛かりとして

序章

第1節　研究の目的と方法

中華人民共和国は、圧倒的多数を占める漢族と55の少数民族を有する多民族国家である。民族帰属は、1950 年代に中国政府が行った民族識別調査に基づいて承認されたものである。1978年以降、中国政府が改革開放政策を実施したことにより、80年代の後半から中国経済が著しく発展し、各地域で人口の移動が顕著にみられるようになった。中国各地域における人口移動の背景には国家政策によるものと自主選択によるものがあるが、内陸部から沿海地域や北京・上海といった発展地域への出稼ぎによる労働人口の移動が主流であった。それと同時に、商売や建築業を主とした漢民族の「農民工」[1]たちの各少数民族地域への大規模な移動も存在していた。このように少数民族地域における漢民族人口の増加や、中国政府が北京語を標準とする漢語を国語として定めたことによって、少数民族地域における漢語の必要性が高まることになった。したがって、少数民族の人々が漢語を学び、習得するようになり、その結果少数民族文化が漢文化の影響を大いに受けることになった。

中国政府は民族伝統文化の持続と民族アイデンティティの保持に役立つ民族教育政策を採ると同時に、国民国家への統合を目的とした国民教育政策を並行して実施している。教育言語についていえば、具体的には、漢民族に対する「普通話」[2]普及政策と少数民族に対する「双語教育」[3]政策を例としてあげることができる。それらの政策の実施によって、少数民族の間で積極的に漢語を学ぶ、あるいは学ばざる得ない状況が出現し、漢語ができるものが増加していった。

---

[1] 工業を従事する農民たちを指し、「盲流」「民工」と呼ぶこともある。
[2] 「普通話」と定められた北京語を指す。
[3] 少数民族が自らの言語と漢語を学習する２言語教育である。

新疆ウイグル自治区[4]においても、1980 年から、経済発展を目指すための人材育成を目的として学校教育に関わる新たな教育政策が実行され、少数民族に対する漢語教育が重視されるようになった。新疆ウイグル自治区の主要民族であるウイグル族は、母語であるウイグル語[5]を使用し、イスラーム教を信仰し、イスラーム文化を有するトルコ系民族である。

「双語教育」政策の徹底的実施によってウイグル族の漢語能力が上がり、漢民族との言語による文化交流も可能となった。これによって文化接触が起こり、ウイグル族の伝統文化の変容過程における漢文化の影響が目立つようになった。近年では、これらのことが注目され、特にウイグル族の知識人たちの間で、民族伝統文化の継承と維持に関する話題が取り上げられるようになった。中国総人口の 9.44%(中国統計 2006 年)を占める 55 の少数民族の1つであるウイグル族の漢語を習得することにより、その伝統文化が漢文化の影響を受けて、人口が圧倒的に多い漢民族の文化的同化に迫られているといえるだろうか。もちろんウイグル族が集中して生活している地域でありながらも、物質的生活の豊かさを追求する姿勢が強まるなか、漢語を習得し、漢民族と接する機会が多くなることは避けられないだろう。このような状況において、民族文化をどのようにして継承し、どのように維持していくかは、現代ウイグル族において重要な課題となるだろう。ゆえに、民族教育と民族文化の関連性は多くのウイグル族の人々が直面している課題である。

一般的には、ウイグル族が漢語を学ぶことで漢民族との交流が深まり、ウイグル文化が漢文化の影響を受けていると考えられている。具体的には、どの分野で、どのように影響を受けて、ウイグル文化はどのように変容しているのか、あるいは文化がどのように維持されているのかという問いが浮かび上がる。そこで筆者は、本論文において、ウイグル族の例を通して、現代中国における少数民族の教育状況を具体的に調査し、少数民族文化の維持・継承と教育との関連性を明らかにするために次の方法をとった。

第1に、教育が文化の継承・維持に対して大きく影響を与えることは言うまでもない。特に国民言語教育は、母語に対して消滅の危機に瀕するまで影響を及ばすといってもいいだろう。もしそうであるならば、現在中国で行われている少数民族への漢語教育が強化され、中国全土に漢語が普及することによって、少数民族言語は消滅の危機に瀕することになるのではないかと考えられる。筆者が中国の「双語教育」を重視し、少数民族教育の全体の中で「双語教育」を取り上げるきっかけとなったのは、藤山正二郎の「ウイグル語の危機」(新免康編 1999)を読ん

[4] 本論では新疆と称することもある。
[5] ウイグル語はアルタイ語族のトルコ語派に属する。

だことにある。藤山は、新疆ウイグル自治区で進学、就職面で漢語の必要が高まっていること、民族学校教育における漢語教育が強化されていること、それでも足りないと思うウイグル族の親たちが子供を漢民族の学校に通わせていることを取りあげている。したがって、子供たちが漢語を習得していくことで、ウイグル語の使用が減ることになり、消滅してしまうのではないかと考え、ウイグル語の危機を感じている知識人たちが現れていること述べている。

筆者自身も民族学校に通い、漢語を1つの外国語として学び、大学の漢語専攻を卒業して、翻訳の仕事に就いた。翻訳の仕事中、ウイグル語を漢語に訳すことに苦労した経験があり、漢民族の学校に通っていればと思ったことは少なくなかった。その経験から子供を漢民族の小学校に行かせたので、藤山の論文を自身の経験に当てはめ、ウイグル語の消滅についての関心をもつようになった。以降、中国の新疆ウイグル自治区に帰郷した際、子供たちの言語使用状況に注意するようになり、漢語学習とウイグル語の使用状況との関連性を考えるようになった。現地調査を通して、漢語学習がウイグル族の言語使用状況に大きな影響を与え、それと同時にウイグルの伝統文化の継承と維持に対しても大きな影響を与えていることに気づいた。そこで日本の文化人類学、教育学などの分野に関連する先行研究を踏まえ、参与観察の方法と調査報告に関する研究を参考にし、言語学習後の文化変容、特に言語文化と宗教文化の変容についての独自の研究を行う必要性があると考えた。

よって本論文では、以下の通り考察を進めることにした。中国の少数民族政策と少数民族教育政策の実施、新疆ウイグル自治区の概況と民族構成を述べる。次に、新疆ウイグル自治区の漢語教育の実態、具体的には双語教育政策の実施状況について幼稚園・小学校・中学校と高等学校そして大学の教育状況を明確にする。さらに、ウイグル族の民族伝統文化を明らかにするために、宗教信仰の歴史とイスラーム教の受容について考察を行い、言語と宗教を核としたと現代ウイグル文化の形成過程を考える。

第2に、調査を通して言語使用意識と実際の言語使用状況の差異を明らかにする。これまでの新疆ウイグル自治区の「双語教育」に関する研究では、漢語教育の実態を記述したものが多い。そうした研究の目的は今後どのようにして漢語教育を強化し、少数民族の漢語能力を上達させるかに関する措置などについて考察するものがほとんどである。そこで筆者は、ウイグル族が「双語教育」を受け、漢語を習得することがウイグル族の言語文化にどのような影響を与えるか、どのような文化変容が現れるのかを明らかにする。具体的には、新疆ウイグル自治

区の庫爾勒(コルラ)[6]市を調査地に定めて、アンケート調査とインタビュー調査を行い、言語使用意識の形成過程と実際の言語使用状況を把握し、言語使用意識と言語使用状況の間におけるギャップを明確にしていく。

第3に、ウイグル伝統文化の形成とイスラーム教の関連性を明確にする。ウイグル族は 10 世紀頃からイスラーム教を信仰し、その教義がウイグル族の生活習慣に浸透していったと考えられている。現代ウイグル族における宗教文化の在り方を明らかにする目的で、親世代と子供世代の宗教とウイグル文化の関連性に対する考えと意識を、アンケート調査とインタビュー調査を通して把握していく。親と子供の考え方の違いが教育、特に漢語教育といかに関連づけられているのかを明らかにしていくことで、最終的には、「双語教育」と言語使用状況の関係、「双語教育」と宗教文化との継承・維持の関係を明らかにする。

第2節　先行研究

1．「双語教育」に関する先行研究

中国の少数民族地域の「双語教育」については、社会学、教育学、経済学などの分野で研究がすすめられている[王ほか 2001、金 2005、武 2004][7]。これらの研究では、少数民族の漢語教育を強化させることの重要性に重点がおかれている方向性がある。たとえば、王振本らは新疆ウイグル自治区の少数民族の漢語教育に関する問題を提起して分析を行い、少数民族の「双語教育」を強化することを意図している。具体的には音声、語彙、文法などの教え方、また聴解力、会話力、読解力などの言語技能を身につけさせる方法や措置などについて研究を進め、漢語教育に関する教材の編集と出版、教育をレベルアップさせるための漢語教育の人材育成等の内容を取り上げている。本書では少数民族の漢語教育を強化させる措置と方法について考察しているが、漢語教育と少数民族文化の関連性などについての検討はなされていない。

『20 世紀中国少数民族與教育』(滕星 2002)では、中国の少数民族地域で実施されている「双語教育」の現状、意義と目的について以下のように述べられている。少数民族の学校教育の中には、母語だけで行われる教育、漢語だけで行われる教育、漢語と母語の両方で行われる教育が存在する。中国少数民族地区の双語生活は、「双語教育」を必要としており、学校に

[6]以下はコルラ市と称する。
[7]王振本、梁威、阿不拉江・艾買提、張勇 『新疆少数民族双語教学研究』民族出版社 2001 年、金星華『中国民族語文工作』民族出版社 2005 年、武金峰『新疆高校民族予科教育研究』民族出版社 2004 年

おける「双語教育」の実施は、少数民族教育を発展させ、民族教育の質を上げる有効な方法である。そして民族学校において多文化教育を実施し、少数民族の伝統文化を維持していくための必要な手段でもある。さらに、「中華民族多元的一体構造」思想の核心は「多元一体」であり、「多元」というのは、中国国内における 56 民族の文化的多元性である。「一体」とは、異なる 56 の民族の「中華民族大家庭」の総体であり、その核心は国家統一を指すことであるという。また多文化、国家一体と少数民族の「双語教育」の関係を以下のように考えている。①多文化と「双語教育」の関係について、多文化を発展させるためには、異なる民族の間で文化交流を可能にする「双文化人」を必要とする。「双語教育」は「双文化人」の前提であり、「双言語人」を育成する基礎である。すなわち、「双語教育」は多民族国家における多文化発展の基礎である。②国家統一と少数民族「双語教育」の関係について次のように言う。「双語教育」においては各民族間の教育は漢語教育である。国家の統一を保証するために各民族の教育、文化、経済、政治および社会の各領域の繋がりと交流は共通語を必要とする。漢語教育を通して、各民族同士の交流が可能となり、これによって全面的な相互交流と共同発展ができ、国家統一の基礎を打ち立てる。漢語学習を通して少数民族の人々は近代化社会に入ることができ、国家一体化の過程の中で発展していくことによって、国家統一が揺るぎないものとなる。これらの考えが、中国における少数民族「双語教育」の基本概念となり、中国における先行研究の主な方向となり、少数民族の漢語能力を向上させる方法と措置について考える基礎となったといえる。

『多元文化整合教育視野中的維漢双語教育研究』(艾力・伊明 2011)では、艾力・伊明は文化人類学のフィルドワーク方法を用いて、特定の地域、特定の民族の言語文化について研究し、民族教育と「双語教育」の発展過程、およびその特徴と意義に関して教育人類学の角度から分析することが目的であるという[艾力・伊明 2011:6]。そして和田(ホータン)地域を調査地として、当該地域の特徴と教育状況または「双語教育」の状況を述べ、漢語教育の必要性と漢語教育に影響を与える要因を分析している。そして最後に、ホータン地域における「双語教育」の発展動向と対策を考え、「双語教育」の理論研究に力を入れて少数民族が漢語を学ぶと同時に漢民族が少数民族の言語を学ぶことを奨励している。しかしながら本書では、漢語教育が民族文化の継承と維持のあり方に与える影響などは考察されていない。

羅吉華の「内地新疆班文化適応与教育対策」(滕星、張俊豪 2009)は、教育人類学の立場から漢民族地域における「新疆班」(以下「新疆高校クラス」とする)の生徒たちに対して調査を行い、彼らの文化適応といった教育と文化の関連を考えた比較的新しい論文である。羅吉

華は、文化適応は、4つの段階つまり①新鮮感や好奇心を持つ幸福感を抱く段階（Euphoria Stage）、②カルチャーショックを受ける段階（Cultural Shock Stage）、③カルチャーストレスを受ける異常段階（Anomie Stage）、④同化する或いは適応する段階（Assimilation or Adaptation Stage）を経るという［羅吉華 2009:413］。彼は「新疆高校クラス」の生徒たちの文化適応に関する以上4段階の中で、第1段階の好奇心を持つ段階から文化適応に力を入れることによって、第2段階のカルチャーショックを軽減できると主張する。そうすれば、生徒たちが2年次以降は文化適応がスムーズに行われるだろう、年齢が低ければ低いほどカルチャーショック受ける機会が少なくなると考えている。そして、「新疆高校クラス」の生徒たちの文化適応の中で存在する問題を①自然環境における不適応、②物質的環境における不適応、③文化や社会環境における不適応、④社会地位や人間関係における不適応とまとめている。またこれらの不適応に対して以下4点の問題追及を行っている。①文化の不連続性と文化適応、②エスニックグループ[8]としての一体感と文化適応、③言語類型の差異と文化適応、④「文化自覚」意識の目覚めと文化適応ということである。その上で、多文化教育を背景とした、「新疆高校クラス」の文化適応について、以下のような教育対策を提唱している。①政府が教育を推進し、「新疆高校クラス」の展開を制度的に保証し、少数民族生徒の文化適応について研究する必要性を重視し、「新疆高校クラス」を有する学校間で交流を深める。②学校の多文化状況に注目し、カルチャーショックを軽減する策を考える。③心のケアに注目し、生徒の文化適応を手助けする。④生徒たちに対する事前教育を強化し、文化適応を促進させる。⑤多文化教育改革を実施する。⑥「新疆高校クラス」の生徒たちは生活習慣、生活様式が異なる地域で学校生活を送る中、異文化適応は困難ではあるが、自ら異文化適応を促進することに努めることが必要である。この論文は「新疆高校クラス」の少数民族生徒たちの文化適応について教育人類学の視点から考察を加え、漢民族地域における高校生活に早く慣れるための方策や措置などを理論的に検討しているが、少数民族の生徒たちが漢民族と同じ教育を受けることによる彼らの民族アイデンティティ、民族文化に関する考え、教育が民族文化のあり方に与える影響について考察は行われていない。

岡本雅享の『中国の少数民族教育と言語政策』（1999）では、第1部において中国の少数民族教育の概況と特徴を記し、現代中国の少数民族語政策が述べられている。第2部で中国各地、各民族の民族教育を取り上げ、その一部として新疆ウイグル自治区における民族教育を考察している。20 世紀前半のトルコ系ムスリムの教育として、清王朝時代と中華人民共和国時

[8] 中国語で英語の Ethnic group を族群と訳している。

代までの教育状況を取り上げ、次には、中華人民共和国おける新疆トルコ系諸民族教育や言語政策を検討し、最後には、新疆ウイグル自治区の北部に位置しているイリ・カザフ自治州のシボ族の教育言語教育状況について検討している。本書は、少数民族の言語教育政策について考え、中国の各少数民族の教育状況と手掛かりに教育政策の機能と目的を検討する好著であるが、少数民族の漢語習得による、民族の伝統文化への影響を検討しているとはいいがたい。

『新疆ウイグル自治区における少数民族双語教育に関する研究』[9]（アナトラ・グリジャナティ2009)では、民族言語の大きな課題である「双語教育」の定義に関する学説及び双語現象、双語教育の概念を整理、解釈して、漢語を教授用語とする新たな「双語教育」の動向を示し、新疆における「双語教育」の変遷とその地域性、「双語教育」における母語の重要性について考察を行い、幼児教育と初等教育では、「双語教育」と言いながらも漢語による教育に偏っていることを明かにしている。そして第2言語を学習させる適切な年齢と母語の役割を考慮することと、「双語教育」の定義と教授用言語の選択の再検討の必要性を指摘している。筆者は、この研究は新疆ウイグル自治区における「双語教育」の主な状況を把握するために不可欠であり、特に「双語教育」の地域性についての考察は大いに参考になると考える。また教育学の視点から「双語教育」について行った研究という点も評価できるが、教育と民族文化の密接な関係から考えると、ウイグル族の民族文化について人類学の視点からも考察を行う必要性があり、「双語教育」を受けてからウイグル族の民族文化がどの面で、どのように変容しているのかを明らかにする必要があると考える。

『中国の少数民族問題と経済格差』(大西広編 2012)では、第7章において、経済問題と密接な関連を持つ企業家育成の場である新疆大学の例を中心に、新疆ウイグル自治区における「民考漢」[10]と教育問題を取り上げている。具体的には、新疆大学の「民考漢」の学生たちへのインタビューを取り上げ、小学校から漢民族学校に通った少数民族学生の考えを理解することに力を注いでいる。また、政府による「双語教育」政策の実施により、新疆大学の「双語教育」モデルが変わることで、以前は少数民族言語で授業していた教員たちが漢語で授業することに変わり、教員たちの考えを理解することにも力を注いでいる。教育モデルの転換がキャンパス文化に与える影響について、少数民族学生の自身の言語能力への自己評価、漢民族と

[9] https://www.fujixerox.co.jp/company/social/next/foundation/pdf/711.pdf2017 年 12 月 6 日アクセス

[10] 漢民族学校に通う少数民族学生という意味である。

少数民族の交流状況などについて調査を行っており、学校における「双語教育」に関する優れた論文であるといえる。この研究では、新疆ウイグル自治区における大学の漢語教育状況に重点が置かれているので、さらに少数民族が漢民族地域へ移動した際の学校教育状況についての研究も必要である。

崔淑芬の『中国少数民族の文化と教育』(2012)では、中国における少数民族教育政策が民族の伝統文化に与える影響を理論的実践的に分析し、民族文化と教育の実情を明らかにしている。朝鮮族、モンゴル族、回族、ウイグル族、雲南省のペー族とナシ族、またチベットの教育と文化というテーマで、教育政策、教育状況と民族文化について検討がなされている。新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の教育と文化を検討するにあたって、「双語教育」状況について考察を行い、漢語教育の問題点などを取り上げ、漢語で授業をすることができる教員の養成を担っている新疆教育学院にて行った調査報告が取り上げられている。その研究の目的は、少数民族教育が民族の伝統文化に与える影響の考察を試みるとしているが、「双語教育」を受けて漢語を習得した少数民族の教員や生徒たちの民族アイデンティティに対する意識、民族伝統文化に関しての考察は十分とは言えない。

このように従来の中国における先行研究では、少数民族に対する漢語教育の現状とあり方に重点をおいているものが多く、言語を学ぶ側の視点とその内面的変化に対する論点が欠落している。したがって筆者は、学ぶ側である生徒たちへのアンケート調査とインタビュー調査を通じて、民族アイデンティティ及び教育が民族文化に与える影響について論じることにする。

2. 宗教に関する先行研究

新疆ウイグル自治区の宗教信仰に関しては、以下の研究を挙げることができる。

『中国少数民族宗教』(宋恩常編 1985)では、中国における少数民族の宗教について、具体的には、シャーマニズムとトーテム崇拝、及び仏教、チベット仏教とイスラーム教を信仰する少数民族が取り上げられ、各少数民族における宗教信仰の伝播とその特徴などが述べられている。またイスラーム教の中国への伝来と新疆ウイグル自治区地域におけるイスラーム教の受容についても取り上げられている。この文献は、筆者がウイグル族におけるイスラーム教の受容、及びウイグル文化の形成とイスラーム教の関係を明らかにすることで参考にした文献である。

何星亮の『新疆民族伝統社会與文化』(2002)では、古代社会組織を家庭や婚姻と宗教信仰の3部に分けて、新疆ウイグル自治区の各少数民族の伝統社会と文化について検討してい

る。まず、ウイグル族の歴史における社会組織について考察を行っている。具体的には、民族と文化の特徴、民族の呼び名と民族の起源、古代部落の組織構成と政治・法律的制度などを検討している。次には、ウイグル族の家庭と婚姻をテーマに家庭の類型、婚姻制度、親族制度と人生儀礼について取り上げている。最後に、ウイグル族の早期宗教というテーマで、トーテム崇拝、呪術、動物崇拝とシャーマニズム信仰について述べられている。これらの研究は筆者の研究にとって、非常に参考にはなるが、ウイグル族の伝統文化に大きな影響を与えたイスラーム教についてさらに深く検討を行うことが必要であると考えられる。

『新疆的歴史及民族與宗教』(呉福環 2009)は、①新疆は以前から中国の一部である、②新疆は以前から多民族居住地または開発地域である、③新疆は以前から多文化と多宗教が併存してきた地域である、④中国共産党が新疆の各民族の根本的利益の象徴であるという4部から構成されており、そのうち③において、新疆の宗教の沿革を述べている。本書は中国政府の国家統一戦略の基本を取りあげて、各民族が団結して国家分離の防止を目的にした著書であり、現在中国における少数民族の学校教育における道徳教育または国民教育の根本でもあると考えられる。

『絲綢之路宗教文化』(周菁葆、邱陵 1998)では、宗教と文化をキーワードに、現在の新疆ウイグル自治区地域の通称である「西域」という名称を用い、シルクロードの要衝であった中央アジア地域、すなわち新疆地域における宗教の歴史的起源、基本的特徴や文化依存などについて考察を行っている。各章立てを、シャーマニズム文化、ゾロアスター教文化、マニ教文化、道教文化、景教文化、仏教文化イスラーム教文化とし、各宗教の「西域」地域における受容過程、相互関係、発展と変化や消滅について考察している。本書は、筆者が宗教文化の実態と変容過程を考えるうえで参考にした著書である。しかし、シルクロードといった幅広い地域に関わる各宗教文化についての考察が主になっているために、筆者はウイグル族における宗教信仰の過程について絞り込んで、深く考察を行う必要があると考える。

宗教についての先行研究では、新疆ウイグル自治区における各宗教の形成過程を歴史的資料に基づいて考えることが多く、現在この地域で生活している人々の宗教信仰の度合い、そして現代教育の宗教信仰への影響を明確にすることがなかった。そこで筆者は現代教育と宗教信仰の相互関係について考え、宗教文化の変容について考察を行うことにする。

3. 文化人類学、教育と言語文化、教育と宗教文化に関する研究

丸山孝一の『周縁文化の視座民族関係のダイナミックス』(2009)第3部においては、中国少数民族文化の維持と変容をテーマに、中国の 56 の民族を同定した経緯と民族認定の基礎を考え、中国の民族概念を明らかにすると同時に、「中国民族」という言葉は、今日の「中華民族」のことであり、中国国内の各民族の総称であると解釈している。中国の民族識別工作において、漢民族ではない人々に対しての識別作業が行われ、55 の少数民族に属さない人々が漢民族とみなされたことを指摘し、中華民族概念のダイナミズムを明らかにしている。中国少数民族の文化と教育の諸問題の枠組において、国家は自身の存続を図るために、学校教育制度を普及させているのが普通であり、特に多民族社会において、民族文化の相互関係及びドミナント文化とマイノリティ文化の関係調整が重要な課題となると指摘する。中国の少数民族政策、新疆ウイグル自治区における民族学校の教育状況、具体的には(首府の)ウルムチ市内にあるカザフ族学校である第二中学の実態を取り上げ、ナショナリズムと民族文化について検討している。民族教育は日常生活の中で、例えば、食事や、宗教儀礼の過程として、あるいは民間の年中行事のかたちで、民族文化が若い世代に具体的個別的に内在化され、民族アイデンティティが形成されることが自然であると考えている。特に近年、中国全土を1つにするナショナリズムが中華民族としての統一を促進し、内包する諸民族の調和を図る政策が積極的に進められるなかで、民族間の文化的相違は、例えば、料理、衣服、音楽、舞踊などの諸側面において調和され、異文化の多様性を内包する中華民族の複合性が肯定されるようになった。しかし民族文化の特徴を規定すると考えられる言語と宗教のことになると、少数民族言語教育の相対的意義が認められながら、漢語教育が強調されている中で、少数民族文化は異文化の境界領域に置かれていると指摘している。これらは、筆者の研究において、文化と教育の関連性を考える手本となる研究方法であり、ウイグル文化と、国民教育とも言える「双語教育」の関連性を明確にするための重要な文献である。しかし、新疆ウイグル自治区の主要な民族であるウイグル族の「双語教育」の各段階に焦点を当てることがなく、漢語習得と民族文化の維持や継承の関連性を取り上げてはいない。

日本におけるエスニックマイノリティの文化伝達と継承については「滞日ユダヤ人家族における民族文化の伝達・継承に関する一考察」(佐藤泉 1988)研究がある。佐藤泉はこの論文において、海外駐在員家族という短期滞在型滞日ユダヤ人家族が出身国のユダヤ人コミュニティを離れ、日本という異質な文化の中でどのように民族文化の伝達・継承を行っているのかを検討している。具体的には、伝達者自身の意識・態度形成、伝達者から継承者への意図的伝達、継承者の意識・態度取得過程、また、継承者側からの伝達者への働きかけと言った伝達

者と継承者の相互作用と民族アイデンティティの形成などを分析項目として取り上げ、国に依存しない民族独自の少数派の教育方法の一例として、滞日ユダヤ人にとって民族アイデンティティの習得にかかわる重要な3つの場面、すなわち、1. 家庭、2. 日曜学校、3. 国際学校、におけるインタビューおよび日曜学校における子供の発言を基に文化について考察を行い、以下のような結論に至っている。短期滞在という特徴を持った滞日ユダヤ人は、出身国のユダヤ人コミュニティから離れた日常生活の中で、家庭内儀礼などを保持する傾向があり、両親が子供の前で行って見せて習慣づけることが、文化の伝達・継承の上で重要である。したがって、家庭内で両親による伝達が行われる限り、子供は民族文化に対する肯定的な態度を獲得していくだろう。そして、子供が日曜学校に通うことで、学んだことを話したり、成長を示す発言をしたりすることは、親としての自覚を促し、両親の民族的アイデンティティの強化につながる、と佐藤は言う。

筆者は以上の先行研究をふまえ、本論文において、少数民族が自らのコミュニティから離れることではなく、少数民族地域にマジョリティのエスニックグループが入ることによっておこる文化接触の中で、少数民族文化の継承と維持について考えることにする。

第3節　論文の構成

第1章では、新疆ウイグル自治区の概況、特に中国における多民族地域である自治区の地理的特徴、民族の分布、主な民族であるウイグル族の概要、暮らしについて述べ、本論の現地調査地である、巴音郭楞（バインゴリン）モンゴル自治州の首府であるコルラ市の主な状況、民族構成、各少数民族の生活をについて記述する。

第2章では、中国の少数民族政策と少数民族教育政策、すなわち、民族教育政策の基本構想と内容及びその実施状況について述べる。

第3章では、新疆ウイグル自治区における少数民族教育政策と「双語教育」の沿革を幼稚園、小、中学校、高校と大学における状況について述べる。

第4章では、ウイグル族の言語文化を中心として、教育状況を手掛かりとして現代ウイグル族の言語文化の変化を明らかにしていく。そこで、現地調査地のコルラ市におけるウイグル族を対象とした、言語使用意識と言語使用状況についてのアンケート調査とインタビュー調査を取り上げる。

第5章では、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の宗教文化に着目し、イスラーム教の受容を追い、イスラーム教のウイグル文化に与えた影響を検討し、現代ウイグル族の日常生活の中におけるイスラーム教の様子について考える。

第6章では、 ウイグル族の宗教文化の変容を明らかにしていくために、調査地のコルラ市で行ったアンケート調査とインタビュー調査を取り上げることで、生活様式の多様化に伴う宗教文化の在り方について考え、人々の宗教信仰の度合いと変化、「双語教育」の宗教文化の変容に与えた影響について考えることにする。

終章では、本論の総括と、今後の研究課題と展望を述べる。

第4節　本論文の表記法

本論では、地名、人名と固有名詞は、日本人にも漢字でなじみがあるものは、漢字で表記する。例えば、毛沢東、朝鮮族など。カタカナとしてなじみがあるものはカタカナで表記する。例えば、モンゴル、ウルムチなど。

新疆ウイグル自治区における地名などは初出で、中国で用いられる漢字表記にウイグル語の音に基づくカタカナをつけ、2度目以降はカタカナのみ表記することにする。たとえば庫爾勒市（コルラ市）。古い地名については、参考文献を重視し、以前の研究で取り上げられたとおりに表記する。例えば、高昌（エディクッド）、サマルカンドなど。

人名については調査対象者のプライバシー保護のため仮名で表記する。歴史的人物の名前は、先行研究で取り上げられているものを参考にして表記する。例えば、サトゥク・ブグラ・ハン、トゥグルック・ティムール・ハンなど。

現在中国では、漢族と55の少数民族が識別されている。公認されている民族は「〇〇族」と表記し、初出で漢字にカタカナ表記の音訳を記し、2度目以降はカタカナのみで表記することにする。例えば維吾爾族（ウイグル族）など。

参考文献は、日本語文献、中国語文献、ウイグル語文献に分けて書くことにする。日本語文献を著者名のアルファベット順に、中国語文献は中国語のピンイン読みのアルファベット順に、ウイグル語文献はウイグル語読みのアルファベット順にしたがって書くと同時に、ウイグル語ラテン文字(UKY[11])でウイグル語文献の記入を加えることにする。

[11] ウイグルコンピューター文字という意味である Uyghur Kompyuter Yezighi の省略。

第1章　新疆ウイグル自治区と調査地の概要

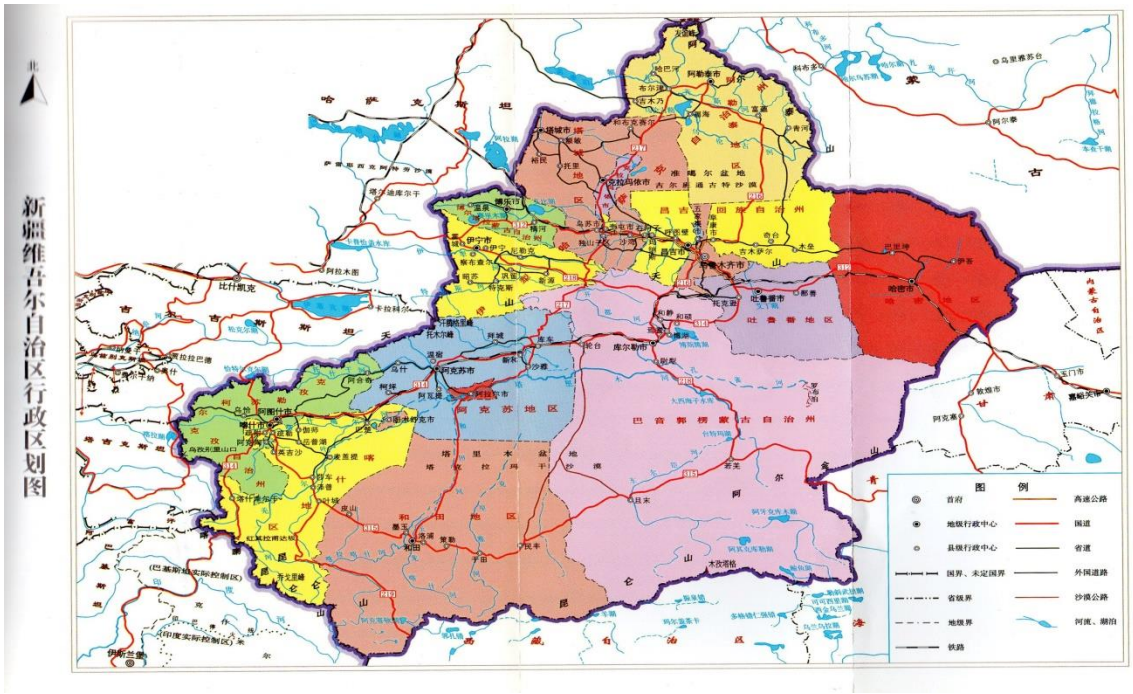
新疆ウイグル自治区は古代から多文化が存在する多民族地域であるとされている。本章ではまず、新疆ウイグル自治区全地域の地理や少数民族事情について概観し、次に本論の土台となる現地調査地域について述べる。

第１節　新疆ウイグル自治区の概要

1．地理的特徴

新疆ウイグル自治区は中国の西北国境に位置しており、総面積は166.49万㎢で中国の総面積の6分の1を占める。国内ではチベット自治区、青海省、甘粛省と接しており、国外では東北から西南まで、モンゴル共和国、ロシア、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インドなどの国と隣接し、中国の国境線の4分の1を占める。新疆ウイグル自治区は古代から西域とよばれ、シルクロードの要衝や東西文化の交流地として栄えており、多言語(シナ・チベット語族、アルタイ語族、インド・ヨーロッパ語族)が、また多宗教(仏教、イスラーム教とキリスト教)が共存した地域であり、今でも言語文化と宗教文化が複雑な地域であると考えられている。

（図1）新疆ウイグル自治区の地図



出典:『新疆維吾爾自治区概況』民族出版社(2009)

新疆ウイグル自治区の北と北東部にはアルタイ山脈が、南部には崑崙（コンロン）山脈が位置し、天山山脈が東西に横断している。アルタイ山脈と天山山脈の間には准喝爾(ジュンガール)盆地が、天山山脈と崑崙山脈との間には塔里木(タリム)盆地があり、人々はこれらの盆地の周りに位置しているオアシスで生活している。一般的には天山山脈の北部の地域を北疆、南の地域を南疆と称している。新疆全地域の平均温度は、冬8℃、夏 12.2 となる。北疆は、温寒帯に位置し、年間平均温度は冬6℃～－7℃であり、冬の最低温度は－20℃～－15℃になる。南疆は温暖帯に位置しており年間の平均温度は 10℃以上になり、夏の平均温度は23℃～27℃になる。日差しが強く湿気が蒸発して空気の湿度が低くなり、昼と夜の温度差が20℃以上になることで果物の糖分が高く、中国全土においても新疆の果物が甘いことで有名である。新疆各地域の果物というと、伊寧（グルジャ)のリンゴ、コルラの梨、庫車(クチャ)の杏、喀什(カシュガル)のザクロとホータンのクルミが美味しいと言われている。新疆ウイグル自治区では農業と畜産業が盛んであり、小麦、トウモロコシ、大麦、大豆などの温帯農作物が生産されている。90 年代から綿花生産が盛んになり、新疆綿は現在世界各国に輸出され、農民たちの収入の大部分を占めている。そして羊、山羊、牛や馬の牧畜に従事し、羊毛やカシミヤの生産に伴う繊維工業(北疆のセーター、南疆の絨毯)も長い歴史を持っている。

中国改革開放政策の実施により、南疆におけるタクラマカン砂漠の石油と天然ガスの開発が進み、西部大開発政策の主な内容である「西気東輸」[12]の起点になったことや、その設備建設が完成することで、中国の石油、天然ガス開発の基点となっていった。近年、新疆の観光資源の開発も進んでおり、キジル千仏洞などの宗教遺跡、交河古城や高唱古城の都市遺跡、仏教寺院やモスクなどの宗教遺跡の整備がこれにあたる。したがって、これらの遺跡や宗教施設と、少数民族の伝統文化の象徴である食文化、歌舞芸術、服飾などの観光資源の開発が注目されることになり、中国の漢民族地域(内地)からの観光客も大幅に増えることになっている。

2. 少数民族の分布

新疆ウイグル自治区は多くの少数民族が集中して生活している多民族地域である。現在この地域では、主にウイグル族、漢族、カザフ族、回族、キルギス族、モンゴル族、タジク族、シボ族、満州族、ウズベク族、ロシア族、ダウル族、タタール族の 13 の民族が生活している。多言語、多宗教が併存していることで生じる言語文化と宗教文化の複雑化に伴う多くの問題

[12]「西の天然ガスを東に」、新疆の天然ガスを上海に送るパイプライン建設のことを指す。

も存在している。新疆ウイグル自治区総人口は 2322.54 万人で、うちウイグル族の人口は 1127.19 万人であり、総人口の 48.53%を占めている。漢民族の人口は 859.51 万人であり、総人口の 37.01%を占めている[13]。

以前は経済社会や交通発展の規制により、新疆の人口は北疆よりも南疆に集中していた。改革開放以前、南疆の人口が多く北疆に少ないという状況であったが、改革開放以降は北疆の人口が増加することとなった。南疆にはウイグル族が多く、北疆には主にカザフ族と漢族が多く生活している。

(表1)新疆ウイグル自治区における各民族の構成

民族	2008 年の人口（人）	2008 年占める割合(%)	2014 年人口（人）	2014 占める割合(%)
新疆総人口	2095.19 万人		2322.54 万人	
ウイグル族	965.06 万人	46.0%	1127.19 万人	48.53%
漢族	823.92 万人	39.3%	859.51 万人	37.01%
カザフ族	148.39 万人	7.0%	159.87 万人	6.88%
回族	94.29 万人	4.5%	105.85 万人	4.56%
キルギス族	18.18 万人	0.87%	20.24 万人	0.87%
モンゴル族	17.71 万人	0.85%	18.53 万人	0.80%
タジク族	4.48 万人	0.21%	5.01 万人	0.22%
シボ族	4.24 万人	0.20%	4.35 万人	0.19%
満州族、	2.56 万人	0.12%	2.81 万人	0.12%
ウズベク族	1.61 万人	0.08%	1.85 万人	0.08%
ロシア族	1.16 万人	0.06%	1.20 万人	0.06%
ダウル族	0.66 万人	0.02%	0.69 万人	0.03%
タタール族	0.47 万人	0.02%	0.51 万人	0.02%

「アナトラ・グリジャナティ 2013「新疆ウイグル自治区における少数民族双語教育」関する研究」と(図2)をもとに筆者が作成」

[13]2015 年 10 月 1 日に行われた新疆ウイグル自治区設立 60 周年記念展覧会において人口統計が発表された。http://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MjM5NzE1Mzk2MA==&mid=210548382&idx=1&sn=03136bb655db49cd955d121b7ffdd31a&scene=2&srcid=1001SEzYUbfNbK6cjqNu4S46#wechat_redirect 2017 年 10 月 2 日アクセス

3.　新疆における少数民族の多彩な暮らしと習慣

前述したように、新疆ウイグル自治区における 13 の民族は、それぞれの言語を使用し、それぞれの宗教を信仰していることで、中国全土においても文化的に多彩であるという特徴を持っている。それらの民族のうち漢族、回族と満州族は国語としての漢語を使用し、他の民族はそれぞれ独自の民族言語と固有の文字を持っていることで言語文化が多様化している。そして中国においてイスラーム教を信仰している 10 の民族のうち8民族が新疆に存在することと同時に漢族の仏教、モンゴル族のチベット仏教なども存在しており、宗教文化も多様化している。言語の面では、漢語を含むウイグル語、カザフ語、キルギス語、モンゴル語が新疆人民代表大会における正式の使用言語となっており、自治区各地方のテレビ局において漢語、ウイグル語の他に、その地域で主に用いられている言語で放送されている。以下、新疆における各民族の生活ついて簡単に述べる。

服飾：少数民族の伝統的な服飾には各民族の特徴がはっきり見ることができるが、近代化に伴い大きな変化が現れた。民族衣装の特徴は素材、デザインに現れる例として、ウイグル族のシルクを素材とするアトレスの衣装などが挙げられる。近年では、女性の衣装はスカートからパンツに変わり、帽子やスカーフをしなくなり、ジーパン姿の女性も多く見られるようになっている。しかし、2010 年以降はスカーフを特にヒジャプをする女性がよく見かけられるようになっており、これは民族問題が意識されることにより、自分のアイデンティティを確立させる動きであるという見方がある。このことについては第5章において詳しく考察する。

飲食：乾燥少雨地域に住む新疆の各少数民族は、小麦を主食としている。牧畜をすることで、肉料理を好み、乳製品を多く摂取する。新疆全地域はイスラーム教の教徒が多く住んでいる地域であり、イスラーム教を信仰している人々は豚肉を食べることをタブーとしている。近年漢民族人口の増加に伴い、野菜の摂取量が増えており、野菜の炒めものを多く食べるようになっている。

新疆最多の民族ウイグル族

新疆ウイグル自治区の南疆のホータン、カシュガル、阿克蘇(アクス)と、新疆東部の哈蜜(クムル)、吐魯番(トルファン)地域には、ウイグル族が集中している。ウイグル族は、イスラーム教を信仰し、自らの言語―ウイグル語とウイグル文字を使用するトルコ系民族である。現在の総称である「ウイグル」の名称は、1921 年から使われ始めている。1921 年当時のソ連アルマ・アタ(現カザフスタン)で開催された東トルキスタン代表者会議において、新疆地域出身の参加

者たちが、会議で自分たちを指し表す名称がなかったことから、ロシア人の古代トルコ・ウイグル語学者 Sergei Marof の発案に基づき、「ウイグル」を自己の民族名称として採用したのである。このように現在ウイグル族とされている人びとは、トルコ系オアシス定住民族であると同時に、政府の承認によって作られた集団とされている[熊谷瑞恵 2011:38]。ウイグル族については、本章の第3節においてさらに詳しく述べる。ここでは新疆におけるウイグル族の他の少数民族の分布と生活について述べることに留まる。

新疆における漢民族

漢民族は最も早く新疆地域に定住した民族であり、天山南北の各地域において、兵団として駐屯し、開墾する人や商業に従事していた。現在新疆の北疆と東部地域に比較的多く住んでいる[新疆維吾爾自治区概況 2009:20]。1949 年の中華人民共和国設立の時点では、漢民族の人口は新疆総人口の 6.7%しかいなかったのに対して、2008 年の『新疆統計年鑑』によると漢族の人口は 820 万人あまりで、総人口の 39.3%にまで増加している。しかし、2014 年の最新人口統計によれば、漢族の人口は 859 万人あまりで新疆総人口の 37.0%を占めており、2008 年の統計より下回っている。これによって、新疆ウイグル自治区における漢民族の人口は 2008 年までに大幅に増加したが、政治的要因、経済的状況と民族問題に伴って、増加率が 2008 年以降少数民族人口の増加より下回っているという見方もある。

新疆ウイグル自治区における漢民族は、言語の面ではウイグル語など現地の言語の影響を受け、言語の借用も現れている。例えば、皮牙子，恰麻茹，恰衶[14]などが挙げられる。新疆で生活している漢民族が使う漢語は「新疆話」[15]と言われている。生活習慣も現地の影響を受け、主食が小麦になったり、羊の肉を好んだりする傾向もある。しかし近年、漢民族人口の増加によって、漢語が各少数民族の言語に、漢民族の生活習慣が各少数民族の生活習慣に影響するようになっている。それらは少数民族の漢語習得に伴うことであると考えられることが一般的であり、これらについて、第4章と第5章で考察を行うことにする。

カザフ族

[14]皮牙子(piyazi)，恰麻茹(qiamagu) 、恰衶(qiapan)というのは、それぞれウイグル語の玉ネギ、かぶと上着の音にあてた漢字である。
[15] 新疆ウイグル自治区で使われている漢語という意味である。

新疆ウイグル自治区におけるカザフ族は、北疆の伊梨(イリ)カザフ自治州、木塁(モリ)カザフ自治県と巴里坤(バリコル)カザフ自治県に分布しており、総人口は 159.87 万人で新疆の総人口の 6.88%を占める(2014 年)。歴史的には、カザフ族は水と草を追いかけて移動生活を送ったとされるが、現在は大部分が定住している。カザフ族はアルタイ語族のトルコ語系に属するカザフ語を使用し、イスラーム教を信仰する民族である。新疆地域に住むカザフ族は、カザフスタンに住むカザフ族がキリル文字を使用していることに対して、アラビア文字を基礎とするウイグル文字を使用している。以前から畜産業が主な生業であったため、肉料理、乳製品が主な食品である。カザフ族はかつてシャーマニズム信仰、仏教と景教[16]を信仰しており、15～16 世紀にイスラーム化している。これによって、イスラーム教の各儀式が民族儀式や生活習慣となっている。カザフ族は血縁関係を重視しており、各家庭には必ず系譜が受け継がれている。そして各家庭の成員は、本家の系譜を7世代まで遡って覚えることが決められている。近年では、遊牧生活の定住化に伴い、生活様式の多様化と言語状況の変化が起こり、伝統文化の変容も現れつつある。

回族

回族はイスラーム教を信仰し、漢語を話す中国特有の民族である。回族は中国の特有の地理的環境、民族構造と伝統文化の条件の下で形成された独特の民族であり、「回回」「回民」と呼ぶこともある。新疆における回族は清王朝時代に新疆地域に移動したとされる。彼らは主に農業を営んでおり、畜産業と手工芸業にも従事している。回族は漢語を使用しており、中にはアラビア語やペルシア語からの借用語が今でも残っている。回族は新疆に移住してから、現地の各民族言語の影響を受け、独特の「新疆回族語」が形成されている。彼らが新疆で生活した長期的歴史の中で、イスラーム文化の影響と漢文化の影響また各少数民族文化の影響を受けることで、独特の風俗習慣や儀礼が行われるようになっている。

キルギス族

新疆ウイグル自治区のキルギス族は南疆における克孜勒蘇(キズルス)キルギス自治州に集中しており、カシュガル、阿克蘇(アクス)地域にも少数分布している。2014 年の時点で総人口は 20.24 万人で新疆の総人口の 0.87%を占める。キルギス族もイスラーム教を信仰するアルタイ語族のトルコ系に属するキルギス語を共通語として使用する。彼らは畜産業を営むと

[16] ネストリウス派のキリスト教を指す。

同時にある程度農業にも従事しており、以前は遊牧生活をしていたが現在では定住化が進んでいる。キルギス族もカザフ族と同じように家系譜を重視しており、家族全員が3世代さかのぼって覚えることが求められている。キルギス語とカザフ語の語彙や文法はかなり似ており、通訳なしでも両民族の言語交流はスムーズにでき、生活習慣、食文化や服装においても共通する部分が多く存在する。

モンゴル族

新疆のモンゴル族は、北疆の博爾塔拉(ボルタラ)モンゴル自治州と巴音郭楞(バインゴリン)モンゴル自治州に集中して生活している。モンゴル族はアルタイ語族のモンゴル語系に属するモンゴル語使用し、チベット仏教を信仰する。総人口は 18.53 万人であり新疆の総人口の 0.80%を占める。モンゴル族の一般的な家庭は親と子供2世代から構成されており、子供が結婚してから別々の生活を送ることになる。以前はモンゴルパオ(ゲル)が主な住宅様式であったが、現在では一軒家やマンションなどに定住することが増えている。彼らは以前、火葬、天葬と土葬などの形で葬儀を行って来たが、現在では遊牧民や農民たちは土葬、都市部の人びとは火葬することが普及している。モンゴル族はモンゴル語とソグド文字基礎として作られたモンゴル文字を使用しており、特に中国の改革開放政策の実施に伴い、言語の面では漢語の影響を大いに受け、漢語からの借用語が多く存在する。

第2節　調査地の概要

1. 所在地と民族分布

本論文の調査地は新疆ウイグル自治区における天山山脈の南部に位置する、自治区の首府であるウルムチから 470km離れているバインゴリンモンゴル自治州の首府コルラ市である。

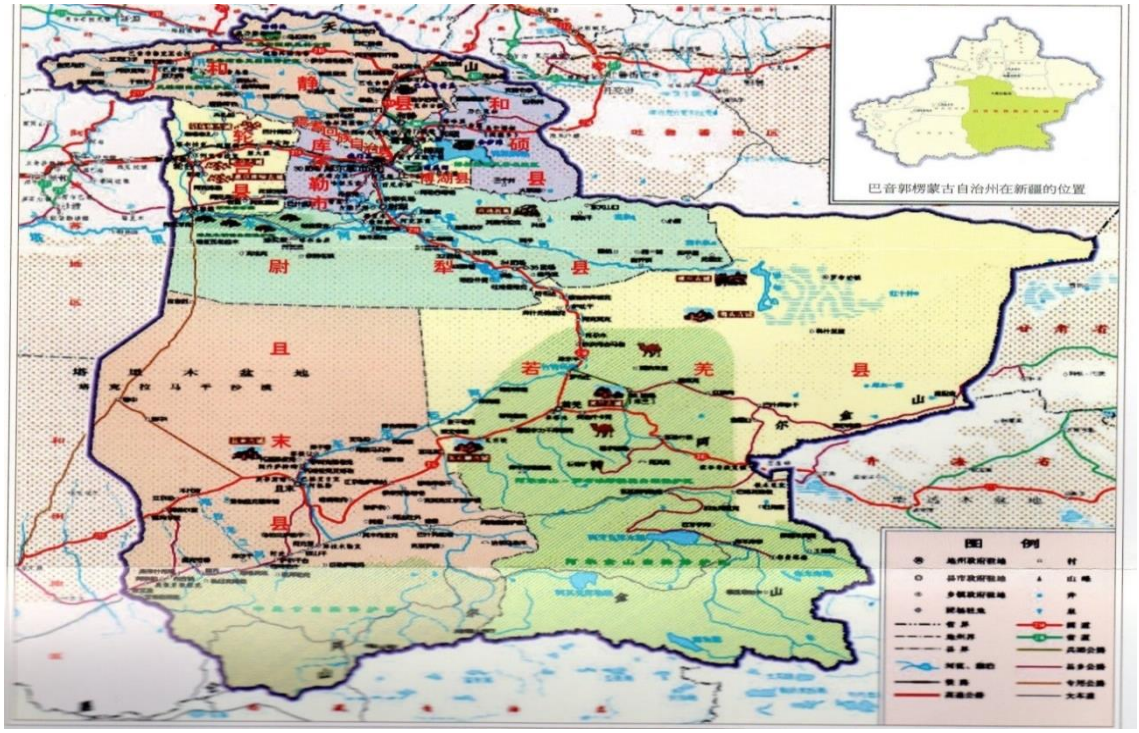
バインゴリンモンゴル自治州の面積は新疆の総面積の四分の一を占めており、中国全土においても面積が最大の行政区である。自治州内に1つの市(首府のコルラ市)と8の県(内1つの県は焉耆(カラシャハル)回族自治県である)があり、総人口は 2015 年末, 125 万 3812[17] 人であった。バインゴリンモンゴル自治州ではモンゴル族、ウイグル族、漢族、回族などの多くの民族が生活しており、モンゴル族は、和静(ハージン)県、和碩(ホシュット)県と博湖(バグラ

[17] http://www.xjbz.gov.cn/bzgk/index.htm　2016 年 9 月 23 日アクセス。

ッシュ）県に集中しており、回族はカラシャハル県に集中し、コルラ市などのその他の地域には漢族やウイグル族が集中して生活をしている。

コルラ市の総面積は 7116．9 平方メートル、総人口は 48 万人(移動人口を含めない[18])であり、ウイグル族、漢族、モンゴル族、回族などの少数民族が生活している多民族地域である。コルラ市における少数民族人口は総人口の 29.4%を占める[19](2008 年)。1979 年にコルラ県がコルラ市として成立し、南疆鉄道の開通とタリム石油開発によって、自治州の政治、経済、教育と文化的中心都市として発展し、新疆地域においても経済、社会、教育などの各面では確実な発展を遂げている都市である。

(図3)バインゴリンモンゴル自治州行政地域の地図



出典:『巴音郭楞蒙古自治州概況』(2009)

中国の開発政策が実施されることで、コルラ市における漢民族の人口が急速に増加した。これによって、新疆の各地域と比べても、自治区の首府のウルムチ市に続いて漢語教育がいち早く強化される都市とになった。コルラ市では「双語教育」が行われたことで、漢語と自らの

[18] 2013 年にはコルラ市人口は移動人口を含めて 100 万人近くあるとされる。
[19] 「庫尔勒市人民政府网站」 http://www.xjkel.gov.cn/zjkel/kelgl/29568.htm 2016 年 9 月 23 にアクセス

母語ができる「双言語人」や「双文化人」の育成も新疆各地域よりも早く実現したと考えられている。このように、該当都市で新疆の他地域に先駆けて文化変容が起こっているため、コルラ市のケースは新疆各地域で今後起こり得る変化のモデルケースとして捉えることができると考えられる。そこで筆者は、本地域を調査地と定め、まず、多民族地域の言語教育のあり方を明らかにし、漢民族が多く存在する地域の言語使用のあり方を明確にする。次に、漢族、ウイグル族、モンゴル族と回族などの多民族が存在することによる、言語文化と宗教文化の多様化が出現する考え、文化の変容について検討し、新疆における言語と宗教を核としたウイグル文化の変容について考察を行う。

2. 調査地の生業と暮らし

コルラ市の都市建設面積は 45 ㎢ 、9つの農村行政、2つの町行政と5つの農業牧畜園芸行政がある。主な産業は農業であり、農地面積は 3.99 万ヘクタール、小麦やトウモロコシを生産している。その他に、紅花生産と牧畜も行われており、羊、山羊、牛と馬の牧畜が盛んである。特にコルラ市の梨は新疆全地域だけではなく中国全土でも有名であり、毎年漢民族居住地域に大量に輸出をしている。孔雀川は都市を横断しており、そしてバインゴリンモンゴル自治州にある博斯騰湖（バグラッシュ湖）旅行区域、鉄門関水力発電所と同じく観光スポットとしても人気を集めている。近年コルラ市の新しい都市区域の建設に伴う道路建設などが行われて、新疆ウイグル自治区の第2の都市となっている。

コルラ市には旧バザール区域と新バザール区域という2つの繁華街が存在しており、ウイグル族を主とする少数民族が旧バザール区域に、漢民族は新バザールという新しく建設された都市の中心部に住んでいる。旧バザール区域では屋台が繁盛し、特に夏になるとウイグル族の経営する屋台が多く出て、そこに買い物や食事に来ているウイグル族の人々を大勢見かけることができる。

第3節　ウイグル族について

1.　ウイグル族の歴史的沿革

ウイグル族はトルコ系の民族であり、中国の新疆ウイグル自治区内のタリム盆地周囲や天山北方の地区で生活している。新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の総人口は 1127 万人余りであり、新疆の人口の 48.5%を占める（2014 年）。1960 年代に新疆から多くのウイグル族が旧ソ連のうち、現在のカザフスタン、ウズベクスタン、キルギスなどの中央アジア各国の地

域に渡っていたが、現在は彼らの次世代がその国々で暮らしている。本論文におけるウイグル族の人口、言語文化や宗教文化についての研究は、新疆地域におけるウイグル族だけについて行う研究である。ウイグル族は中国の古代民族の一つであり、4～6世紀に出現したとされる。中国の歴史書では「袁紇」(北魏)、「韋紇」[20](隋)、「鉄勒」、「突厥」[21]そして「回紇」「回鶻」[22](唐、宋)、「畏兀爾」(元、明)と称されており、これは各時代における「Uighur」の漢文音訳である[曹紅 1999:14]。605～618 年に回紇と呼ばれるようになり、7世紀以後から彼らの勢力が徐々に強大化し、8世紀の 40 年代に強大な「回紇」汗国を打ち立てた。「Uighur」に対しては多くの呼び方があったが、 809 年に「回紇」という漢字音訳は「回鶻」にほぼ統一されることになった。一時は「回紇」汗国の勢力はモンゴル草原から天山一帯まで拡大したが、9世紀の 40 年代になってから、モンゴル草原での天災等の原因や、キルギスによる軍事攻撃により、北方草原における「回紇」汗国が滅亡し西域に移動することになった。一部の「回紇」人は、現在のトルファン一帯で高昌王国[23]を、一部はカシュガル一帯でカラハン王国を設立、現地で生活していた他の古代民族と融合して最終的に現代ウイグル族が形成された［楊聖敏 1991:216-222]。 元、明時代にはウイグル族を“畏兀児”と称し、清王朝時代が新疆を統一してからは、ウイグル族が信仰していたイスラーム教を「回教」と称したため、ウイグル族のことを「回回(Huihui)」と呼ぶようになった。そして、それを回族と区別するために、ウイグル族の宗教上層の人々及び年上の人たちは頭に幅が広いガーゼのターバン「サッラ」を巻きつけたので「纏[24]回」と呼んだ。中華人民共和国が設立してからは、ウイグルの人たちの中で「纏回」「纏頭」[25]という呼び名は侮辱の意味を含んでいるという意見が出たために、廃止された。1935 年、

---

[20] 「袁紇」は中国語ピンインでは Yuanhe (イウアンへ)、 「韋紇」は Weihe(ウェイへ)と発音され、ウイグル語の「オグズ」からの音訳表記であるという。[安瓦爾・拜図爾、海詐薩・斯迪克 1999：457]

[21]「鉄勒」と「突厥」は統一語言の Türük (チュルク、トルコ) の音訳表記であるが漢語文献では別々の語彙であるとして併用することで、「突厥」は政治的意味を指し、主に一つに汗国とその汗国の統治部落を指すように、鉄勒」は民族の名称を指すようになった。「突厥」汗国の立国は「鉄勒」に頼って実験したので「突厥」汗国は「鉄勒」の国であるという。[楊聖敏著 1991：41 - 42]

[22] 552 年「突厥」汗国が設立し、分散していた「鉄勒」の部落を支配もとにおき、色楞格河と土拉河流域の「回紇」の九姓(トックズ　オグズ)部落も自らの支配下に置いた。

[23] ウイグル語の文献において、高昌王国はウイグル語で Quju (クジュ) 王国、または、Eduqut(エデゥクト)王国ということもある。

[24] 纏 (chan) は中国語で巻くという意味である。

[25] 現在ウイグル語には「纏頭」の中国語の読み Chantou を借用してچەنتو(chanto) という

新疆地方政府が各民族代表大会を召集し、「維吾尔」という漢字音訳の名称を使用することが定められた[張碧波、董国 1993:1145－1146]。

2. ウイグル語と文字について

現代ウイグル語は、ウイグル族が互いにコミュニケーションをする最も重要な言語である。ウイグル語はアルタイ語族の東トルコ語系に属する。またウイグル語は、ウイグル文字の発展段階によって、古代ウイグル語時代(オルホンウイグル語時代)、中世期ウイグル語時代、近世ウイグル語時代(チャガタイ語時代)、現代ウイグル語時代に分けられる。

古代ウイグル語とは、4世紀から7世紀までにウイグル族が使用した言語を指す。この時代でオルホン川やイエヌセイ川[26]周辺に立てられた石碑に書かれた文字をオルホン-イエヌセイ文字[27]と称する。これらの石碑のウイグル語文献により、この時代のウイグル語をオルホン時代ウイグル語と称することもある[阿米娜・里提甫、亜熱・艾白都拉 2003:1]。

中世期ウイグル語は、8世紀から10 世紀まで用いられたウイグル語を指す。この時代では、現在のトルファン周辺で仏教を信仰する高昌王国と、カシュガル周辺でイスラーム教を信仰するカラハン王国が成立した。高昌王国時代には仏教の影響で、漢語で書かれた多くの文献がウイグル語に訳された。カラハン王国時代にはイスラーム教の影響でアラビア語やペルシア語からウイグル語に大量の語彙が流入し、古代ウイグル文字である回鶻文字が放棄され、アラビア文字を使うことになった。

近世ウイグル語時代(チャガタイ語時代)は、13 世紀の半ばから 19 世紀の終わりまでに用いられたウイグル語の時代を指す。13 世紀の半ばから15 世紀の半ばまで、チャガタイ語が形成される段階であった。このとき高昌王国時代のウイグル語の語彙とカラハン王国時代のウイグル語の語彙が混用され、それらにアラビア語やペルシア語から多くの語彙が流入した。15 世紀の中期から17 世紀の初めまでが、チャガタイ語が安定して使われ、最高に発展した時期であった。この時期に哲学、文学、歴史、医学に関する多くの文献が記され、アラビア語やペ

差別的意味を持つ言葉が存在する。

[26] モンゴル共和国を流れる川である、アルハンガイ県のハンガイ山脈を源に発し、セレンガ川に合流する。イエヌセイ川はロシアを流れる川であり、北極海に流れ込む最大の水系である。

[27] オルホン - イエヌセイ文字は形がテゥルック - ロニック文字に似ていることでテゥルック - ロニック文字と称することもある。

ルシア語の優れた作品がチャガタイ語に翻訳された。17 世紀の初めから 19 世紀の終わりまでに、チャガタイ語は次第に現代ウイグル語へと変化し始めた。

現代ウイグル語は、オルホン時代のウイグル語、中世期時代のウイグル語、チャガタイ語のそれぞれの優れた伝統を維持し、音声、語彙や文法が構成されたウイグル語である。現在使われているウイグル族共通語の形になったのは、1930 年代以後のことである。1935 年に新疆ウイグル自治区で出版事業が始まってから、現代ウイグル語は急速に発展した。そして短大生や大学生に教えるために、『現代ウイグル語』という教科書が出版された。この教科書はウイグル語自らの特徴による 32 の音声、その音声を記録するための 32 の文字、また文字の書き方、発音の仕方が定められた書籍であり、これによって現代ウイグル語を系統的に学ぶことができるようになった。今日、現代ウイグル語は、ラジオ、テレビ、映画と舞台そしてマスメディア部門や学校教育などにおいて、普及して実用化されることで、ウイグル族の共通語として使われる民族言語となった。

周知の通り文字は、言語が形成されてから言語を記録するために作られた記号である。ウイグル族はかつて漢字、マニ文字、ソグド文字を利用してウイグル語を記録していた。4、5世紀ごろにソグド文字を基礎としたウイグル文字を創造して使い始めた。この文字はウイグル語の音声特徴に従って右から左に、上から下に書く古代ウイグル文字すなわち回鶻文字であり、ウイグル族の間で 10 世紀まで使われた。10 世紀、イスラーム教を信仰するようになったカラハン王国時代に、イスラーム教の影響でソグド文字を基礎とした古代ウイグル文字が放棄され、アラビア文字を基礎としたウイグル文字が形成された。1930 年と 1951 年の2度にわたって文字改革が行われ、今の現代ウイグル文字が形成された。その文字は現在でもウイグル族の間で使用されている。1965 年にラテン文字を基礎とした新しいウイグル文字「新文字」とアラビア文字を基礎したウイグル文字「老文字」を同時に使い始めた。この新文字は 26 個のラテン文字に6個の非ラテン文字を加えた全部で 32 の文字がある新ウイグル文字である。1976 年新疆ウイグル自治区政府が「ウイグル老文字の使用を停止する」という決定を出したが、「新文字」を読めない人が多く、また教師、印刷設備、管理部門でも全面的に実施することができず、反対意見が起こった。そのため 1979 年 11 月に「新、老ウイグル文字を同時に使用する」と言う報告を採択したが、今度は、2種の文字を使うことにより、混乱が起こった。そこで 1982 年に新文字の使用が停止され、老文字を回復させ全面的に使用することになった。

3. ウイグル族の暮らし

ウイグル族は長い歴史的過程の中で、特定の歴史、経済、政治、宗教、文化と地理的環境の影響を受けたことで、独特の生活方式が形成された。伝統的生活方式は一種の文化形態であり、居住、飲食、服飾、交通と消費などに見ることができる。

生活方式　住宅、服装、飲食

新疆ウイグル自治区のウイグル族の大部分はタリム盆地、トルファン盆地とクムル平原における都市や村において、農業、畜業、手工業や商業に従事して生活している。農業では主に小麦、トウモロコシ、綿花を栽培する。また野菜、メロンや西瓜などの農業副産品も生産する。ウイグル族の祖先が遊牧民族であるため、4700 年前から畜産業に従事したという説もある。ウイグル族は、以前から馬に乗って羊、牛、山羊などの家畜を飼い、肉を食事に、動物の皮を服飾用に加工して使っていた。梨、りんご、葡萄、杏、イチジク、石榴、胡桃などの果物は新疆ウイグル自治区の主な農産物である。ウイグル族の手芸業の中では、羊や山羊の毛で作った絨毯とシルクで作ったアトレスシルクが有名である。

ウイグル族はイスラーム教を信仰しているため、住宅の形式はペルシアやアラビアの影響を受けており、大部分の住宅が四角形で、天窓がある。果物を干すために屋上を平らにし、干し杏、干し葡萄などの産物を作る。家の前に庭があり、野菜や花、果樹を植える。夏の強い日差しを弱めるために庭に葡萄棚を作るのが、ウイグル族の住宅の特徴であるとも言える。近年高層ビルが増えることで庭づくりができない家庭も多くなっているが、家の中をイスラーム形式の伝統的な方法でリフォームすることが目立ってきたという。

ウイグル族の服装というと、男性は膝までの長さの上着(コート)を、女性は長いワンピースを着ることが一般的である。男女とも帽子[28]をかぶることが多く、夏は「花帽子」[29]冬は「皮帽子」[30]をかぶる。女性はスカーフを頭に巻くこともあり、現在では帽子よりもスカーフを用いる女性の方が多くなってきている。近年では、ウイグル族の女性たちの間で、ズボン姿が多くなり、「ドッパ」とスカーフをしない若者が増えている。

ウイグル自治区では、農業生産が主な産業であり、次に行われているのが畜産業である。「主食」は小麦で作った「ナン」であり、新疆のどこに行っても色んな形、色んな味の「ナン」を

[28] 帽子はウイグル語で「ドッパ」という。
[29] 刺繍した花柄の帽子である。ウイグル語では Badam doppa（バダム　ドッパ）という。
[30] 動物の皮で作られた帽子である。ウイグル語では Qulaqcha（クラクチャ）という。

食べることができる。食カテゴリーの認識について考えたときに、小麦文化の最も東に位置すると言われているウイグル族が食べる「ナン」は、日本で「主食」といわれているごはんと同じものなのか、小麦食品は米のようではなく別個の食事間の中に独自の位置づけを持っているではないのかという問題が生じるが、このことに対して熊谷瑞恵は『食と住空間に見るウイグル族の文化』においてウイグル族の食事を以下のように考察する。ウイグル族が作る「ナン」は長く保存できるのでより多く作って食べることに関して、食卓に出した分が食後に残ったとしても困らず、「ナン」専用の布に包まれて積み上げたまま放置されるので、いつでも食べることができ、食べきる必要がないものである。「ナン」を食べることはウイグル語の食事ということに相当しない[熊谷瑞恵 2011:73]。また、ウイグル族の子供たちが遊ぶ時に「友達になろうよ、ナン1つあったら、一緒に食べよう」[31]という歌が歌われる。この歌1つとってみても、熊谷氏が指摘するように、ナンは単なる食物というだけではない、特殊な位置づけがなされていることが分かる。副食は牛肉と羊肉であり、もともとは野菜を食べることは少なかったが、現代では漢民族の食文化が次第に流入してきた結果、野菜を炒めて食べることが多くなり、麺の上に野菜炒めを乗せたラグメン(涼麺)と麺と野菜を一緒に炒めたソメン(炒麺)なども主食になっている。「ポロ」[32]ウイグル語では Polo と称する)という米料理もあるが、米は毎日食べないので、主食とはならない。

倫理道徳、儀礼、祭りとタブー

ウイグル族は、「君臣、親子、夫婦、長幼」という倫理道徳を大切にする。倫理道徳観念の中では、親子関係を一番大事にして親を尊敬し、親が教えた通りに行動する。どんなに生活が貧しくても、親の面倒を見るのが子供としての責任であると考えられている。例えば、家に上がる時や、家族みなで食事する時は年上から始めるということが決められている。ウイグル族の間では、「親が幸せになるように祈ってくれると幸福になれる。親に対して悪いことを行い、親から呪われると永遠に不幸になる」と言われている。夫婦関係では、夫は家の大黒柱であり、妻は夫の言うとおりに子供を育てる。夫にたてついてはいけない、お互いに尊敬し、幸せで円満な生活を送るのが大事だとされている。ウイグル族の礼節は比較的に簡単で、目上の人に

[31] 「Adash Adash bolayli,Bir nan tapsaq teng yeyli」というウイグル語の訳である。
[32] スペイン料理であるパイリアに似ており、パエリアが海鮮を使うことに対して、ポロは羊の肉と野菜使用して炊き込まれる料理である。

出会ったときに「アッサラーム・アライクム」[33]と言って礼をするのが普通であり、目上への尊敬、目下への心遣いは家庭教育の重要な内容である。イスラーム教は犯罪者を厳重に処罰すると言う戒律があったため、かつてイスラーム教を盛んに信仰しているウイグル地区では「道に落ちている物を拾う人もなく、夜、戸締りする家がない」というほど治安が良かったと言われている。

ウイグル族の祭りは全てイスラーム教と関係がある。主要なものは「ロザ祭り」と「クルバン祭り」である[34]。イスラーム暦で毎年9月1日から 30 日間が「ラマダン」月で「ラマダン」開けの 10 月1日(2016 年であれば7月 10 日)が「ロザ祭り」となる。「ロザ祭り」から 70 日後が「クルバン祭り」である。「ラマダン」の間は 10 歳以上の男女は日が昇っている間は飲食することはできず、日が沈んでから飲食をするという決まりがある。またウイグル族はイスラーム教にしたがっているため、豚を育てたり、豚肉を食べたりすることは禁止されている。

婚姻と葬式

婚姻

ウイグル族は、結婚を人生の中の大きな喜びだと考えている。ウイグル族の結婚式では、まず、「ニカフ」をする。「ニカフ」とはイスラーム教の聖職者である「アホン」が担当し、婚約者2人で塩に付けた「ナン」を食べる儀式であり、それが済んでから、結婚祝いの宴会が始まる。塩に付けた「ナン」を食べるのは、ウイグル族がイスラーム教を信仰するようになる前からあった伝統的な習慣であると考えられている[阿不都熱依木・阿西木 1993:62]。 塩は全世界の人類に対して非常に貴重なものであり、ウイグル族も塩があったため人類は生存することができたと考える。また「ナン」はウイグル族の生活の中で、なくてはならない主食である。だから「ニカフ」の内容として塩とナンを選択するのは、深い意味を含んでいると考えられている。

葬儀

ウイグル族の葬式はイスラーム教式で行われる。まず、遺体を洗って、モスク内にある共同で使う遺体用の寝台「タウット」におき、コーランを読んでから埋葬する。亡くなった人のことを思い続けて忘れないために、3日目、7日目、40 日目、1年目に親戚と知り合いの人々を呼ん

[33] アラビア語で「神の平和をあなたに」という意味であり、イスラーム教徒の挨拶言葉である。
[34] ウイグル族の「ロザ祭り」は、断食開き祭のことを、「クルバン祭り」犠牲祭を指す。

で簡単な料理を食べながら死んだ人のこと思い出す儀式「ナズル」をする。またお祭りのときや、木曜日にお墓（ウイグル語ではマザルという）に行く習慣がある。

まとめ

本章では、本論の調査地である新疆ウイグル自治区は、中国の内陸部におけるウイグル族や漢族、カザフ族などの多民族がともに生活している地域であり、かつて多言語や多宗教が存在したことで、言語文化や宗教文化が複雑であることを述べた。また、新疆の主な民族であるウイグル族について述べることで、ウイグル族がアルタイ語族の東トルコ語系に属するウイグル語を使用し、イスラーム教のスンニ派のムスリムであることを取り上げた。さらに、ウイグル族がイスラーム教を信仰してから、アラビア語、ペルシア語から多くの語彙が借用され、現在も存在していること、近年中国の最多の民族である漢族からも多くの語彙が借用されることで、ウイグル族の独特の言語文化が存在すると同時に、イスラーム教を規範にした宗教文化が存在することを取り上げた。最後に、筆者がフィルドワークを行った、新疆の南部に位置しているコルラ市の地理的状況や、民族構成を述べることで、本論文で行う研究の前段階を踏むとした。

第2章　中国の少数民族政策と少数民族教育政策

第1節　中華人民共和国民族区域自治法について

1949 年に中華人民共和国が成立してから、中国の民族平等、民族団結、民族区域自治や各民族の共同繁栄と発展といった民族政策が確立された[劉維新主編 1995:731]。同年9月 29 日に公布された「中国人民政治協商会議共同綱領」において、「中華人民共和国の各民族は平等である、どの民族に対しても差別や抑圧することを禁止する」と決められ民族平等が強調された。この共同綱領は、中華人民共和国の「憲法」が成立して現在までに幾度か改訂されたが、そのいずれにも同様の規定が掲載されてきた。それと共に、中国の「憲法」では 「民族の団結を破壊する、民族分裂を起こす行為を禁止し、民族団結を保護する中で、大民族主義に反対する。主に、大漢族主義に反対するとともに地方民族主義にも反対する」などの内容が決められ、民族団結が強調された。

中国では、民族区域自治は民族問題を解決する基本的政策であり、中国の基本的政治制度であると考えられている。1949 年「中国人民政治協商会議共同綱領」では、「各少数民族地域では、民族地域自治を実行し、居住した民族人口の多寡と地域面積の大きさにより、各種の自治機関を設ける」ことが定められた。また、民族区域自治は「憲法」に記載され、1952 年に「中華人民共和国の民族地域自治を実施する綱要』が発布された。民族区域における地方の構成、類型、区域境界、行政地位、名称などについての規定が行われた。

中華人民共和国の民族区域自治法の序文には、「中華人民共和国は、各民族が共同に創設した統一した多民族国家である。民族区域自治は我が国の民族の問題の基本的政策であり、国家の一種の政治制度である」とされている。

「民族区域自治法講話」[35]では、「民族区域自治法」を公布することの意義を以下のように述べている。「我が国は統一した多民族国家である。各少数民族は長い歴史の中で、我が国の光り輝く歴史を共に築いてきた。しかし、以前は階級問題や、民族問題が存在したことで、各民族の平等が実現できなかった。1952 年に各少数民族地域において「中華人民共和国の民族区域自治法」を実行することが定められた」[加帕爾・斯拉木、玉素音・哈徳爾 1985]。そして、「民族区域自治法の根本的な目的は、1. 国家統一と自治の関係を正しく取り扱う。2. 一般的な状況と特別な状況の関係を正しく取り扱う。3. 民族地域における各民族の関係を正しく取り扱うことであるとい

[35] 加帕爾・斯拉木、玉素音・哈徳爾よってウイグル語に翻訳され、1985年2月に出版されている。

う[加帕爾・斯拉木、玉素音・哈徳爾 1985:9-13]。「中華人民共和国の民族区域自治法」では、少数民族の教育や宗教信仰について以下のように書いてある。第 1 章の第 10 条において、「民族区域における自治機関、各民族が自らの言語を使用・発展させる権利や自らの風俗習慣を維持させる、もしくは、改良させる権利を保証する」。そして、11 条において、「民族区域における自治機関は、各民族の国民の宗教を信仰する自由を保証する。どのような社会組織に、または、個人に対して宗教信仰を勧める、もしくは放棄させることを禁止し、国は普通の宗教活動を保護する」と明確にしている。そして、37 条では、少数民族教育についても「民族区域における自治機関は、少数民族に対して9年の義務教育を普及させ、民族教育を発展させる。特に、少数民族の生徒を募集する学校や教育機関は、可能な限り少数民族言語を使用し、少数民族言語を教授用言語とするべきである。状況によって、小学校の低学年から漢語の授業を行い、全国共用の「普通話」を普及させるべきである」[36]と書かれており、少数民族の言語教育の在り方について、漢語教育の必要性を打ち出している。

第2節　中国の少数民族地域における民族教育政策

中国では、一般に中華人民共和国の成立前や改革開放時代から平等団結的な民族政策が実施され、少数民族の文化、風俗習慣と言語を尊重してきたと考えられている。1935 年、毛沢東は「各少数民族の文化、宗教、習慣を尊重し、彼らへの漢語学習を強制するのではなく、自らの言語文字を使用した民族教育を行うことを尊重する」[37]と言った。中華人民共和国成立以後すぐに民族政策がシステム化され、「平等、団結、お互いに助け合うという民族関係」、「各民族の共同の繁栄を促す」(「憲法」1982 年)、「各民族の平等、団結と共同に繁栄させるという原則を実施する」(「民族区域自治法」1984 年、2001 年)ことは、中国の民族政策の基本的精神であるとされた。中国少数民族教育政策の内容として挙げられるのは、民族平等政策を基礎とした教育政

[36] 1984年5月31日に第六回全国人民代表大会第2回会議において実施された。2001年2月28日第9回全国人民代表大会20回会議において、中華人民共和国民族区域自治法を改正することに関する決定によって改正した。[中華人民共和国民族区域自治法2001:22]

[37]毛澤東「中国共産党維第6回中央委員会第6回次拡大会議にて講話」1938年

策[38]である。少数民族地域は漢民族地域より経済的にも文化的にも「遅れている」という考え方から、漢民族との格差をなくし、民族平等を実現するための優遇政策[39]がとられている。

そして、中国政府は少数民族の伝統文化を重視し、各民族の言語や文字を発展させる教育政策を進める一方で、少数民族を国民国家へ統合させる教育政策も実施している。それについてあげられるのは「共通語採用措置」[40]と「文字改革運動」[41]、そして「2言語併用教育政策」[42]がある。

1992 年 10 月 21 日中国国家教育委員会が「全国少数民族教育発展・改革指導要綱」を打ち出し、「1990 年代における我が国の少数民族の教育発展の目標、方針、任務と政策を明確にし、少数民族の教育の発展を推進する」ことを目的とした。そして少数民族に対する教育政策の「地位と役割、目標と任務、措置と条件」が指示された。この要綱では、「我が国は統一された多民族の社会主義国家である」ということを改めて確定した上で、国家の少数民族の教育発展を促進することが、経済の発展戦略の第2段階の目標を実現し、各民族が共に繁栄することに対して重要な意味を持つ」と強調した。

第3節　民族教育政策の基本的構想、内容と実行状況

1．　民族教育政策の基本的構想と内容

1949 年に中国人民政治協商会議で採択された「共同綱領」では、各少数民族は、自らの言語や文字、自らの風俗習慣、及び宗教信仰を保持し、発展させる自由があると明確に規定された。

---

[38]漢民族地域と同時に義務教育制度が導入されていた。

[39]「国は、民族学院を創設し、高等学校に民族組、民族予科を設け、少数民族の学生を専門に募集・採用するとともに特別の学生募集、特別の定員配分投与方法をとることができる。高等学校及び中等専門学校では、新入生の募集・採用にあたって、少数民族の受験生に対しては、採用基準及び条件を適宜緩める。」というものである。

[40] 北京語を共通語と定め、共通語の普及を少数民族地域で積極的に進めることを奨励するという政策。

[41] 文字をもたない少数民族に対して文字を創立する、文字をもつ民族に対しては文字改革を行うなどの少数民族文字を漢語ピンイン化する政策。

[42] 少数民族に対して、民族語と漢語の2言語教育、あるいは2言語を用いた教育を実施するという言語政策であり、すなわち双語教育政策である。

1954 年に制定された「中華人民共和国の憲法」では各民族の平等、団結、民族言語を発展させるという条項があった。後に「中華人民共和国の民族区域自治法」でも、「憲法」に従って、各民族の言語や文字の尊重、使用と発展という点に対して、明確な規定が制定された。中国の民族言語政策の基本的内容を要約すると、各民族は自らの言語や文字を使用し、発展させる権利があり、国家は少数民族の自らの民族言語と文字を使用・発展させることを支持するということである。その具体的内容は以下の通りである。

1)国家は少数民族の言語や文字を尊重する。少数民族の言語と文字は、政治上、法律上では漢語と平等であり、少数民族の言語や文字を差別すること、少数民族の言語や文字を使う人を差別することは許されない[金星華 2005:26]。2)少数民族の自らの言語文字を使うことは自由であり、他の民族の言語文字を使うことも自由であり、どの言語の使用を選択することも平等である。3)国家は少数民族の自らの言語文字を使用し、発展させることを保障する。民族自治地域の「自治法」では、公務生活、社会用語、学校教育、個人生活などの領域では、民族言語文字を使用することを保障する。4)国家は少数民族の自らの言語を発展させることに手伝いする。民族言語の各領域における使用と発展を支持することを含め、民族言語に対して調査や研究を行い、少数民族の文字改革を手伝う。5)国家は民族学校の自らの言語文字を使うことを支持する。民族言語文字の人材を養成すること、民族言語文字について調査、研究を行い、民族言語文字を最も発展させることを支持する。6)国家は各民族が互いに言語や文字を学び、互いに交流することを支持する[金星華 2005:27]。

民族言語政策は、国家の各法律と民族自治地方の条例で表している。例えば、少数民族の自らの言語や文字を使用する発展させることに関する政策、「憲法」では「各民族は自らの言語文字を使用し、発展させる自由がある」(第四条)と規定している。「自治法」では、「民族自治地方の自治機関は、その地方での各民族の自らの言語文字を使用し、発展させる自由を保障する」(第十条)と規定している。

中華人民共和国が設立後、1954 年5月にアラビア文字を基礎として作られた現代ウイグル文字[43]の基準が交付され、12 月に、その基準に従ったウイグル語の小説、詩などの出版が始まった(図3、図4を参照)。1958 年からの中国で行われた文字改革運動に伴って、1965 年にラテン文字を基礎として作られた、ウイグル文字[44]の使用が始まった(図5参照)。

[43] この現代ウイグル文字は「ウイグル老文字」称される。
[44] このウイグル文字は「ウイグル新文字」と称される。

(図3)アラビア文字を基礎とし、最終的に改良されて 1954 年に公布された現代ウイグル文字の基準

1954 ـ يىلى ئۇيغۇر ئەدەبىي تىلىنىڭ ئىملا قائىدىسى تۈزۈلـ
گەندىن كېيىن باشلاندى. بۇ چاغدا تۈزۈلگەن ئۇيغۇر ئېلىپبەسى
30 ھەرپتىن تەشكىل تاپتى.

جەدۋەل: 1954 ـ يىلى تۈزۈلگەن ئۇيغۇر ئېلىپبەسى

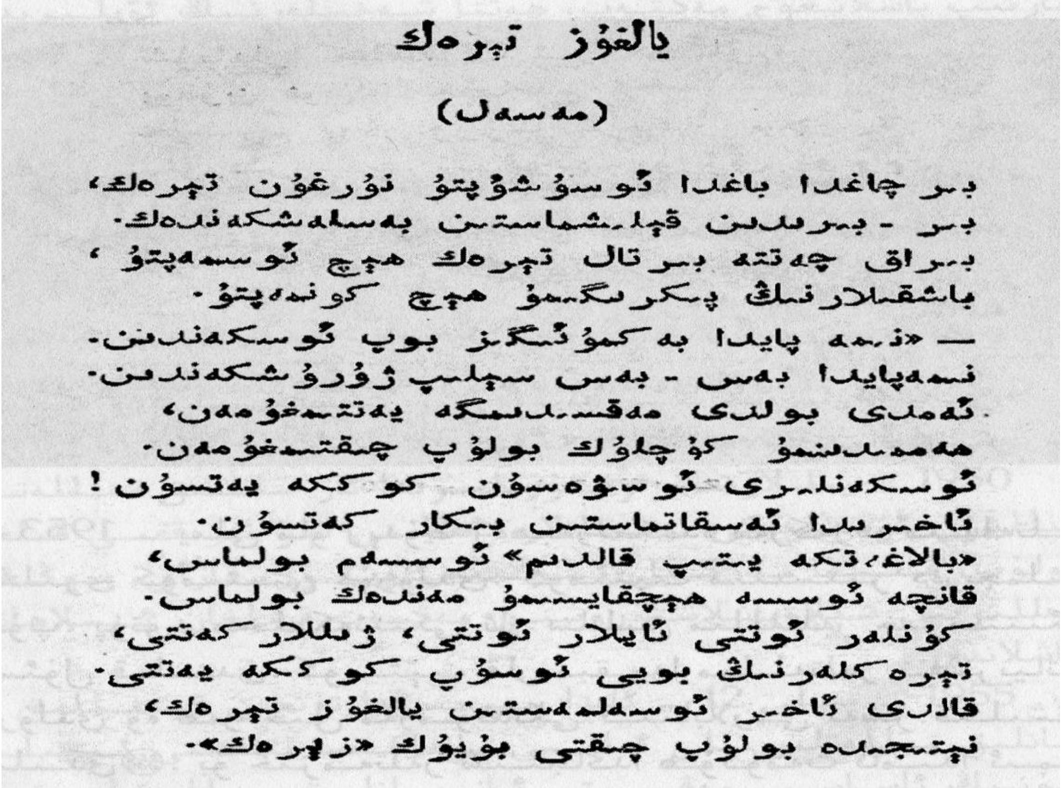
تەرتىپى	يالغۇز	باش	ئوتتۇرا	ئاياغ
1	ئا، ا			ـا
2	ب	بـ	ـبـ	ـب
3	پ	پـ	ـپـ	ـپ
4	ت	تـ	ـتـ	ـت
5	د			ـد
6	ئە، ە			ـە
7	ج	جـ	ـجـ	ـج
8	چ	چـ	ـچـ	ـچ
9	خ	خـ	ـخـ	ـخ
10	ھ	ھـ	ـھـ	ـھ
11	ئو، و			و
12	س	سـ	ـسـ	ـس
13	ش	شـ	ـشـ	ـش
14	ر			ـر
15	ز			ـز
16	ژ			ـژ
17	ۋ			ـۋ
18	ئۇ، ۇ			ـۇ
19	ف	فـ	ـفـ	ـف

464

出典:『現代ウイグル語』新疆人民出版社[2012:464]

図3のウイグル文字を 1965 年までに使用するが、1965 年からラテン文字を基礎とした「新ウイグル文字」の使用が決定された。この文字にウイグル語に存在していない音声表記を採り入れ、漢語からの借用語を漢語のピンイン表記で記すという規定があったため、使用中に不便があったということで、1984 年 1 月から、ウイグル「老文字」に戻ることになった。

（図4）1954 年 12 月に出版されたアラビア文字を基礎とする現代ウイグル文字の文献



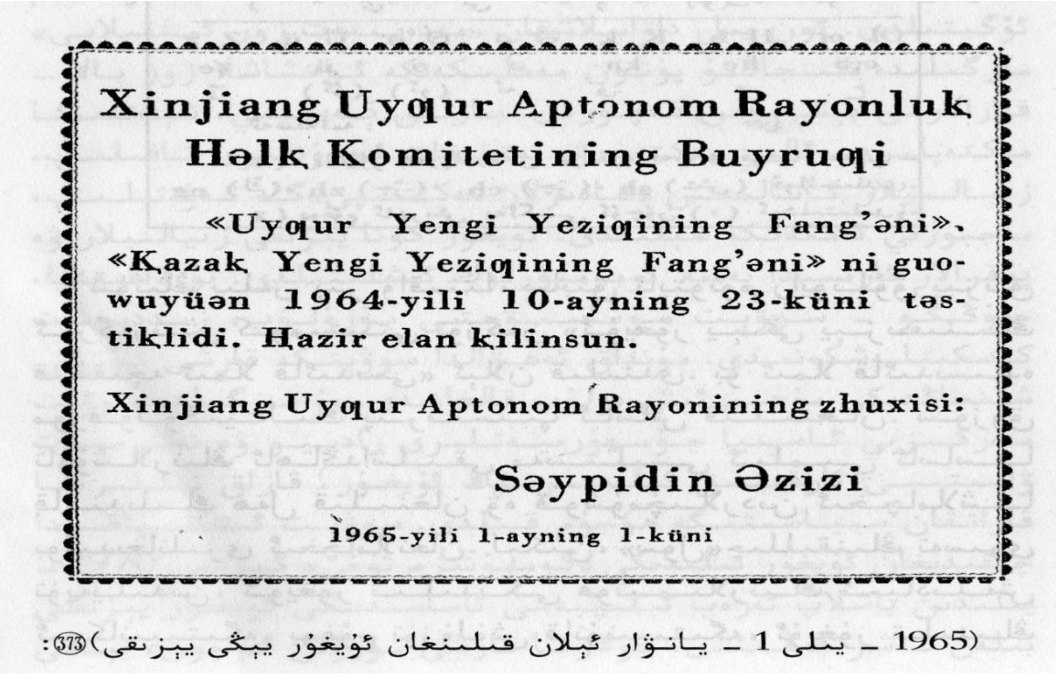
يالغۇز تېرەك

(مەسەل)

بىر چاغدا باغدا ئۆسۈشۈپتۇ نۇرغۇن تېرەك،
بىر - بىرىدىن قېلىشماستىن بەسلەشكەندەك.
بىراق چەتتە بىر تال تېرەك ھېچ ئۆسمەپتۇ،
باشقىلارنىڭ پىكرىگىمۇ ھېچ كونمەپتۇ.
— «نىمە پايدا بەكمۇ ئىگىز بوپ ئۆسكەندىن.
نىمە پايدا بەس - بەس سېلىپ ئۆرۈشكەندىن.
ئەمدى بولدى مەقسىدىمگە يەتتىمغۇ مەن،
ھەممىدىنمۇ كۆچلۈك بولۇپ چىقتىمغۇ مەن.
ئۆسكەنلىرى ئۆسۈۋەرسۇن كۆككە يەتسۇن!
ئاخىردا ئەسقاتماستىن بىكار كەتسۇن.
«بالاغەتكە يېتىپ قالدىم» ئۆسسەم بولماس،
قانچە ئۆسسە ھېچقايسىمۇ مەندەك بولماس.
كۈنلەر ئۆتتى ئايلار ئۆتتى، يىللار كەتتى،
تېرەكلەرنىڭ بويى ئۆسۈپ كۆككە يەتتى.
قالدى ئاخىر ئۆسەلمەستىن يالغۇز تېرەك،
نېتىجىدە بولۇپ چىقتى بۆيۈك «زېرەك».

出典:『現代ウイグル語』新疆人民出版社[2012:467]

（図5）1965 年から使用されたラテン文字を基礎とした新ウイグル文字



Xinjiang Uyƣur Aptonom Rayonluⱪ
Həlⱪ Komitetining Buyruƣi

«Uyƣur Yengi Yeziƣining Fang'əni», «Ⱪazaⱪ Yengi Yeziƣining Fang'əni» ni guowuyüən 1964-yili 10-ayning 23-küni təstiⱪlidi. Ⱨazir elan ⱪilinsun.

Xinjiang Uyƣur Aptonom Rayonining zhuxisi:

Səypidin Əzizi

1965-yili 1-ayning 1-küni

(1965 - يىلى 1 - يانۋار ئېلان قىلىنغان ئۇيغۇر يېڭى يېزىقى)(373):

出典:『現代ウイグル語』新疆人民出版社[2012:487]

2.　民族教育政策の実行状況

1)民族言語文字の大発展時期

1949 年から 1958 年までは民族言語の大いに発展した時期である。民族事務委員会が設立され、少数民族の情況を理解するため少数民族地方に訪問団が派遣された。文字を持たない民族の文字を作るという要求よって、文化教育委員会の中で民族言語文字研究指導委員会を設立し、少数民族の言語や文字の研究が始められた。北京でも中央民族学院の言語学部、民族出版社、中央人民放送局の民族言語放送チャンネル、教育省では民族教育局などの民族言語政策を実行する機構が設立された。

1956 年から 1958 年までに中国科学院の中には、少数民族言語研究所が設立され、少数民族言語について調査を行い、30 種類以上の民族言語と方言に対して調査を行った。また各地方の民族言語機構と 10 種類以上の文字制定計画と文字改革を計画し、実験が始められた。また政治、法律、教育、文化などの分野において、それらに関する法律、規則が制定された。この時期に少数民族学生の数も多く増え、1950 年に小学生、中学生、高校生の数はそれぞれ、94 万3千人、4万 316 人、1285 人であったが、1957 年では、319 万4千人、27 万6千 926 人、1 万6千 101 人なった[金星華 2005:30]。少数民族言語の出版物も大幅で増え、図書、雑誌、新聞は、それぞれ 1952 年の 621 種類 661 万冊、15 種類 169 万冊、14 種類 259 万部から、1763 種類 1462 万冊、35 種類 244 万冊、32 種類 2434 万部に増加した[金星華 2005:31]。

この時期に、1951 年に新疆人民出版社が、1955 年に新疆教育出版社が設立し、初めはウイグル語、漢語での新聞、雑誌などの書籍が出版された。それから、新疆青少年出版社、新疆衛生出版社などが設立され、民族言語での出版が増えることになり、カザフ語、キルギス語、シボ語での出版も実現した。そして、『三国志』、『水滸伝』、『紅楼夢』などの作品のウイグル語翻訳版が次々と出版された。1953 年から新疆省放送局は、ウイグル語、漢語のラジオ放送をはじめた。1972 年に新疆ウイグル自治区で初めてのテレビ放送が始まり、ウイグル語、漢語でテレビ放送が行われた[新疆維吾爾自治区概況:503,505,507]。

2)民族言語文字の破壊時期

1958 年から 1978 年までは中国の各民族の言語や文字が破壊的に打撃を受けた時期である。1958 年から中国で流行っていた「大躍進」と「民族融合要素が成長している」という間違った認識の影響で「民族融合の潮」ができ、各民族はすぐに一体に融合し、民族相違がなくなると考えられた。「文化大革命」の時期に民族政策は、破滅の時期をむかえた。一部の地域では少数民族

言語は差別され、使用することも禁止された。少数民族の言語や文字の翻訳機関、出版社などは閉鎖に追い込まれた。多くの少数民族の文化遺産、古典書籍は「四旧」と言われ、破壊され重大な損害を受けた。1965 年には出版書籍 1964 種類 2480 万冊で、雑誌 36 種類 268 万冊で、新聞は 36 種類 3955 万部であったが、1970 年には、書籍は 312 種類 1331 万冊に、雑誌は 5 種類 93 万冊に、新聞は 5 種類 3262 万部までに減っていた[金星華 200:32]。

3) 民族言語文字の回復・発展の新時代

1979 年から中国の民族言語文字政策は実行されるようになり、民族言語文字が復活して発展し始めた。文化大革命のときに閉鎖に追い込まれた少数民族の言語文字関連機関が再開され、各民族の言語文字に関する古典書籍の収集、整理、出版、研究が行われるようになった。また各少数民族の言語が教授用言語となった小学校から大学校までの教育体制が整えられた。1996 年の統計によると、国内の 13 省、自治区では、21 の民族中学生たちに対して、29 種類の民族文字で教育を行った。10 省、自治区では、民族教科書を翻訳・出版する機関が設立され、毎年 3000 種類以上の、小、中学校の教科書を出版された。中央人民放送局では、5 つ少数民族言語を用いて放送が行われ、自治区、自治州、自治県でも民族言語を用いて、ラジオ番組、テレビ番組が放送されるようになった。少数民族言語を用いる映画、テレビドラマの翻訳部門が再開されたことで、数千本の映画やテレビ番組が翻訳され、少数民族の文化教育方面において大きな影響を及ぼした。新疆テレビ局は 1981 年にはじめて「藍宝石」(サファイヤ)というテレビドラマを、漢語からウイグル語に訳して放送した。現在、新疆テレビ局とウルムチ市テレビ局は、ウイグル語、漢語、カザフ語のテレビチャンネルを設置して放送を続けている。バインゴリンモンゴル自治州テレビ局、コルラ市テレビ局はそれぞれウイグル語、漢語、モンゴル語のチャンネル放送を行っている。

まとめ

「憲法」、「中華人民共和国の民族区域自治法」では、各少数民族が自らの言語や文字を使用し、発展させる権利があると定められており、各少数民族の民族文化の保持に役立つ政策が実施された。それと同時に漢民族に対して、「普通話」を普及させる「共通語採用措置」も実施した。また文字を持たない少数民族に対して「文字改革運動」の実現を目指すこともあった。そして、各少数民族が自らの母語以外に漢語を学ぶという「2言語併用教育政策」を実施し、特に民族言語文字が回復・発展した新時期であると言われる 1980 年代以降から「2 言語併用教育政策」の実施

がさらに強化されるようになった。改革開放に伴って、中国の各少数民族の言語や文字が復活し、言語文化の保持、少数民族のアイデンティティの維持を保護する「憲法」や「民族区域自治法」を実施するという旗を掲げながらも、少数民族が漢語を学び、漢語を使用することを推進させる「2言語教育政策」を実施することで、民族言語の維持と保護に逆影響与える、国民国家への同化を実現さる政策も同時に推進したことであると考えられる。中国では「2言語教育」は「双語教育」とされており、第3章において「双語教育」政策の実施状況について現地調査を踏まえて、詳しく考察していく。

第3章　新疆ウイグル自治区における「双語教育」

第1節　双語教育の導入

1878年、当時の清朝の将軍左宗棠が兵を率いて、当時新疆を統治していたヤークーブ・ベグ政権を滅ぼし、新疆省と称し、新疆地域で義塾を設立し、漢語教育を行った。当時漢語を学ぶ者がコーランを読むことは禁止され、義塾に行って役人になったとしても同じ民族から疑惑の目を向けられるために、義塾に行くことを志願するものはほとんどいなかったと言われている[45]。その清朝が近代教育に乗り出したのは1903年であるとされる。清の時代、1908年にウイグル地域で漢語「学堂」[46]が設立され、漢語・漢字の導入が始まった。当時新疆全地域で600余りの「学堂」が設立され、生徒数は1万5千人だったと言われているが、それがそのまま運営されたとは言えないかもしれない。なぜならばイスラーム社会を否定する漢語教育であれば、ウイグル族は抵抗するため、見せかけの従順さを示すにとどまったのも当然である[47]とする研究者もいる。

新疆ウイグル自治区では、「双語教育」は1950年代から始まった。1950年5月当時の新疆省政府が「新疆の教育改革に関する指示」を発布し、民族言語で授業を行うクラスは、漢語またはロシア語を選択する、漢語で授業を行うクラスは、ウイグル語またはロシア語を選択するという要求を打ち出した。

1963年には民族学校の漢語教科と教育要綱を編纂し、それと共に、漢語教育の実験を始めた。1964年から、新疆大学附属中学校、グルジャ市第六中学校、ボルタラモンゴル自治州第二中学校、ウルムチ市第六中学校では、初めて中学校クラスと高校クラスを設置した。最初の1年間を予備クラスと決め、主に漢語教育を行うことにし、ここからは新疆地域の漢語教育体系の基本が形成された。1966年から文化大革命が始まり、全ての教育事業が麻痺状態に陥り、1977年までは「双語教育」も停滞時期を迎えることとなった。

第2節　改革開放からの双語教育の拡大

---

45 藤山正二郎「漢語バイリンガル教育とウイグル・アイデンティティ」
http://fshaw2uyghur.web.fc2.com/uyghurlanguage.pdf　2016年10月23日アクセス

46 清朝時代まで、教育を行う場所が「学堂」と称されて、中華民国時代で、学校に変わったという。

47 藤山正二郎「漢語バイリンガル教育とウイグル・アイデンティティ」
http://fshaw2uyghur.web.fc2.com/uyghurlanguage.pdf　2016年10月23日アクセス

1978年に中国政府が改革開放政策を開始して以来、新疆ウイグル自治区では1950年から始まった「双語教育」にあらたな動きがあった。同年6月、新疆ウイグル自治区教育委員会が、「民族学校における漢語教育に関する意見」[48]を出した。それは「①漢語科目を民族小中学校の重要な基礎科目とし、小学校3年生から漢語教育を始める。②漢語教師の育成を加速させる。③本職の漢語教師を雇用することに力を入れる。④漢語教育の指導要綱と教材の編纂や出版などに力を入れる。⑤大学や専門学校の民族クラスは、1年間の予科教育（大学入学後1年間漢語語学教育が行われる）が終わって専門教育が始まってから、少なくとも1つの科目の授業を漢語で行う。⑥各民族学校は、様々な方法によって、授業や授業以外の時間を十分に利用して双語教育を実施する」などの指示であった[武金峰2004:8]。

これを皮切りに、民族学校の漢語教育を強化する政策や意見などが次々と公布され、漢語教育は新疆ウイグル自治区おける民族学校の重要な教育内容となった。それと共に中国の改革開放政策のもとで、経済成長に伴い、新疆地域における漢民族の人口が次第に増加し、首府ウルムチなどの中心都市では漢族の人口が少数民族の人口より上回ったことも事実である。

1950年代から始まった「双語教育」は、その内容と形式において大きく変化があり、特に1978年から中国政府が改革開放政策を実施することにより、ウイグル地域における言語教育の新たな動きが始まった。以下、その概要を述べる。

前述のように、1978年6月には、新疆ウイグル自治区教育委員会が「民族学校における漢語教育を強化する意見」を公布した。

1980年自治区教育委員会は、漢語教育要綱を編纂し、小学校から中学校までの7冊の漢語教科書をあらためて編纂した。また、小学校4年から高校卒業までに2000の漢字と3500の語彙を覚えることを漢語科目の目標として定めた。

1982年3月、「民漢兼通[49]」を漢語教育の方針とした。そして、小中学校の漢語教育要綱を改訂し、高校卒業時までに覚える漢字を2500～3000、語彙を4500～5000として定めた。

1982年4月、新疆ウイグル自治区教育委員会は、「民族小中学校の漢語教の育強化に対する意見」を公布した。その内容は、①各教育部門と学校担当者は、漢語教育に十分な注意を払い、漢語教育に対する指導を強化する、②有効な措置を取り、能力がある教師隊を

[48] 意見とは、正式な行政文書の一種である。
[49] 自民族言語と漢語が同時にできるという意味である。

育成する、③優れた漢語教科書を編纂する、④漢語科目のテストにも注意を払うなどである。

1984年、新疆ウイグル自治区共産党委員会は、小中学校の漢語教育政策の基本的要求と目標を出した。内容は、高校卒業までに、3000の漢字と5000～6000の語彙を把握して大学では直接漢語で授業を受けるレベルにまで引き上げ、1995年までは多くの高校生が「民漢兼通」を達成できるというものである。

それからも新疆ウイグル自治区政府、共産党委員会、教育委員会が漢語教育強化に関する意見や規定などが次々と公布したことによって、新疆ウイグル自治区における小中学校の漢語教育は大きな変化や発展を遂げることになった。1992年から、新疆の一部の小中学校では、数学、化学、物理などの科目を漢語で教える実験が始まった。

1997年、国家教育委員会は、「少数民族学校では、中国漢語水平考試(HSK)を実施するという通知」を公布し、1998年から新疆、内モンゴル、チベット、吉林、青海などの地域では、HSK成績を少数民族高校生の大学受験の成績にすることが定められた。

1999年9月、国務院官房の「少数民族地域の人材育成を加速させる」という通知が各教育部門に配布され、教育省は「内地地域では、新疆高校クラスを設置する」という意見を公布した。したがって、2000年秋から北京、上海、南京、杭州、広州などの12都市の15ヵ所において、新疆高校クラスが設置された。内地における新疆高校クラスを4年制と決め、同年、40人の25クラスの1000名生徒を募集した。生徒たちは最初の1年間で漢語を勉強し、3年間は授業のすべてを漢語で受けることが定められた。2004年には、新疆高校クラスの生徒たちは、5600人に達し、2005年になると3075人の生徒が新しく加わった。

新疆ウイグル自治区の各地域では、さらなる漢語教育政策の実施と漢民族人口の急増に伴い漢語の必要性が次第に高まることとなった。各地域は、いろいろと有効な措置をとって、小中学校の漢語教育に力を入れ、漢語教育の強化を民族学校の重要な教育方針として定めた。大学進学や就職の面においても漢語の必要性が高まり、少数民族の間でも積極的漢語を学習する状況が表れるようになった。少数民族の漢語習得により、少数民族と漢族間における交流が深まり、漢文化と接触が多くなったのも事実である。

そこで筆者は、新疆ウイグル自治区における漢語教育の沿革を明らかにすることを目的として、中国の民族政策と民族教育政策の公布と実施について述べることにする。具体的には、新疆南部の都市コルラ市を事例にし、コルラ市の概況や、人口、教育状況すなわち、漢語教育の実態を特に学校教育の面において考えていくことにする。

第3節　事例研究―　コルラ市の場合

コルラ市は、新疆ウイグル自治区の中央部に位置しており、9つの郷、2つの鎮、5つの国有農業畜牧園芸場などが所属している。市内には、新疆生産建設兵団の第2師団本部、南疆鉄路コルラ事務所、タリム油田会社、タリム石油化学工業建設などの司令所が置かれている。

1939年にコルラ県として設立され、中華人民共和国が成立してからバインゴリンモンゴル自治州の政府機関が置かれた。1979年6月、国務院はコルラ市の設立を許可し、1983年までにコルラ市地域が県地域と市地域に分けられ、同年8月に県地域と市地域が合併されることになった[50]。

コルラ市として歩んできた30年間、教育面においては、教科書改革の実施、「双語教育」、「両基」[51]の実施を強化する、民族教育の質を高めることで著しく発展を遂げたとされている[巴州教育文史資料匯編2009:118]。

コルラ市は、①民族基礎教育を発展させるために科学計画を合理化させることを重視する、②「民漢合校」[52]を強力に推進する、③さらに、「両基」実施を強化する、④財政的に民族義務教育を保障する、⑤教育構成を優れたものにし、義務教育の均衡発展を全面的に推進させる、⑥基礎教育または「双語教育」の改革を強力に推進し、民族教育を全面的に促進させる、⑦教師育成に力を入れ、民族教育の質を高める」といったことを教育の歴史的責務として定めた。

1998年「素質教育実施実験市」、2001年自治区の「教科書改革実験市」となり、2006年に「双語教育全面的に実施した模範市」となった。

2004年9月、コルラ市は、新疆地域では幼稚園の段階から「双語教育」を始めることに力を入れ、2008年、農村において小学校入学の2年前から「双語教育」を受ける児童たちの生

---

[50]「庫爾勒市人民政府網」http://www.xjkel.gov.cn/zjkel/kelgl/29568.htm　2016年2月19日アクセス。

[51]「両基」とは、「２つの基本」のことであり、１つ目は、基本的に義務教育を普及させる、２つ目は、非識字者なくすという目標を達成させるということである。

[52] 新疆ウイグル自治区で最初は少数民族の学生が通う「民族学校」と、漢民族の生徒が通う「漢族学校」が存在した。「民漢合校」の推進が進められたことで、「民族学校」に漢民族のクラス設置し、「漢族学校」に少数民族のクラスを設置して「民漢合校」と称するようになった。そして「民族学校」からの「民漢合校」では漢民族の生徒少ない、「漢族学校」からの「民漢合校」では少数民族の生徒の数が少ないという状況が存在している。

活補助金、教科書補助金として年間一人当たり147元を支給した[巴州教育文史資料匯編2009:117]。

2007年は、自治区唯一の「双語マルチメディア教育を実施する実験市」となり、市内の5ヵ所の学校の6クラスを選択し、双語マルチメディア教育を開始し、人、物、財政などの面でも強化した。2008年秋の始業式までには、全市における民族小学校(民漢合校も含める)の1、2、3年のすべてのクラスにDVDプレーヤー、テレビなどの設備を準備してマルチメディア教育を実施し、「双語教育」は新たな段階に入った[巴州教育文史資料匯編2009:121]。

2006年、コルラ市は自治区で初めて、漢語教師の育成基地となり、40歳以下の1385名の少数民族教師に対して漢語化集中育成が行われた。そしてコルラ市師範学院は、新疆の南部地域の教員養成基地でもあった。2006年からは、小学校1年から民族語科目以外のすべて授業を漢語で行うことが始められ、「民漢合園」[53]「民漢合校」の実範が始まった。

2008年、コルラ市の「小中学」[54]は76であり、内「中学」は26校、「小学」は50校である。全市の76の「小中学」の内49校が民族学校であり、全学校数の61%を占めている。民族「中学」12校で全中学校数の44.4%を、民族小学校は40で70.1%を占めている。「小中民漢合校」は17校で全市76「小中学」の19.04%を占めている。全市の教職員数は、4373人であり、内少数民族教職員は1928人で44%を占めている。全市の小中学生の数は、4万9千770人で、内少数民族生徒は1万1千352人で23%を占めている[巴州教育文史資料匯編2009:121]。

コルラ市第一「小学」は、1959年9月1日開校し、バインゴリンモンゴル自治州の付属「小学」であった。1979年にコルラ市が成立してから、コルラ市第一「小学」となった。1982年にこの学校の教職員は、73人で生徒は1333人であったが、2007年には、教職員は178人に、生徒は3240人(内少数民族生徒は512名)になった。2009年には、コルラ市第一「小学」とコルラ市第八「小学」が合併し、「民漢合校」となった。

---

[53]各民族の幼児が民族を問わず同じ幼稚園に通う幼稚園のことを「民漢合園」と称する。従来の少数民族の幼稚園に漢民族のクラスが設置され、一方では漢民族の幼稚園に少数民族の園児が通うクラスが設置されて「民漢合園」となった。よって、以前少数民族の幼稚園だった「民漢合園」には少数民族の園児が多く通っており、以前漢民族の幼稚園だった「民漢合園」には漢民族の園児が多く通う状況が存在している。

[54] 中国では、小学校を小学と称する(コルラ市第二小学など)。日本の中学校に相当する学校を中学と称する。中学に、初中部(中学校部)と高中部(高等学部)が存在し、中学には、高中部がない学校も存在する。本論における事例報告の部分において、○○「小学」、○○「中学」、そして中学の「初中部」もしくは、「初中クラス」と「高中部」、「高中クラス」と称する。

コルラ市第一「中学」は1972年3月に設立され、1974に年は9クラス450名の生徒が学ぶ「初中クラス」だけがあったが、1977年、「高中クラス」が設立された。2001年7月に第二「中学」と合併し、30の「初中」クラスと12の「高中」クラスの2300名(内少数民族生徒は900人)の生徒が学ぶ「民漢合校」になった。この後「高中クラス」の中にあった師範クラスが巴州師範学院として独立した。また、新しくコルラ市第二「中学」が設立されたが、2006年6月に、コルラ市第一「中学」と合併し、2008年には、40の「初中クラス」(内漢族クラス22、民族クラス12、双語クラス6)がある1881の人生徒が学ぶ「民漢合校」の「中学校」部が設立された。

2009年、コルラ市第五「小学」がコルラ市第一「中学」と合併し、市第一「中学」の「小学部」が成立した。この「小学部」のすべてのクラスが「双語クラス」となり、新疆ウイグル自治区の双語マルチメディア教育を実験するクラスでもあった。

以上の流れから、コルラ市が中国の改革開放政策の下で新疆地域において新しく発展した都市であることや、人口の増加に伴い漢民族の人口が7割を占めるようになった都市であることが分かる。したがって、各学校における少数民族の生徒や、教職員の数が漢民族より少ないことや、市政府や市教育局の「双語教育」に対する積極的措置によって、漢語教育の強化が急速に進められたことが分かる。新疆ウイグル自治区各地の地域環境、経済状況、民族構成などの状況は異なっていることで、「双語教育」の実施状況も異なっている。中国の「西気東輸」戦略の実現によって、コルラ市が西部のガス工事の出発地であることで、景気が良くなり、財政状況も向上していた。これによってコルラ市における漢民族の人口が増加し、少数民族の漢民族との交流が盛んになり、漢語の必要性もより早く高まることになった。これを背景にコルラ市は、新疆ウイグル自治区における各都市に比べても、より早く漢語教育の強化を推進させたのである。南部のカシュガル、ホータンなどの漢民族の人口が比較的に少ない、財政状況も厳しい地域では、漢語教育が比較的遅れていることも事実である。将来それらの地域は、政府の各政策が実施されることによって漢民族人口が増加していけば、今後漢語教育は、コルラ市のように進んでいくことが考えられるだろう。

第4節　新疆ウイグル自治区の「双語教育」状況

山下晋司、船曳建夫編の『文化人類学キーワード』の中で、近代国家と学校教育について、以下のように述べられている。近代国家と学校教育は教わる者にとってはとらえにくい、学校教育の目的や役割は、近代国家形成期のために、政府の者の目からすればはっきりしていた。まず国家の版図を覆う共通言語の同一的普及が必要であり、共用語もしくは標準語の確定(こ

れは普通領土内の有力な民族言語や首都圏の方言をもとに創出される)と共に、全国の小中学校にそれを一律に広げていく。共用語もしくは標準語は一方で軍隊内部の意思疎通を可能にし、一方では書き文字の基礎となって公文書を可能にし、官僚制の支えになる。こうした制度の役割に加えて、言語の統一が「我々」という国民意誠の醸成に果たす役割は大きかった。国語ばかりでなく歴史や地理までも中央発信の教科書を用いることは、それぞれの郷土色とそこに育てられてきた歴史観をうすめることとなり、それを国民化の過程と呼ぶことができる［山下晋司、船曳建夫編2008:182」

そこで、筆者は学校教育を中心とし、一方でウイグル族の民族アイデンティティの維持や保護を目的とする「民族教育」と、他方で中華人民共和国の国民として受ける「国民教育」、すなわち、ウイグル族に対する「双語教育」について考えて行くことで、新疆ウイグル自治区の「双語教育」状況を学校と家庭の面から考える。幼稚園[55]から大学までの「双語教育」状況を述べると同時に、幼稚園から大学までの生徒たちを対象に行った調査報告を提出することで、「双語教育」政策が実施されることにより、実際に学校教育の面でどのような変化が出現したかを明らかにしていく。

1．学校における「双語教育」

新疆ウイグル自治区の幼稚園には、小学校入学一年前から通う「学前班」[56]が存在していることから、幼稚園の教育状況も学校教育状況の一部として挙げることにする。

1）幼稚園における「双語教育」

新疆ウイグル自治区では、「双語教育」の度合いが徐々に高まっていくことで、少数民族の漢語教育を早めに開始する、すなわち小学校入学前からの「双語教育」を行うことが重視されるようになった。政府は「双語教育」が比較的に遅れている地域に対して、資金援助することに力を入れた。2005年12月６日に、新疆ウイグル自治区における小中学校の「双語教育」会議が開かれることにより、2006年の9月から幼稚園に通う園児たちが漢語を学ぶことが本格的に始まった。2010年に、新疆ウイグル自治区において、少数民族の幼稚園おける「双語教育」を発展させるために、中国政府が13.9億元、新疆政府が1.28億元の資金を投与した。これらの資金

[55] 新疆での幼稚園は、３歳からの幼児が入園し、「小班」（３～４歳の園児のクラス)、「中班」（４～５歳の園児のクラス)、「大班」（５～６歳の園児のクラス)と「学前班」（６～７歳の園児のクラス)クラスがあり、「学前班」では小学校一年の普通の授業が行われる。

[56] 「学前班」が小学校にも存在しており、幼稚園における「学前班」と小学校における「学前班」のどちらに通わせるかは親の自由である。

は、「新疆ウイグル自治区少数民族学前双語教育発展規劃」[57]によって、カシュガル、ホータン、キズルスキルギス自治州、アクス、伊梨(イリ)カザフ自治州、塔城(チュチェック)と阿勒泰(アルタイ)の7の地域における9の県の幼稚園の「双語教育」事業の建設に当てて、幼稚園の学費、消費、書籍費とその他費用として、毎年一人あたり1810元が援助された。2010年には、自治区内の幼稚園で「双語教育」を受けている幼園児の数は26.4万人であった[58]。

さらに、政府は少数民族の幼稚園における「双語教育」を強化するために、幼稚園の「双語教育」教師を育成することを重視した。2011年に、2786名の幼稚園教師を新しく募集し、各地から集まった幼稚園教師に対して、新疆師範大学において「双語教師育成教室」を開いて育成を行った[59]。まず少数民族の幼稚園で「双語クラス」ができて、次には、漢民族の子供が通う幼稚園と合併し「民漢合園」となった。したがって幼稚園入学時から漢民族と少数民族の幼園児が同じ「民漢合園」に通い、クラスの担当講師が漢語で授業を行うことで、少数民族の子供たちは、幼い時から漢民族の子供と交流して言語使用や、生活習慣においても漢文化の影響を受けるようになったと言えるだろう。

5歳前の幼児期は話し言葉が発達する時期であり、この時期に話し言葉の訓練を行うと最も良い効果が得られる。脳細胞の活性化強め、児童の脳の働きを高めるという考えのもとで、1987年から1989年までを準備段階とし、1989年10月から1992年9月まで、ウルムチ市紅旗幼稚園とウルムチ市第二十小学校で幼児「双語教育」の実験が行われた。ウルムチ紅旗幼稚園では、単語から語句、文章を作り、文章から短い段落を作るという形で、会話練習が行われた。

コルラ市における幼稚園の「双語教育」―事例報告

コルラ市は「双語教育」を1つの教育改革だけではなく、少数民族の教育レベルを高めて、わが都市の人材育成を進歩させ、市民の素質を向上させ、各民族の人口交流を深め、各民族が強調した社会を作る措置であると考えている。そして「双語教育」は新疆の、また祖国の重要な事業であることも明確に記載している[巴州教育文史資料2009:125]。その結果、2006年に新疆全地域において、初めて「双語授業」を実現させたモデル都市の1つであると評価された。

---

[57] 新疆ウイグル自治区の小学校入学前の双語教育を発展させる規定という意味である。
[58] 「新疆教育網」 http://www.xjedu.com.cn/news/2010/0522/163.html　アクセス日 2016 年２月 19 日
[59] 「新疆教育網」 http://www.xjedu.com.cn/news/2011/0130/2625.html　アクセス日 2016 年２月 19 日

2006年に、コルラ市には教育局の管轄下の幼稚園[60]が3か所あり、園児は1346人だった。幼稚園では「小班」、「中班」と「大班」の体育、言語、日常知識、計算、音楽、美術とゲームなどの7種類9冊の教材を基に教育が行われた。2009年に「民漢合園」を設立して少数民族の園児たちに漢語を教えることを実施した。特に会話練習を行って、発音練習に力を入れたという。36か所の民間幼稚園もあり、これらは各地域の民族構成に合わせた「民漢合園」であった。漢民族が多く住んでいる地域では、漢族の園児を多く募集し、少数民族の園児も状況によって募集するという方法をとっていた。

以下では、コルラ市に住んでいるウイグル族の家族にインタビューしたときの親の発言をそのまま述べる。彼らは自分のたちの子供の状況について、以下のように述べた。

事例1）Aさん男性、34歳。コルラ市のある学校で教員として働いている。Aさんは次のように言った。「我々は子供が3歳になってから幼稚園に行かせている。次女を保育費が安いコルラ市が運営する幼稚園に行かせたかったが、募集する園児の制限が厳しく行かせることができず民間の幼稚園に通わせることにした。その民間の幼稚園の家との距離が遠く、送り迎えは大変だが、子供が母語をよく話せるようになるまで、少数民族の園児が多く、少数民族の講師が多く勤めている「民漢合園」に通わせることにこだわった。そこに2年間通ってから家の近くの漢民族の園児が多くいる「民漢合園」に行かせることを予定している。長男も同じ幼稚園に通って、小学校入学の1年前から小学校の「学前班」に通っている。子供たちは幼稚園でウイグル語もよくできるようになったが。今後はやはり小学校に入学したとしても漢語ができなければ、「双語」で行われる授業についていくのが難しくなると思ったので、入学1年前から漢民族が多い幼稚園に行かせることにしている。初めは子供が漢語をまったくできなかったが、通い始めて1年たったところで、漢語の普通の会話ができるようになった。小学校では「双語クラス」に通わせることにしているので、その基礎になると思っている。」

事例2）Bさん夫婦、夫28歳、妻27歳。夫婦とも働いている。「私たちには子供が2人いる。上の子が幼稚園に入る歳になったときに、家の近くに漢族の園児が多く通う「民漢合園」しかなかったので、その幼稚園に行かせた。その幼稚園では「双語教育」を行うということだったが、講師のほとんどが漢族であり、行事もすべて漢語で行われ、その上通う園児の80％は漢族の園児だった。子供が幼稚園を卒業した時、ウイグル語より漢語を流暢に話すようになり、家に帰ってからもウイグル語をあまり話さなくなった。だから、小学校では「民漢合校」の「双語クラス」に

60 市が運営する幼稚園の入園料は、民間の幼稚園より安く設定してある。民間が運営する幼稚園の入園料がより高く、特に漢民族が多く通う幼稚園の入園料が高く設定されている。

入れることにして、ウイグル語も上手にできることを期待していた。しかし、小学校でも「ウイグル語文」という科目の他はすべて漢語だったので、ウイグル語は上手に話せるようにはなっていない。家から少し遠くても、ウイグル族の先生や園児が多い「民漢合園」に通わせていたら、少し変わったかもしれない。今学校の教育状況考えると、子供は母語がきちんとできるようになってから、第2の言語を学ばせるべきであると思い、下の子を通わせたい幼稚園の近くに、引っ越す準備をしている。」

事例3）Cさん、男性29歳。ある貿易会社で勤めている。「私たちは子供を多くのウイグル族が選択している「民漢合校」の「双語クラス」ではなく、漢民族のクラスに通わせたいと思い、幼稚園から漢民族の子供が多い「民漢合園」に通わせることにした。しかし、親戚や知人などウイグル族の人々とよく話し合ったら、彼らは、今小学校の「双語クラス」というが、実際は、先生もほとんど漢族で多くの授業[61]も漢語で行われている。そうすると子供は、小学校卒業の時期に、漢語がよくできるようになる。上に進むと漢語を学習する機会がさらには多くなっている。だから幼稚園くらいはウイグル語であった方がいいと言われた。それで私も入園直前になって、ウイグル族の先生が多い、ウイグル族の園児も多く通っている「民漢合園」に行かせることにした。」

コルラ市における幼稚園にかかる費用は、1ケ月平均600元(日本円で約1万円)であり、それに食費、資料費などを合わせると、700元くらいになる[62]。1つのクラスで40名の園児がいて、2人の先生が担当している。漢民族が多い幼稚園の入園料が比較的高く、月に2500元(約4万5千円)かかるところもある。この幼稚園では、1クラスに8人の園児がいて、授業も本格的にシステム化されている。

インタビュー結果から考えると、コルラ市の少数民族の園児たちは、少数民族が多い地域に作られた「民漢合園」に通うことが特徴であると言える。多くの親は、小学校から「双語教育」が実施されていることで、将来は漢語がよくできるようになると思いながら、子供には小さい時は母語の勉強もさせたいという思い、そして漢民族が多く通う「民漢合園」より入園料が安いので経済的にも助かるということで、少数民族の園児が多く通っている「民漢合園」行かせたいと考えているようである。他には、子供が漢族の園児にいじめられる、言葉がわからないので孤立

[61] 中国では、日本の国語の授業に相当する授業を「語文」といい、漢民族は「漢語文」、少数民族は、例えば、ウイグル族であれば「ウイグル語文」の授業を受けている。

[62] 新疆ウイグル自治区の公務員たちの平均月収は 4000 元とされており、夫婦共働き家庭の一ヶ月収入は 8000 元（日本円で約 13 万円）前後になる（自営業、農業している家庭を含まれていない）。一ヶ月 700 元という幼稚園にかかる費用は、新疆の人々の生活のレベルから見ると決して安いと言えない。

してしまうなどの多くのことが想像できるが、いずれにせよ学校に上がってから漢語を学べるだろうという思いが根本的な原因であると考えられる。

2）小学校における「双語教育」

新疆ウイグル自治区では、小学校は漢民族の学校と少数民族の学校に分かれていた。本節ではウイグル族の生徒が通う小学校の「双語教育」状況について述べる。1980年に小学校のカリキュラムに3年目から「漢語」の科目を設置し、週に4コマ[63]以上漢語の授業を行うことが定められた。それが10年続き、2001年からは小学校の1年目から漢語の授業が行われるようになった。それと同時に「双語講義」の実験を行う「実験クラス」が設置され、後にウイグル族の学校と漢族の学校が合併して「民漢合校」が設立された。この「民漢合校」では、漢語だけの授業が行われる普通のクラスと、「ウイグル語文」の科目がウイグル語で、他の科目は漢語で授業が行われる「双語クラス」が開設された。

コルラ市における小学校の「双語教育」―事例報告

コルラ市における小学校の「双語教育」は、バインゴリンモンゴル自治州の中でより早めに開始され、全自治区においても先んじて始められた。1982年に少数民族学校の小学校3年から「双語教育」が始まり、90年代前には小学校1年から始められることになり、1995年になるとコルラ市第5小学校に「双語教育」実験クラスが設置された。1999年からは、「民漢合校」の設立が始まった。現在ではコルラ市内の小学校が全面的に「民漢合校」となり、各少数民族の生徒は同じ学校に通い、少数民族生徒が母語の授業を母語で受ける、そのほかの授業は漢語で受けるということが実践されている。

コルラ市におけるある小学校は初めにA 小学校といい、ウイグル族の子供が通う学校であった。小学校の3年から始まった「双語教育」が小学校の1年から始まることになり、漢語の成績が良い生徒たちを集めて「実験クラス」が設置され、現在ではA「民漢合校」となっている。この学校のある先生にインタビュー行った。

事例1） A「民漢合校」のA先生は、女性。調査時は44歳だった。「私は1990年に漢語教師として勤め始めた。自分もウイグル族の学校を卒業し、大学で漢語を専攻して就職したが、発音が難しいと感じたため、自分も勉強をしながら教えることにした。最初は週4コマ、漢語の授業があったが、後に徐々に増えて、小学校1年生に週4コマ、3年生には週6コマ漢語の授業を

[63] 中国では、１コマの授業は 60 分間である。

するようになった。90年代と2000年以降の生徒の漢語レベルには大きな差があり、試験では、前者は60点取れる生徒の数が60％だったことに対して、後者は90％の生徒が60点以上とれるようになった。生徒たちの漢語レベルが上がった理由は、第1に、先生たちの漢語レベルが上がったことと、第2に、多くの生徒たちが幼稚園で漢語を学んだこと、そして漢語学習に積極的だったことであると思う。2009年に「民漢合校」になってからは、子供たちの漢語レベルはかなり高くなってきたと感じる。学校では母語の授業の他の科目は漢語で行われるので、子供たちが休憩時間にお互い漢語で話していることを見かけることができる。」

事例2） ある「民漢合校」において、以前この学校が漢族学校だった当時から勤めている漢族の43歳である女性のB 先生へのインタビューは、以下のとおりである。「以前、漢族の学校だった時代、ウイグル族の生徒があまりおらず、後には1クラスに2~3人ウイグル族の生徒が入ってくるようになり、それから数が徐々に増えてきた。最初の頃、生徒の入学当時の状況が異なっており、幼稚園で漢語を学んだことがある生徒は学校にすぐに慣れるが、そうではない生徒が慣れるまでに時間がかかっており、途中でウイグル族の学校に入り直した生徒もいた。「民漢合校」になってから、住んでいる地域の「民漢合校」に入学することが決められているが、やはり漢族のクラスに入学するウイグル族の生徒の数は少ない。彼らはほとんど「双語クラス」に入学しているが、母語以外の科目は漢語で受けているので、漢語能力は高い状態が続いている。」

事例3） ある「民漢合校」の「双語クラス」に通っている生徒の親（女性、36歳）は以下のように語った。「今では母語を学校で学ばせたいと思うと「双語クラス」に入れるしかない。ウイグル族の子供たちだけが通う学校は田舎にしかなく、自宅から遠いので、通わせることができない。町の中では、ウイグル族の学校、漢族の学校というものがなくなり、すべての学校が「民漢合校」となってしまったので、我々ウイグル族は子供にウイグル語を学ばせたいなら、「双語クラス」に入れるという選択肢しかない。娘を「双語クラス」に入れてから、私が感じたのは、とにかく大変で、ウイグル語のElipbe[64]と「漢語文」の教科書の2種類を持ち歩き、学校に通っていた。「ウイグル語文」の授業はウイグル族の先生がウイグル語で、算数の授業をウイグル族の先生が漢語で教えてくれた。その他の、音楽、美術、体育などの科目は漢語で行われた。娘は学校が終わってすぐに宿題をしなければ、寝る時間までに終わらなかった日がよくある。」

勤務する学校が以前の民族学校や漢族学校から「民漢合校」になった先生たちのインタビューからは、彼女たちは生徒たちの漢語能力が高まっていることを自らの経験の中で実感して

[64] ウイグル族子供が、小学校１年生の時に学ぶ「ウイグル語文」の科目の教科書である。

いると言える。それは漢語教育が強化された背景にあり、現在学校が「民漢合校」になったことで「双語教育」の母語を学びながら漢語の学習をするといった本来の意味が、漢語を学びながら自らの母語の学習をするように変わったことであると考えられる。学校教育の中で母語を学びたいなら、「双語クラス」に通うしかない、それもまた、自らの母語を1つの科目（外国語のように）として学ぶことであり、母語を学ぶ場所が徐々に狭くなってきていることが指摘できると考えている。

（図6）ある「民漢合校」における小学校の一年の「双語クラス」の時間割表

课　程　表

市一小　　2016～2017年度第二学期　　一年2班

课程 / 时间 / 星期	上午					下午			
	第1节		第2节	第3节	第4节	第5节		第6节	第7节
	冬9:50—10:20 夏09:30—09:50	10:20—11:00 09:50—10:30	11:10—11:50 10:40—11:20	12:20—13:00 11:50—12:30	13:10—13:50 12:40—1:20	16:00—16:20 16:30—16:50	16:20—16:50 16:50—17:20	17:00—17:30 17:30—18:00	17:40—18:10 18:10—18:40
星期一	早读	语文（汉）（古丽仙）	语文（民）（热沙来提）	数学（米海娜依）	体育（牙克甫江）	午读	语文（汉）（古丽仙）	美术（维尼拉）	阳光体育1小时
星期二	早读	数学（米海娜依）	语文（汉）（古丽仙）	语文（民）（热沙来提）	体育（牙克甫江）	午读	地方②（少先队会）（古丽仙）	音乐（开丽比努尔）	活动（数琪）
星期三	早读	语文（汉）（古丽仙）	语文（民）（热沙来提）	数学（米海娜依）	道德与法治（玉素甫·艾买	午读	体育（牙克甫江）	综合实践活动①（阿里甫江）	
星期四	早读	语文（民）（热沙来提）	数学（米海娜依）	语文（汉）（古丽仙）	音乐（开丽比努尔）	午读	体育（牙克甫江）	综合实践活动①（阿里甫江）	活动（书法）
星期五	早读	数学（米海娜依）	语文（民）（热沙来提）	语文（汉）（古丽仙）	道德与法治（玉素甫·艾买	午读	地方①（维尼拉）	语文（汉）（古丽仙）	活动（创意课堂）

（図6）の小学校年生の時間割表には「語文漢」「語文民」と書いてある項目がある。「語文」の科目は日本の国語の授業に相当しており、中国語の授業であり、「語文漢」は漢民族への国語の授業を指す。「語文民」は少数民族が自らの言語の学ぶ授業である。少数民族が自らの言語を学ぶことができる学校は、「民漢合校」の「双語クラス」しかない。この時間割表を見てみると、「語文漢」の授業が週に7コマあるのに対し、「語文民」は週に4コマしかないことがわかる。そしてこの2つの「語文」の授業を受けるために子供たちが2種類の教科書を用いながら教育を受けていることがわかる。このことにより数民族生徒の学習負担は、漢民族の生徒より重くなっていることも確実であると言える。

3）中学校における「双語教育」

1992年から新疆ウイグル自治区教育委員会は一部の中学校で「双語教育」の実験を始めることにした。中学校での「双語教育」実験の内容は、数学、物理、化学3つの授業を漢語で行

い、他の科目は、民族語で行うということである。これは、新疆ウイグル自治区の民族学校における教授用言語が少数民族言語から漢語へと移行したことであろう。初めのころは、決められた学校から成績が優秀な生徒たちを募集して、この実験が始まった。ウルムチ、チュチェック、トルファンの地域には、3つの中学校クラス、100名の学生であったが、1999年に15の地域において、29校の3259名の実験クラスの学生にまで増えていた。このような状況のもとで、漢語が十分にできない少数民族教員が以前の職につけなくなるという実態を引き起こしている。

小学校の実験クラスに入るのは自由であるが、中学校、高校の実験クラスに入るために特別の試験を受けなければならないと決められており、漢語能力が十分ではない生徒たちの学習負担が重くなっていることも事実である。

コルラ市における中学校の「双語教育」－事例報告

コルラ市は、「双語教育」を推進するために、1996年から市内のある部分の「中学」において、「双語教育」実験クラスを設置し始めた。2006年には、「双語教育」の講師を育成することに力を入れ、少数民族の学生に授業する教員たちを育成する教室を設置して教育を行った。2004年9月からコルラ市は、小学校を卒業した中学生を受け入れるクラスを設置し、新疆の各地域から、特に南疆地域から中学生を募集して、「双語教育」を行った。これらのクラスは「内初班」[65]と称された。これで、小学校を卒業した生徒が親元を離れ、寄宿学校に通うことになり、「民漢合校」の「初中」クラスで漢語の授業を受けることになった。小学校卒業してから、「内初班」の入学希望を提出した後、試験に参加して、合格できれば入学できるという仕組みである。

事例1） 小学校を卒業した後試験に合格して、「内初班」に入学した女子学生の親、女性38歳。彼女からこのように聞かされた。「娘は試験に合格して入学したが、一カ月過ぎたところで、学校生活に慣れなかったので、地元に帰らせてここの「双語クラス」に通わせた。退学させた一番大きな原因は、親元から離れる歳ではなかったと考え直したからである。」

事例2） 農業に従事している男性、43歳の親が自分の息子を「内初班」に通わせたことについて以下のように述べた。「我々は農民出身であり、田舎の小学校を卒業してから農業をしてきた。生活の面では以前より良くなったと言えるが、やはり経済的に苦しい部分がかなりあり、息子には私たちのようになって欲しくないので、きちんと学校に行かせることにした。町の小学

[65] 2004年9月から新疆ウイグル自治区のウルムチ、克拉瑪依（カラマイ）、石河子（シハンズ）、奎屯（クイトン）、コルラ、クムル、昌吉（サンジ）と、阿克蘇（アクス）[65]の八の都市において「区内クラス」が設置された。学制は3年完全寄宿制の方式をとっており、現地の漢民族学校の教材を用いて、漢語で授業を行う中学校クラスである。

校は遠かったが、私が毎日学校に送り迎えして、卒業してからコルラ市にある「内初班」に合格できて、今高校に通っている。おかげで漢語も良くできるようになり、将来は早く独立できることを楽しみにしている。」

このインタビューから見えてくるものは、子供たちの中学校への進学問題に対しては親の考えが主となる。前者は、女の子だから親元を離れていることが辛ければ、戻ってきても良い、後者は、自分の生活が苦しくなった原因は、学校に最後まで通っていないことであると考え、寂しくなるが男だからしっかりして欲しいという願いがあることを読み取ることができる。

4）高等学校の「双語教育」

コルラ市のでは、「民漢合校」における「中学」の「高中」では、「双語クラス」があり、「普通話」を基本とした、聞く、話す、書く、読む、訳すなどの訓練が行われてきた。授業も漢語が教授語とされており、大学に入学した後に、直接漢語で授業を受けることができることを目標にして、毎日少なくとも1科目の漢語の授業が行われている。高等学校の漢語教育について、コルラ市の高等学校の状況ではなく、現在特別に注目されている、また特別に強化されている「内高班」または「新疆班」[66]と称されるクラスの実態について考察する。

中国漢民族居住地における「新疆高校クラス」―事例報告

新疆ウイグル自治区では、「双語教育」政策が実施され、徐々と強化されていくことに続き、2000年9月に北京、上海などの漢民族居住地における一部の中学の高等学部において「新疆班」（以下「新疆高校クラス」とする）が設置された。具体的には、新疆ウイグル自治区における少数民族の生徒は中学校を卒業してから、試験を受けて合格できれば「新疆高校クラス」に入学することができ、1年間漢語を学んでから、3年間高校の授業を受ける。つまり高校を4年間で卒業するということである。

本節では、新疆ウイグル自治区の少数民族の移動、すなわち、少数派が多数派地域に移動して受ける高等教育による民族共生に注目し、ウイグル族の生徒たちが高校生活を送る中で、自らの言語と自らの民族文化の維持に関してどのように考えているのかを考察することを目的とする。少数民族の生徒たちが漢民族居住地域に移動することによって、母語を使用する機会が減り、自らの民族文化と接触する機会も減った中での彼らの言語使用状況を把握す

[66] 漢民族地域における高等学校の中に、新疆からの学生を募集して、教育するクラスのことを「内高班」または「新疆班」という。

るとともに、彼らの民族アイデンティティの継承と維持に対する考えを把握し、民族移動や教育と文化の関連を検討してみたい。

新疆ウイグル自治区における「双語教育」をさらに強化し、「民漢兼通」を実現して自らの言語(母語)と漢語(母国語)ができる「人材」育成を促進させる目的の1つの段階として、1999年9月、国務院の「少数民族地域の人材育成工作を加速させる」という通知が各教育部門に配布された。教育部は「内地地域では、新疆高校クラスを設置する」という意見を公布し、2000年の秋から北京、上海、南京、杭州、広州などの経済発展した12の都市において13カ所で新疆高校クラスが設置された[67]。その結果、高等学校入学当時から地元を離れ、少数派地域である新疆ウイグル自治区から、多数派地域の漢民族居住地に移動して、高校生活を送る生徒たちが増加した。

2004年9月から、新疆ウイグル自治区のウルムチ、カラマイ、シハンズ、クイトン、コルラ、クムル、サンジと、アクスの8の都市において「区内クラス」[68]が設置された。学制は3年完全寄宿制の方式をとっており、現地の漢民族学校の教材を用いて、漢語で授業を行う中学校クラスである。

「新疆高校クラス」の実態

2000年9月から漢民族居住地、すなわち、北京、上海、などの12都市13ヶ所の中学において「新疆高校クラス」を設置し、その年に新疆の各民族生徒の1000人を募集した。2002年9月には募集人数が拡大され、1540人が新しく「新疆高校クラス」の生徒になり、2005年になると3075名の生徒が入学した。設置されるクラスも25都市35ヵ所に拡大し、新規に入学する生徒たちの数も2006年には3990人、2007年には5000人に達した[羅吉華 2009: 347]。応募者の数も年々に増加し、2010年には4万人の生徒が「新疆高校クラス」に応募した[69]。

---

[67] 中華人民共和国教育部」http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/ アクセス日 2015年３月 31 日。

[68] 「双語教育」 教育を受けて小学校を卒業した生徒たちが、漢語(第２言語として学ぶ中国語)、数学、漢語文(日本の国語科目と同様)の３科目の試験を受けて合格すれば、中学校から全科目の授業を漢語で受ける中学校に入学する。中国では、このクラスのことは「内初班」（「新疆中学校クラス」）と称されている。これは「新疆高校クラス」を中国語で「内高班」と称されたのに対してつけられた名前であり、「内高班」のように新疆から出て漢民族地域における中学校に通うクラスのことではない。筆者は「内高班」を「新疆中学校クラス」と称し、ここでは「新疆高校クラス」を中心に考えることで、「新疆中学校クラス」について次の課題で考えることとする。

[69] 新疆維吾爾自治区教育庁 http://www.xjedu.gov.cn/xjjyt/jxxw/zhzx/2010/26824.htm アクセス日 2014 年 10 月 11 日

「新疆高校クラス」の設置に関して「中華人民共和国教育部」の「教民(2000)2号」[70]の通知に基づいて、以下に詳しく述べることにする。

「新疆高校クラス」では、生徒たちの80%以上が少数民族であることが定められており、新疆ウイグル自治区の各地域における中学の初中部からの応募生に対して全国統一の試験[71]を行い、合格したものを入学させる。合格できた生徒たちは全員寄宿生となり、食費(1人当たり月100元)、医療費(1人当たり年間200元)、学生服、雑費と年に1回自宅に帰るための交通費を新疆ウイグル自治区人民政府が負担する。少数民族の生徒たちの生活をサポートするために、各高校クラスに新疆ウイグル自治区の少数民族出身の教員2名を2年間派遣する。家庭の経済状況が苦しい生徒たちに対して、生活費の自己負担分を減免することができる。中学の高中部は本来3年だが、「新疆高校クラス」は4年間とされ、新疆各地からの各民族の生徒たちを1つのクラスに所属させ、初めの1年間を予科班とし、中学部の漢語、数学、理科と科学などの科目を履修する。

「新疆高校クラス」が設置された学校には、イスラーム式のハラル食を提供とする食堂が設置され、新疆からの少数民族の生徒たちが安全に、安心して食事ができることを保証する。

2004年には第1期の卒業生の98%が大学に進学(専門学校も含む)し、「新疆高校クラス」の設置は大きな成果を挙げたとされている。

深圳市松崗中学の場合

深圳市松崗中学[72]は、中国の広東省に位置しており、2000年9月に中国で初めて「新疆高校クラス」が設置された学校である。筆者の友人の子供が本学校の卒業生であったため、学校状況について聞くことができ、他の生徒たちに対しても彼女を通じて聞き取り調査を行うことができた。

---

[70] 教育部の「内地の関連都市において、「新疆高校クラス」を設置することに関する意見」の実施に関する通知の配布。

[71] 試験科目は以下の通りである。漢民族中学校を卒業した生徒は、数学、英語、漢語文(日本でいう国語)、化学と物理(2科目を1回の試験で受ける)、歴史と政治(2科目を1回の試験で受ける)の5科目の試験を受ける。中学校の「双語クラス」を卒業した生徒は、数学、漢語文、化学と物理、歴史と政治、漢語(日本でいう中国語)の5科目の試験を受けて、合格すれば「新疆高校クラス」に入学する。

[72] 深圳市松崗中学
http://sgzx.baoan.edu.cn/listmore.aspx?menuID=0&blockid=58e9ab1b-f615-47　アクセス日 2014年10月11日

深圳市松崗中学は、深圳市の宝安区に位置しており、1958年に設立された学校である。現在の校舎に移動したのは1999年のことであり、深圳市松崗中学は深圳市政府が重点的に投資し、建設を行った全寮制の中学であり、そして深圳市における「新疆高校クラス」が存在する唯一の中学校でもある。

深圳市松崗中学では、2013年5月の時点で、86クラス4461名生徒が在籍しており、2000年9月に「新疆高校クラス」が設置され、同年度に新疆各地域からの40名の生徒たちが入学した。本学校は2000年からの12年間で2350名の新疆からの各少数民族の生徒たちを迎え入れ、1380名の卒業生を進学させた。2013年5月に20の「新疆高校クラス」に900名の生徒たちが在籍しており、内9割が新疆からの少数民族生徒たちであり、新疆からの漢民族の生徒たちは1割を占めるにすぎなかった。

深圳市松崗中学では、「新疆高校クラス」の生徒たちに対して、1年目は予科クラスとして漢語と中学校の各科目の授業を行い、2年目から本格的に高校の授業科目を教えている。1年間の学費は900元、寮費420元、教科書費220元、衛生保険日20元と定められており、「新疆高校クラス」の生徒たちに対してすべて無料にしている(新疆ウイグル自治区政府が負担する)。「新疆高校クラス」の各民族生徒たちは、全員が同じ寮に住んでおり、8人部屋である。寮には各設備(トイレ、シャワー室)も整っており、少数民族の生徒たちが学校生活に慣れるために学校側が様々な面でサポートしていた。例えば、「新疆高校クラス」の生徒たちのための専用の食堂を作り、イスラーム式のハラル食を提供している。イスラーム式のお祭りなどが行われるときには、「新疆高校クラス」生徒たちのために音楽会などの娯楽会を開催して、彼らが早く現地に慣れるための機会を提供している。2009年からは「新疆高校クラス」の運営経験をともに、教員と生徒たちの間で絆を強めることに力を入れると同時に、教育方法を改善させることで、本学生徒の4年制大学進学率が90%に達したという。

深圳市松岡中学「新疆高校クラス」のウイグル族生徒を対象とした調査報告

2013年8月に「新疆高校クラス」を卒業した15名の学生[73]を対象として、アンケート調査またはインタビュー調査を行い、彼らの学校生活について、言語使用状況と民族アイデンティティの継承と維持に関する考えなどを把握した。調査の結果を以下の表において報告する。

[73] 調査対象の卒業生たちは、2005 年 9 月に深圳市松岡中学の「新疆高校クラス」に入学してし、2009 年 7 月に同学校を卒業していた。調査を行った 2013 年の時点で 24 歳だった。

(表2) 学校生活に関する調査

卒業生15名	民族学校卒業2名、漢族学校卒業13名	
質問	はい(人)	いいえ(人)
学校生活に満足している	12	3
「新疆高校クラス」の入学を後悔したことがある	2	13
学校生活に早く慣れた	11	4
ウイグル族の生徒と仲良くしていた	11	4
漢民族の生徒とも仲良くしたいと思った	15	0
漢民族の生徒たちとも仲良くできた	7	8
先生たちが我々のことを気にかけてくれた	13	2
故郷に帰りたいと思う時が時々あった	12	3

(調査結果をもとに筆者が作成)

彼らの多くは、「新疆高校クラス」の学校生活に満足しており、自分が入学できたことを誇りに思っている[74]。教師たちのサポートにも満足しており、家族と離れたが学校生活に早く慣れたと思っている生徒の数も少なくない。同時に、表からは、ほかのクラスの漢族の生徒たちと仲良くしたいと思う学生がいながら、学校での交流範囲は「新疆高校クラス」の生徒たちの間に留まっていることも読み取ることができる。したがって彼らはウイグル族同士で仲良くしているからこそ、学校の生活に早く慣れたと考えられる。

(表3) 学校における言語使用状況ついての調査

卒業生15名	民族学校卒業2名、漢族学校卒業 13名	
質問	漢語(人)	ウイグル語(人)
ウイグル族の生徒同士の間でどの言語を使用する	0	15
ウイグル族と漢族の間でどの言語を使用する	15	0
授業中にどの言語使用する	15	0
授業以外にどの言語を使用する	11	4
自分が上手だと思う言語はどれ	15	0
自分にとって今後学ぶ必要性があるのはどの言語	0	15

[74] 「新疆高校クラス」の進学することは、親の意思で実行したと言った。つまり、彼の多くは、親が自分を小学校から漢民族の学校に通わせた。中学校卒業してからも「新疆高校クラス」に進学することを親が決めたという。

（調査結果をもとに筆者が作成）

表3から見ると、ウイグル族の生徒同士の間でウイグル語を使用する。授業中は漢語を使用し、授業以外は主に漢語を使用してウイグル語を使用する場合もある。よってウイグル語の使用は、ウイグル族同士の間でだけに留まっており、主に使用する言語は漢語であると言っても過言ではない。その原因は彼らの中に漢民族の中学校を卒業した者が多いことである。したがって、小学校から受けた教育が将来の言語使用状況に大きな影響を与えると考えられる。そして自分が得意な言語は漢語であり、これから学ぶべき言語はウイグル語であると答えていることから、彼らは自分にとって他民族言語である漢語を第一言語として学んでおり、これからは自分が苦手な自らの母語を学ぶ必要があると考えていることを読み取れる。したがって「新疆高校クラス」に在学している漢民族学校を卒業した彼らは、故郷を離れて漢民族と一緒に学校生活を送ることで、自分はマジョリティである漢民族と異なるウイグル族であることを再認識したのではないか。よって自分はウイグル族であるからウイグル語ができるべきであると考えるようになり、異文化の中にいたからこそ自分たちの立場をあらためて認識し、自らの言語学ぶ意欲が出てきたと考えられるのではないか。

（表4）民族アイデンティティの維持について

卒業生15名	民族学校卒業2名、漢族学校卒業　13名	
質問	はい（人）	いいえ（人）
自分がウイグル語を学ぶ意欲がある	14	1
ウイグル族と行動することが多かった	10	5
ほかのクラスの漢族学生と行動することが多かった	0	15
新疆クラスの漢族学生と行動することが多かった	4	11
ウイグル族と漢民族の生活習慣が大きく違うと感じた。	15	0
漢民族の生徒たちと寮での共同生活することは不便	9	6
学校の中でカルチャーショックを受けることが多かった	5	10
大学進学し、卒業後に新疆に帰りたいと思った	13	2
自分がウイグル族だと再認識することができた	14	1

（調査結果をもとに筆者が作成）

自分はウイグル語を学ぶ意欲があると答えた生徒たちの大半は、漢族の中学校卒業者であり、ないと答えた生徒たちはウイグル族の学校出身者であることから、自分が不得意な言語を学ぶべきであると思っていると考えられる。彼らの多くは、漢民族の生徒たちと寮で共同生活を送ることは不便であると思っているが、カルチャーショックを受けた生徒は少なかったという。理由として挙げられたのは、生活習慣が大きく違うと思ったにも関わらず、新疆出身の各民族の生徒たちが一緒住むことには抵抗がなかったことであると考えられる。したがって、彼らは漢文化を異文化として認識していないわけではなく、ほかのクラスの漢民族の、つまり新疆出身ではない生徒と一緒に行動することが極めて少なく、文化接触の機会が少なかったからではないかと筆者は考えている。この点については今後も検討を続けていく。

インタビュー調査結果

「新疆高校クラス」の卒業生に対して、学校生活や生徒同士の言語使用状況について尋ねると、次のように答えてくれた。「最初は新しい学校生活に慣れるのは難しかったが、我々の生活のサポートをしてくれる先生方のおかげで、新しい環境に慣れることができた。我々の中では漢民族の学校に通った生徒が多かったので、はじめは会話のほとんどが漢語だったが、そこで学校生活を送ることによって、自分たちがウイグル族であるという意識が次第に高まり、最後は授業以外ではなるべくウイグル語を使うようになった。ウイグル語の読み書きができない学生の中には、読み書きを学ぶ人もいた」。

また、ほかのクラスの生徒たちとの交流について尋ねたところ、以下のような回答があった。事例1)「ほかの漢民族の学生は、我々のことを気にかけてくれた。毎週土曜日の午後に外出が許可されるので、その時にほかのクラスの生徒たちと一緒に出かけることもあった。『新疆高校クラス』の生徒たちは、自分たち専用の食堂で食事することが決められていたので、安全に、そして、安心して食事することができた」。第2に、「我々が『新疆高校クラス』で学ぶことによって、以前は民族学校で教育を受けた学生たちも、卒業するときには漢語が本当に上手になり、彼らの中でも漢民族の生徒たちと友達になる人もいた」。

事例2) 彼らの中の1人が「両親も漢族の学校を卒業したので、中学校までには学校だけではなく、家でもほとんど漢語で会話していたが、『新疆高校クラス』に入学してからウイグル語を学びたい、ウイグル語で交流したいという意欲が芽生え、今は漢語とウイグル語を混ぜながら会話ができるようになった」と回答した。そして、「学校には我々のことを自分の子供のように思

ってくれた漢民族の先生がいて、卒業の時に涙を流したことを今でも忘れられない」と言った卒業生もいた。

生徒たちの中には、「中学校卒業まで両親と共に生活してきたため、家族から離れたことが私たちにとっては一番つらかった。しかし、親が私たちの将来のために『新疆高校クラス』に進学することを進めたので、辛くても自分のためだと思って我慢した。入学してから漢民族の生徒たちと同じ寮に住むことで、漢民族と仲良くもできたが、生活習慣でお互いに大きな違いがあり、不便だと思ったこともかなりあった」と答えた者もいた。

これらのインタビュー調査からは、「新疆高校クラス」の生徒たちは、今でも自分がそこに入学でき、4年間の学校生活を有意義に送ることできたと思っている。彼らは地元を離れて生活することで、自分の生活習慣、言語などの面では漢民族と異なることに、そして自分自身がウイグル族でありながらもウイグル語が上手にできないことにあらためて気づいたと言える。したがって、ウイグル語で会話する、ウイグル語の読み書きを学ぶという状況が出現し、民族アイデンティティが確立すると同時に漢民族の先生や生徒たちにも好感を持ち、お互いに仲良くしながら自らの言語、自らの文化を維持していく意欲もあると考えられる。

中国全土で漢語教育が強化される中、少数民族地域でも漢語学習が活発化し、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族も、積極的に漢語を学び習得している。その理由として考えられるのは、経済的豊かさを追求するためであり、また大学への進学や就職と職場における漢語の必要性が高まったことなどである。

2000年から各地に「新疆高校クラス」が設置されたが、ウイグル族の漢語学習に対する熱が高まり、毎年1000人の募集が決定されていたにも関わらず、応募者数が増加したので、募集する人数が拡大されることになった。そこで地元を離れ漢民族地域で高校生活を送ることになった生徒たちは、漢文化の中で漢文化を学ぶことになった。彼らに対して行ったアンケート調査やインタビュー結果によると、彼らはそこの学校生活が嫌になっているわけではなく、そこの学校生活に慣れて、自分が「新疆高校クラス」に合格できたことを誇りに思っており、「新疆高校クラス」に入学できたからこそ良い大学に進学できたと思っていることが分かる。彼らは自分が漢語を習得できたことは自分にとってプラスであり、これを武器に勉強や仕事の面において十分に活用できたと思っている。これらからは言語教育政策の結果は、ある部分、民族融合の促進に役に立っているようである。だが、文化の維持と教育との関連を考えたときに、彼らが漢文化の影響を大いに受けることは、民族アイデンティティの維持には不利な要因となる反面、自分が漢民族と異なる文化や異なる言語を持っているウイグル族であることに改めて気づくこ

とによって、異文化の中から自らの民族文化を振り返ることができ、民族アイデンティティに対する意識が高まったとも考えられる。

5）新疆ウイグル自治区の大学における「双語教育」教育

新疆ウイグル自治区における大学は少数民族にとって5年制であり、少数民族の学生は入学後1年間漢語を学習し、後の4年間専門の勉強をする。大学では予科部（漢教部ともいう）があり、漢民族地域における大学に進学する[75]ようになっている学生たちは、予科部で2年間漢語を学習し、予科部卒業時、漢語試験に合格できれば、例えば、北京大学、北京民族学院といった新疆以外の省などの大学に進学することができるというシステムがある。

漢語教育が強化されていく中で、新疆各地域の大学や、専門学校における漢語教育の要求も徐々高まっていった。例えば、新疆農業大学では新入生は、会話、ヒヤリングと基礎漢語などの科目を通して、週に30時間[76]漢語の授業を受け、1年間では1000時間の漢語の授業を受けることになった。新疆大学は、新入生に対して受験を行い、漢語能力を把握し、成績によってクラスに分けて、各クラスに対して異なる方法を用いて漢語教育を行うことにした。受験成績が良ければ、1年間の漢語学習をせずに専門の授業を受けることができ、大学も4年間で卒業できるという方法を採用した。

中国では1996年に少数民族に対してHSK（漢語水平考試）が始まった。そこで新疆ウイグル自治区の各大学では、次々とHSKの成績が良い生徒たちに対して予科の1年の学習を免除するようになった。

本論文の現地調査地域はコルラ市にしてあるが、コルラ市では高等学校以外に専門学校しかないので、大学についてはその他の地域の状況を述べることにする。「新疆ウイグル自治区における『民考漢』[77]と教育言語問題」[大西広(編)：220-242]を参考にして、新疆ウイグル自治区の最高学府である新疆大学の「双語教育」状況を述べることにする。

---

[75] 大学受験後合格通知を受け取ったときに、A大学の予科部で２年間漢語を勉強してから、さらに試験を受けて、B大学に入学して４年間専門の勉強をすることになっている。そして、X大学の予科部で２年間漢語を学習して、Y大学X学部にて、専門勉強４年間することが決められている場合もある。

[76] ここでは 30 コマ授業のこと指している。新疆ウイグル自治区の大学では１コマの授業は 45 分である。

[77]漢民族の学校に通う少数民族の学生を「民考漢」といい、少数民族の学校に通う少数民族の学生を「民考民」という。

新疆大学は2002年から「双語教育」モデルを転換し、少数民族クラス[78]であっても、民族語科目と文化類科目以外の科目を漢語で授業をするようにしていた。少数民族の学生は予備教育として漢語教育を1年間受けて、漢語の検定試験に合格しても、日常生活の中で漢語を使用しているわけではなかった。これにより、半数近い学生が言語学習だけで大量の時間と精力を注ぐことになるが、授業中の聞き取りにも問題があるため、専門教育で支障が生じることがあった。そして、教育制度の転換によって少数民族教師も漢語を使って授業をするようなってから、特に45歳以下の少数民族の教員たちはHSKで8級に合格することが求められるようになった。したがって講義の準備などが教師たちにとって大きな負担となり、長年の授業経験を持っていても、漢語能力が欠けている教師たちは、授業ができなくなることもあった。そして、HSKで合格した教師たちも、漢語で授業を行う際大きな困難に直面している[大西広　2012:233]。

本節における学校の「双語教育」状況から考えると、新疆の学校教育の中に、幼稚園を含めた小学校から大学の「双語教育」が徐々に強化されていったことがわかる。これからの社会の中で、漢語の必要性が高まることを先読みした親たちが、学校を選択する場合漢民族の学校を選択したと考えられる。ウイグル族の子供たちが学校では、漢語を1つの外国語をとして学ぶという状況は、自分の母語1つの科目として学ぶ状況に変わることで、「双語教育」といった漢語教育の根本的な意味[79]が覆されたと言えるだろう。

2. 家庭における「双語教育」

家庭教育と言えば、家庭生活の中で発生する親子を中心とした、社会に必要とされる人間を育てる目的をもつ教育である。ここでは、ウイグル族の家庭教育の中で、漢語教育はどのようなものであり、どのような形で行われているかを考察し、家庭教育のあり方と親の出身状況、学歴、考え方とかどのように結びつているのかということを考察する。調査対象はコルラ市における、親が40代前半である以下のいくつかの家庭とする。

1）漢語ができない親の家庭

[78] 新疆大学の一部の学科は、普通クラス、漢族クラスと実験クラスに分けられている。カリキュラムは同じであるが、習得する単位数が異なる。実験クラスは新疆大学が 1998 年から始めた試みであり、生徒たちは中学校から実験クラスから上がってきた少数民族の学生である。

[79] 中国政府は「双語教育」という言葉を打ち出した時代、中国の各民族は、団結して国の統一を守るために、漢民族は少数民族の言語を学ぶ、少数民族は漢民族の言語を学ぶという意味での「双語教育」政策である解釈した。

新疆ウイグル自治区では漢語教育が行っているが、漢語が話せない人たちも多く存在している。特にウイグル族が総人口の8割を占めている農村では、親は漢語が全くできない家庭が非常に多い。ではこの家庭の中で育てられている子供たちはどのような方法で漢語を覚えているのだろう。両親の漢語ができないそれぞれの家庭の状況は異なっており、それぞれの家庭において両親の漢語学習に対する考え、子供たちの母語ともう1つの言語を覚える状況が異なっている。この問題に対しては、親が子供たちの漢語を学習することについてどういう考えを持っているかが最も重要な点であると思われる。

ウイグル族の間では、1980年代以前は、子供を幼稚園に行かせて教育受けさせる家庭はあまりなかった[80]。現在は、子供を小さいころから良い教育を受けさせるために幼稚園に行かせる親が増えてきている。彼らの中には、経済的状況が厳しい無職の人や主婦たちもいる。彼らは、生活が貧困していても、また専業主婦であるため子供の面倒を見る時間はあっても、子供を幼稚園に行かせる意欲が強くなっているという。以下では異なった家庭の事例を取り挙げて、子供たちの幼稚園教育や、2言語学習について考えたい。

事例1）Tさんは父親（43歳）であり、母親（40歳）の名前はMという。2人とも漢語が全くできない親であり、X村の農民である。子供が3人おり、ウイグル族の高校と中学校に通っている。経済的に余裕があり、子供たちを遠くにある学校に行かせることができる家庭でもある。子供たちの漢語学習について父親に質問すると、「家は農村にあるので、町の学校が遠いということもあり、子供たちを家の近くにあるウイグル族の学校に行かせた。私たちも漢語がでないが、何か不十分と感じたこともなく、漢語ができる人たちと同じように生活している。そして、ウイグル族と漢族は生活習慣や言葉などの面で、全く異なる民族であるし、新疆から出て漢族が生活している地区に行くつもりもないので、漢語を学ぶ必要がないと思う。子供に小さいころから漢語を覚えさせたら、自分の母語であるウイグル語を学ぶ機会が少なくなり、大きくなったら性格が漢民族に似てしまう可能性だってある。そうなれば私たちウイグル族の将来はどうなるのだろうか、自分の母語を忘れ、自分のウイグル族であることを忘れるわけにはいかない。だから私は、ウイグル族の子供であれば、ウイグル語をしっかり勉強し、イスラーム教の規則を守り、自分がウイグル族であることを誇れることができれば、それで十分と思う。」と答えた。

[80] 中国の改革開放政策が実施される以前は、ウイグル自治区の各地域に幼稚園などが少なく、そして、働きに出ていない専業主婦が多かったために、子供の面倒を小学校入学までに家庭で見ることがほとんどだった。

事例2）父親（36歳）のRさんはある会社の作業員、母親（30歳）のGさんは清掃会社で働いている。2人とも漢語ができない親であり、子供が1人いる 。 彼らは今年4歳になった子供を幼稚園に行かせて、漢族の子供たちと一緒に教育を受けさせようとしている。なぜ子供をその幼稚園に行かせるのかという質問に対して、Rさんは「私たち2人とも漢語が全くできない。それは私たちが子供のころに親が漢語の勉強をさせなかったからである。漢語ができたならば、大学に行くことができ、 良い職場で働いていたかもしれない。漢語ができなかったため、今の仕事しか見つけることができなかった。私たち夫婦2人とも給料が少ないので 、経済的に厳しい。子供の幼稚園にかかる費用は、月に600元になるが、生活が大変な状況でも何とかして子供を漢族の園児が多い幼稚園に行かせたいと思っている。もし子供が漢語をできるよう になれば、いい大学に入り、将来いい仕事を探すことができ、生活のことで困らないことだろう。 もちろん子供のころから外国語を学ぶのであれば、自分の母語ができなくなる可能性もある。だから 、私たちは子供が家に帰ってから必ずウイグル語で話すつもりでいる。そして自 分たちの生活習慣、イスラーム教の規則などについても子供に教えることにしているので、子供が家庭の中で自らの母語と文化を学ぶことができ、自分がウイグル族であることを意識しながら、幼稚園や学校に入学してから、2つの言語ができる子供に育って欲しい。」と言った。

事例3）Tさん夫婦は（それぞれ46歳、41歳）ある村で、農業に従事している。息子が3人おり、2人は漢民族の小学校と中学校に通っている。彼ら は町から遠く離れている農村に住んでおり、漢族の学校が遠いということもあり、子供たちを漢族の学校に行かせた理由について尋ねたところこのように言った。「私は子供のころ、漢民族の一家が内地から家の近くに引っ越してきた。彼らには3人の子供がいて、私と同じ年の男の子がいてよく一緒に遊んだ。彼らは野菜を作っていて、ここは町に遠いので我々はその漢族から野菜を買っていた。自分たちは作っていたが彼らのように上手 にできなかった。今考えると、彼らは農業技術を身につけていたから、野菜を作ることが 上手だったと思う。野菜の作り方やいろいろな農業生産物の生産方法などを教えてくれる本やテレビ番組があるが、それはやはり漢語だったので、漢語ができない私たちは、それを学ぶことができなかった。本当は一番下の子供を小さい時から、漢族の幼稚園に行かせたかったが、近所に漢族の幼稚園も学校もないので、今家庭で漢語を学んでおり、小学校から 漢族の学校に行かせる 予定にしている。小学校は家から遠いが、 私は毎日子供をバイクに乗せて学校まで送っている。 私の両親は、子供が小学校から漢族と一緒に勉強すれば ウイグル語が上手く話せなくなり、性格も変わってしまうという反対意見を持っているので、ウイグル語は家でしっかりと教えることにしている。」と答えてくれた。

以上の事例から 考えると、漢語を学習することは、ウイグル族の家庭の経済的事情と密接な関係があり、自分たちが生活のことで苦しんできたことは、 漢語ができなかったことであると思い、子供たちが将来良い生活ができることを望めば、小さいころから漢語を学習することが必要と考えたのである。 逆に生活のことであまり困ったことがなかった家庭の親は、自分は漢語ができなくてもいい生活を過ごしてきたと考え、漢語を学ぶ必要がないと思ったことが考えられる。3つの家庭とも、ウイグル語はウイグル族の母語であること、ウイグル語をしっかり勉強しないといけないこと、自分のウイグル族であること忘れてはいけないと強く認識しており、自分の母語だけ学習するのか、あるいは、母語の勉強をしながらもう1つの言語も覚える必要があるのかといった考え方の違いがあると考えられる 。

2)漢民族の学校を卒業した親の家庭

新疆ウイグル自治区の民族学校では、1980 年代漢語の学習が小学校3年から始められたが、それでも漢民族の学校に行って漢族の子供たちと一緒に勉強すれば、漢語がもっと上手になるという考えを持った親たちが自分の子供を漢民族の学校に行かせることもあった。この子供たちが現在成人し、子供の親になっている。以下では漢民族の学校を卒業した親たちが自分の子供をどのように教育をしているのかということについて考えてみたい。

事例1) A さん(49歳)は小学校から漢民族の学校に行き、高等学校まで漢民族の生徒たちと一緒に教育を受けた。母親のNさん(49歳)も漢語が上手 、現在 X高等学校のウ イグル族の学生たちに漢語を教える教師である。彼らには2人の子供がおり、2人ともウイグル族の学校で勉強をしている。父親に自分自身は漢族の学校に行った「民考漢」であったのに、なぜ子供を民族学校に行かせたのと聞くと、彼は「私は『民考漢』であることがどういうことなのかはっきりとわかっていたので、子供には自分が行った道に歩んで欲しくなかった。自分のことを考えれば、ウイグル族でありながらもウイグル族ではない、そして漢民族とも違ったことであった。仲がいい友達といえば誰もいないし、性格的に互いに話し合う人もいなかったので、やっぱり私は、新疆にいる「14番目[81]」の民族であるかもしれない。だから、子供たちにはウイグル族の学校に行き、ウイグル族の子供たちと 勉強したり遊んだりしながら、本格的なウイグル族になって欲しい。子供たちが大人になってから、私のようにどちらでもない(ウイグル族でなく、漢族でもない)

[81] 新疆ウイグル自治区には、ウイグル族、漢族などの 13 の民族がいると言われることが一般的であり、彼らは新しく形成した 14 番目の民族であるという意味である。

人にならないように、子供に自分の母語をちゃんと勉強させたいと思った。そしてウイグル族の生活習慣などを自分が知っている限り教えてきた。でも、自分も漢民族の学校を卒業したので、子供に教えられることも限られており、十分にできていないと感じている。もちろん現在は漢語ができないと大学に入り就職することが難しいと思っているが、小学校から 漢語の授業がある。漢民族と交流する機会も多いので、子供はその環境のなかで自然的に漢語を覚えていくであろうと思っている。」と言った。

事例2) Pさんは小学校から大学校まで漢民族の学校で勉強した「民考漢」である。結婚するときも、自分と同じ「民考漢」出身のGさんを選んだ。子供が生まれてから、幼稚園、小学校では漢族の学校に進学させた。夫婦2人とも家の中で漢語を使用するので、現在高校在学中の子供がウイグル語で話せないようになっている。その子供にウイグル語で質問すると漢語で答えてくれた。私は彼らに、本当に自分の母語を学ぶ必要はないですか？と質問すると、彼はこう言った。私はウイグル語を勉強しなくてもいいとは思いっていない。私も「民考漢」であるが、ウイグル語で話すことができる。自分はウイグル族という意識があれば、ウイグル語を忘れることはない。息子については、私たち2人とも「民考漢」なので、家の中でウイグル語を使おうと思っていても、なんとなく漢語を使ってしまっている。その上2人とも、漢民族の多い職場で働いているので、漢語を使う機会が多い。仕事が忙しいため、子供にウイグル語を教えることをしていない。子供の将来のことを考えると、漢語の必要性が日々に高まっているこの社会では、ウイグル語よりも漢語の学習することが必要だと思っている。」と言った。

この「民考漢」である2つの家庭のことを考えて見ると、まったく異なった状況が見えてくる。事例1は、自分はウイグル語がよくできなかったことを恥ずかしいと思い、性格がウイグル族とも、また漢族とも違っていたことから、助け合いや話し合いができる、仲がいい友達がいなかったので寂しいという思いがあった。それで、もちろん漢語を勉強する必要性も考えた上で、子供をウイグル族の学校で勉強 させるという道を選んだ。もう1つの家庭は、自分の家庭と職場で漢語を使っており、ウイグル語の必要性を感じていなかった。彼らは漢語だけ覚えれば生活ができるし、自分がウイグル人であることだけ忘れなかったら、それで十分であるという考えを持っている 。これらの事例から、同じ学校で教育を受けても家庭によって様々な考えを持つことによって、子供の教育に対する考えが異なることがわかる。

3)ウイグル語と漢語の両方ができる親の家庭

新疆ウイグル自治区では、漢語の学習は小学校3年から義務付けられているので、漢語ができる人々が徐々に増えている。民族学校で勉強をしているウイグル族の子供たちは、ウイグル語の勉強をしながら、漢語を1つの科目として習っている。漢語教育に対する要求が高まることで、授業の内容も質的に変わっており、2言語を習得している親が確実の増加している。彼らは家庭における子供の教育の祭、自らの言語学習の体験を生かし、子供の言語習得することに対して自らの役割を担っている。以下では、少数民族の学校に行きながら漢語を習った親たちの家庭状況を述べることで、彼らの漢語学習に対する考えと家庭教育の関係を考えてみる。

事例1） Rさん（42歳の男性）は1996年に結婚し、夫婦2人とも民族学校で教育を受け、学校教育の中で漢語を習得し、母語であるウイグル語と漢語を上手に使い分けている。2人の間には1997年に生まれた長女と小学校入学前の次女がいる。彼らが長女を幼稚園からウイグル族の学校に行かせたこと、次女を「民漢合校」の「双語クラス」に通わせることにしていると聞いた。それについて質問したところ母親はこのように話してくれた。「私の実家の近くにとても仲がいい友達が住んでいた。彼らの娘は私の長女より2歳年上だが、小学校入学前までよく一緒に遊んでいた。その後彼らは娘を漢族学校で勉強させ、学校が違っていたため、2人ともそれぞれ新しい友達ができ、お互いの交際が少なくなってきた。1年前にこういうことがあった。その友達の娘には恋人ができ、その恋人は高校での漢民族の同級生そうだ。彼女の両親は娘の交際に反対したが、でも彼女は両親に考えに反対し、その漢族男性と結婚しようしていると聞いた。彼女の両親はすごく悲しみ、自分たちの娘を漢族の学校に行かせたことを後悔している。私はそのことを見てきたので、次女の将来の結婚のことを考えて、娘をウイグル族の学校に行かせることにしている。でも今は、町の中に住んでいる人びとが子供たちをウイグル族の学校に通わせたいなら、「民漢合校」の「双語クラス」しかなく、あまり選択肢がなく、授業もウイグル語の科目以外は漢語で行われている。それでも同じクラスに通うウイグル族の子供たちが居たら、仲がいいウイグル族の友達ができるならば大丈夫だと自分に言い聞かせている。」

事例2） Gさん夫婦（それぞれ41歳、45歳）は2人の男の子を持ち、夫婦とも漢語ができる親である。長男が今年は中学校2年生、次男はウイグル族の幼稚園に通っている。周囲の人の話を聞くと、夫婦2人は子供を漢族の学校に行かせることに反対しているそうだ。そのことについて興味を持ったので彼らの家を訪ねた。父親は、「私たちは確かに子供を漢族の学校に行かせることに絶対反対だ。なぜならば子供の性格は、小さいころに受けた教育と周囲の人々（ 友達や先生）と密接な関係があると思うから。子供が学校にいる時間は家にいる時間より少

ないが、家では寝ている時間が多いということで、学校で学ぶ事柄は家庭で学ぶ事柄より多いので、子供に対する学校教育の影響は、家庭の影響より大きいと考えている。ウイグル族の子供はウイグル族の学校に行き、ウイグル族の先生に教育してもらった方がよいと思っている。もちろん、現在の社会では漢語学習は非常に必要となっており、様々な知識を習得するため、漢語を学ばなければならないということも知っている。しかし、漢族の学校に行かないと漢語を学ぶことができないのだろうか、私はそう思わない。漢語を勉強するには色々な方法があり、大勢の人々は漢族の学校に行かせるという方法を選択しているが、私はウイグル族の学校に行きながら漢語を覚えるのが一番良いと思っている。長男はウイグル族の学校に通っていていたが今ウイグル族の学校と漢語族の学校が合併して「民漢合校」になり、漢語を学ぶ環境は十分にある。母語の勉強をしたいなら「双語クラス」入るしかないし、次男を「民漢合校」の「双語クラス」に入れる予定をしている。以前は漢語を1つの科目として勉強していたが、今ではウイグル語を1つの科目として学ぶように変わりつつあり、「民考漢」の子供たちのように漢語が上手になると思う。そして夏休みや、冬休みの時に家庭教師を呼び、子供たちにウイグル語の勉強させている家庭も多くあり、ウイグル族のアイデンティティを持ち、自分がウイグル族であることをしっかり認識しつつ、漢族と同じように漢語ができ、徐々に激しくなっている競争で負けない子供を育てて行きたいと思っている」と語った。

事例3）小学校からウイグル族の学校に通い、小学校3年から漢語の学習をし始めたAさん（40歳の女性）は、同級生だったHさん（41歳）と結婚し、2004年に長男が生まれた。Aさんは、大学では漢語学科を卒業したので、漢語能力は高く、就職しても言語の問題は、克服できると信じていたという。しかし、就職して最初のころは、自分の漢語能力は漢民族に追い付いていなかったことから、次のように感じたという。「ウイグル族の学校に通い、ウイグル族の生徒たちと漢語をいくら勉強しでも、漢族のように漢語ができることはない。言語学習の中では一番重要なのが発音であり、そのために小さい時から漢語を習ったほうが、 将来の勉強にも役に立つと思った。子供が3歳になると、1年間ウイグル族の幼稚園に通わせ、1年後漢族の子供たちの幼稚園に行かせ、小学校も漢族の学校に通わせた。母語を忘れることに対しては、私も絶対に反対の考えを持っているので、子供が家に帰ったらウイグルで話すことに心がけ、夏、冬休みにウイグル語を学ぶクラスが開かれるので、他のウイグル族の子供たちとそのクラスに行かせて、学校で学ぶことができない母語の読み書きができるようになった。その上、自分の知り合いのウイグル族の子供たちと仲良くなり、一緒に遊ぶことにも心がけてきたので、ウイグル語がよくできるようになった。でも、ウイグル語を日常会話レベルで使うことが多いので、覚えている

単語が少ないことも事実だったが、文字の読みかけができれば、ウイグル語の本や、雑誌などを多く読むことで、単語量が増えると思っている。現在も家庭の中で必ずウイグル語を使うことを続けている」。

以上の事例では、漢語が話せない親たちは、今後の子供の教育の目的を自立して生活できることであると考えている。自分自身の経験、特に経済的な経験を通して、子供に対する教育の考え方が成り立っているといえる。そのため、ウイグル語だけ学ばせる、或いは漢語だけ学ばせるといった極端な結果が出ている。

漢民族の学校を卒業した親の家庭については、子供の教えに対する考え方がそれぞれ全く異なっている。自分が社会に出てから出会った事柄や人間関係と漢民族の学校に通ったことと密接に関連づけて、それに対する自分自身の考え方を家庭教育のなかで生かそうとしている親の姿が見える。

漢語とウイグル語の両方ができる親も、やはり自分が直面したことをもとに家庭教育の方法を選択していると考えられる

以上、述べてきたことをまとめると、漢語を学ぶことに対しては反対しないが、自分で見てきた周囲のことや自分が体験したことによって、漢語学習への意識の深さが異なっており、異なった方法で子供に漢語を教えていることがわかる。親たちはみな現在のウイグル社会での漢語の必要性を感じている。子供の進学や就職のためには、必ず漢語を学ばせなければならず、新しい科学技術や様々な知識を覚えるために、漢語を学習する必要があるという考えを持っている。だが、各家庭には母語の大切さや、ウイグル族のアイデンティティをずっと守っていく事を重視しているという共通点があり、それぞれの家庭の親たちは、自分独自の考え方によって、それぞれの方法を用いて、家庭の中の母語教育に努めていることがわかる。

まとめ

本章では中国の民族教育政策や教育政策の実施状況から、各少数民族地域、すなわち新疆ウイグル自治区における「双語教育」が確実に強化されていることがわかった。幼稚園を含む学校教育における「双語教育」状況について行った事例報告から以下のことが考えられる。漢語を学ぶことは将来的に自分のためであるという考えのもとで、民族アイデンティティの構築を重視しながらも漢語教育を行うことに賛成する親と子供が多く存在している。学校教育は基本的に漢語で行われることで、ウイグル族の生徒の多くは母語と漢語を同時に学ぶことが相応しいと思い、学校の中で母語教育を受けることできる「民漢合校」の「双語クラス」を選択する方

向がある。とは言ってもこの「双語クラス」は、ウイグル語を外国語のように学ぶクラスであるため、母語を習得したいなら家庭の中で、親が自ら教えたり、家庭教師に頼んだり、また子供に母語ができることの良さと必要性を教えたりして努力することが重要である。言い換えれば、ウイグル族が母語の大切さを意識して各自で努力してウイグル語を取得していくことに心がける必要があると考えられる。

第4章　新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語文化の継承と維持

言語と文化の問題に最初に注目し、言語は文化と関りが非常に深いと指摘したのがサピアとウォーフの2人である。言語は、人間に対して経験の仕方を規定する働きを持ち、人間の思考が母語によってあらかじめ定められた形式に即して展開するという「サピア・ウォーフ仮説」として知られている[宮岡伯人編1996：176]。

文化の仕組みと言語の働きについて、宮岡は「言語は人間の集団的な産物であり、文化以外のものでもない。言語には人間グループをまとめ上げる社会化の力がある。言語は、各民族集団に固有の言語あるいは言語特徴を共有し、そのことが集団の絆を強める。言語の共有は各集団の結束のシンボルとなり、アイデンティティの証となる。言語名は民族名と一致して、言語が民族をまとめ上げるきわめて大きな力を持つ」という[宮岡伯人編1996：36]。このように新疆ウイグル自治区のウイグル文化を考えたときに、ウイグル語がウイグル族の人々の絆を強めて、ウイグル族としてのアイデンティティの形成においても大きな働きがあったと言えるだろう。

民族的アイデンティティの証としての言語は、少数民族にとってかけがえのない絆の役割を果たしている。他民族支配に言語同化がまず図られ、同化政策の一環として、支配者の言語が押し付けられることも事実である[宮岡伯人編1996：36]。中国でも国家統一を図る手段として、「双語教育」と言われる漢語教育が実現することで、少数民族のアイデンティティ構築に逆の影響を与えていると言えないだろうか。本論で取り上げるウイグル族の民族アイデンティティは、国民教育である漢語教育のもとで、どのように変わろうとしているのかはこれから注目すべき点であると筆者は考える。

第2、第3章で述べたように、中国の改革開放政策の実施に伴い、各少数民族地域における「双語教育」政策も徐々に強化されていった。特に学校教育の中で徹底した漢語教育を実現させることで、新疆ウイグル自治区のウイグル族をはじめとする各少数民族の間で漢語学習が盛んになったことがわかる。漢語ができる少数民族が増えることや、新疆地域における漢民族の人口が日々増加することで、互いの漢語での交流ができる環境が整えることになったと言える。漢語を習得したウイグル族が漢語を話せるようになったことで、彼らの言語使用状況はどのように変わろうとしているのか、日常生活の各場面では、ウイグル族が漢語を使用しているとすれば、それはどのような状況なのか、言語使用状況の民族アイデンティティとの関連がどのようになるのかということはこれからの最も重要な課題であると考えられる。

そこで筆者は、民族文化の象徴である少数民族の言語は、漢語教育の実施によりどのような方向を迎えようとしているのか、少数民族の漢語習得に伴って漢民族との間に存在していた言葉の壁を超えることで、言語をはじめとする民族伝統文化の在り方はどうなるのか、漢文化が少数民族の民族アイデンティティに直接影響し始めた今、民族文化は新たな変容の道に向かっていると言えるのかという点に重点を置き、本章において考察していく。

それで、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の間で積極的に漢語を学び、漢語を習得したウイグル族が増加したことで、ウイグル族の言語使用状況は漢語を主とするように変わろうとしていると言えるだろうか、そうと言えるとするならば、どのように変わっているのか、ということを、現地調査を通して把握する必要がある。本章ではウイグル族が漢語学習をする中で、母語のウイグル語に対してどのような意識を持っているのか、その言語意識と実際の言語使用状況はどのような関連があるのかを明らかにし、多民族国家の少数民族地域における少数派の言語意識と言語使用状況を考察することを目的にして、新疆ウイグル自治区のコルラ市の事例を報告する。

調査地であるコルラ市は、新疆ウイグル自治区での中でも、「双語教育」が比較的早い段階で始められ強化されてきた、漢民族の人口が比較的多い都市でもある。よって漢語を話せる人が増え、特に若者が漢語を使うことによって言語使用状況の変化が目立つようになっている。さらに、コルラ市は、モンゴル自治州の首府であるため、総人口の3割を占める少数民族人口の中にウイグル族のほかにモンゴル族や回族が多く生活している。したがって多民族多言語地域であるという点もウイグル語の保護や維持と継続にとって不利であるとも考えられる。

筆者が2007年から2015年までにコルラ市で行ったアンケート調査とインタビュー調査の結果を検討し、現地で生活しているウイグル族の言語使用意識に関連するいくつかの問題を取り上げて、それに対する答えと実際の言語使用状況について分析し、言語使用意識と実際の行動、特に言語使用状況を考えていく。

第1節　ウイグル族の言語使用意識

言語意識について行われた社会言語学の従来的な研究は、「好きか、好きではないか、上手か、そうではないか」という内容に基づき言語意識を考察する手段が用いられてきた。宮崎は、「多文化の子どもの家庭における言語使用と言語意識」[82]において、多文化家庭における言語使用の実態と多文化の子どもの言語意識について分析するために、在日外国人の子供

[82]https://www.jrc.sophia.ac.jp/pdf/research/bulletin/2014_34_06.pdf 2016 年 11 月 21 日アクセス

たちの言語意識を調査している。その調査結果に基づいて、母語の使用は家庭に限定されるため、日本で暮らすエスニックマイノリティの家族にとって、改めて日本語が脅威語で、家庭での言語使用だけでは母語の保持に関して限界があることが確認できるとしている[宮崎幸江2014:125]。そこで筆者は、新疆の子供たちとって脅威語は漢語であると言えるのか、家庭の中だけでウイグル語を使用するとウイグル語の保持に関して限界があるいった宮崎の結論と同じ結論が出る可能性があるかを考えてみる。真田は、「自身や他人の言語に対する意識は、話者のアイデンティティの一環を構成し、その言語行動の在り方を左右する。」と述べる。そして言語意識は言語行動にどのように影響を及ばすのかということに対して、「言語変化の移行段階において、併存する変異形に対する評価や、人の認識の中にある自分の生活圏など、人の意識のあり方が言語変化の方向性に大きく関与していると古くから指摘されてきた」と言っている[真田信治2006:174]。新疆ウイグル自治区でも、民族移動が激しくなることで、言語接触が起こっているなか、国語である漢語と少数派言語であるウイグル語に対する言語意識はウイグル族の言語行動にどのような影響を与えているのかということも注目すべきあると考える。

筆者は、これらの社会言語学的な調査方法を参考にして、民族文化の核である民族言語を保持しようとする言語意識の度合いがどのようなものであるかを明らかにしていく。つまり、筆者が考える言語使用意識は、ウイグル語と漢語を習得した本人が母語は自らのアイデンティティの確立に関連するものであり、自らの母語を使用することで民族文化を維持しようとしているか、していないのかといった言語使用に対する意識であり、本章においてそれらを考察する。

以下では、コルラにおける事例報告を2つ分けて、ウイグル族の言語使用意識とウイグル族の言語使用状況について考察する。それらを把握するために、コルラ市における40家族(30代から40代の大人78人と小、中学生また高校生53人)に対して行ったアンケート調査とインタビュー調査の結果を分析して、言語使用意識、すなわちウイグル語の使用意識を明確にしていく。調査対象の具体的な状況は、以下のようである。農業従事者、自営業者、公務員である親たちの中に、ウイグル族の学校を卒業して、漢語教育を受けてなかった漢語が話せない者いるもいれば、漢民族の学校を卒業して漢語が母語より上手にできる者もいる。この親たちの中の比較的多くの者は、ウイグル族の学校に通い、ウイグル語で教育を受けながら漢語の勉強をして日常生活や職場の状況に対応できる漢語能力を持つ親である。彼らの子供に対する教育方法は、第3章で述べたように自分の生活体験と深く関連している。そして、親の考え方と教育方法が、子供の学校教育を決定し、学校教育が子供の言語使用意識に関わってくると考えている。

事例報告―　アンケート調査

『多元文化整合教育視野中的維漢双語教育研究』の著者である艾力は、以下のように述べている。母語以外の科目を漢語で教える「双語教育」は、生徒たちのウイグル語、ウイグル語の出版物に対する興味をなくして、民族言語事業の発展を妨げるといった意見も存在する。この意見は人々の「双語教育」に対する考え方及び、ウイグル族の言語文化の継承と維持に関する考えが異なっているからである。ホータンにおけるウイグル社会は、わが国の主流社会の言語文化を受け入れるか、ホータンにおける小中学校は漢語教育の実施が必要か、この点はウイグル族を含む多文化社会が直面している問題である。私はホータン地域で双語教育を実施する必要性があると考える」[艾力・伊明2011：149]。そこで、艾力は、小中学校の漢語教育の必要性を検討するために現地調査を行い、ホータン地域の小中学校の教師と生徒を調査対象とし、彼らの漢語教育に対する態度を把握している。具体的には、①ウイグル語教育に対する態度、②漢語教育に対する態度、③「双語教育」に対する態度との3つの項目に分けて調査を行い、調査結果を以下のようにまとめている。「ホータン地域におけるウイグル族生徒と教師たちは自らの母語に対して深い感情と母語を維持して発展させる強い願望を持っている。同時に彼らは、「双語教育」に対して肯定的な態度を持っており、漢語を学ぶことで現代科学知識を身に着け、進学のチャンスを得ようとしている。この地域の教師、保護者、生徒たちと教育行政管側の人々の「双語教育」に対する態度は、「双語教育」の発展に直接影響を与えるという考えである」[艾力・伊明2011：169]。この調査のウイグル族に対する漢語教育の必要性を明らかにするという目的は、筆者が明らかにしようとしているウイグル族の言語使用意識と異なっているが、調査方法において、ウイグル語を維持するべきであるかどうか、ウイグル語は漢語より重要であるかどうか、生活の中でウイグル語の必要性を高いかどうか[艾力・伊明2011：153-157]という部分では類似している。

筆者は2011年から2015年までコルラ市でフィールド調査を行って、これらの調査結果を以下の表にまとめて分析する。

言語使用意識について調査を行ったインフォーマントは、38組の夫婦と2名のシングルマザーからなり、男性38名、女性40名（合計78名）である。38名の男性の職業は、公務員22名、自営業者7名、小中学校や高等学校の教師6名、農民3名である。40名の女性の職業は、公務員16名、幼稚園講師2名、小中学校や高等学校の教師16名、自営業者1名、無職2名、農民3名である。アンケート調査の問題への回答は、はい・いいえという形式であり、結果は以下のようである。

（表5）言語使用意識　（30代～40代の78名の男女、男性38人、女性42人）

質問	30代の親33名 （女性17名、男性16名）	40代の親45名の （女性23名、男性22名）
漢語がより大事	4	2
ウイグル語がより大事	13	20
両方が大事	16	23
漢語がよくできないと不便	24	22
ウイグル語がよくできないと不便	9	23
子供にウイグル語だけ教えたい	2	5
子供に漢語だけ教えたい	5	2
両方教えたい	26	38
ウイグル語は民族文化のため	33	45
ウイグル語が民族文化のためではない	0	0
ウイグル語が自分の将来のため	31	45
ウイグル語は自分の将来のためではない	2	0

調査結果により筆者が作成

(表5)から以下のようなことが考えられる。多くの親たちのウイグル語に対する意識は高く、ウイグル語ができないと不便である、母語が民族文化と自らの将来のためであると考えていることがわかる。そして、漢語がより大事、子供に漢語だけを教えたいという問題への回答から、30代の親たちの漢語の必要性に対する考えが、40代の親より高くなっていることも読みとれる。それは、親たち自身が日常生活や職場などの中で直面したこと、例えば、漢語ができたからこそ良い仕事につけた、漢語ができたから得しているなどの考えが背景にあるのではないかと思われる。そして自分の子供にウイグル語を教えたいが、漢語も教えたいという親が圧倒的に多く、彼らの自らの母語を維持する意識が高い一方、子供の将来のために、漢語を学ぶ必要性が高いということも意識しており、ウイグル語と漢語両方ができることが望ましいと思っていることがわかる。

（表6）言語使用意識（小学校、中学校と高等学校の生徒 53名）

質問	小学生(9名)	中学生(32名)	高校生(12名)
漢語がより大事	2	8	3
ウイグル語がより大事	5	3	1
両方が大事	2	21	8
漢語ができないと不便	5	25	10
ウイグル語ができないと不便	4	7	2
漢語だけ学びたい	3	7	2
ウイグル語だけ学びたい	1	3	1
両方学びたい	6	22	9
ウイグル語は民族文化のため	9	32	12
ウイグル語が民族文化のためではない	0	0	0
ウイグル語が自分の将来のため	2	4	1
ウイグル語は自分の将来のためではない	7	28	11

調査結果により筆者が作成

子供たちの間では漢語の必要性に対する意識は、親より比較的高いということがわかる。年齢が高くなればなるほど、漢語の必要性が高いと感じており、それは彼らの日常生活や学校生活中で感じたことと密接に関係していると言えるだろう。母語に対する使用意識もかなり低いということでもなく、民族文化や民族アイデンティティのためには、母語の使用が大事であるという認識がまったくないというわけでもなく、将来的には、ウイグル語と漢語の2つの言語を習得する必要があると思っていることがわかる。これからは彼らが必要だと思っているのは、2つの言語を同時に上達させようという本当の意味でのバイリンガル教育ではないかと考えている。

事例報告 ― インタビュー調査

アンケート調査を行うと同時に、彼らの中から3組の家族にインタビューを行ったところ、以下のような回答があった。

事例1）漢語を聞き取ることができるが、話がうまくできないと思っている両親とその子供

「私たちのウイグル語を使用する意識が高いが、子供はその反対である。家の中では私たちがウイグル語で質問したら、子供は漢語で答えるか、子供の漢語での質問に私たちがウイグル

語で答えることになる。子供にウイグル語使用する意識が低い原因は、ウイグル語で話すのが嫌だ、田舎じみており、漢語で話すと格好良くなると思っているからである。」と親が語ってくれた。

事例2）漢語学校出身の親と「民漢合校」に通った子供2人

「私たち2人は漢民族の学校を卒業したので、漢語ができる。だからこそ、ウイグル語を使用する意識が必要であると思う。ウイグル語の文法にあった正しいウイグル語を使用するためには、それを使用する意識がなければ実現できないと思う。自分たちが就職後に意識してウイグル語使用していたなら、現在、間違ったウイグル語を使うことがなかっただろう。母語が話せるようになるためには、それを使用する意識を高める必要がある。2人の子供は、ウイグル語を使おうとするが、時々私たちと漢語での会話もある」という。

事例3）漢語とウイグル語の両方がよくできる親と子供2人

「私たちは、ウイグル語で教育を受けて漢語の勉強もしてきた。ウイグル語をこれからも使い続けていかなければ、ウイグル族が漢語を使えるようになったことで、母語の危機を迎えてしまい、自分たちの言語を失ってしまう可能性がある。今、多くのウイグル族の人々は、これを感じている。それで、私たちは母語を使用する意識をもっと高めて、子供たちにもそれをすすめなければならないと考えている。子供たちもそれを守ろうとはしているが、やはり、ウイグル語に新しい語彙として入ってきている漢語からの借用語が日々に多くなっていることもあり、漢語を混ぜて会話をすることもよくある。」

ウイグル族の言語使用意識についての調査結果から、母語を使用する意識が概ね高い、特に親たちの意識が高いということがわかる。具体的には、以下のとおりであると考えられる。

第1に、大人の間では、ウイグル語の学習を積極的に行うべきであり、母語教育は民族文化の維持や保護において必要性が非常に高く、子供たちに対しても母語の大切さを教えるべきであるという考えがある。第2に、子供たちの間では、学校でも、外で友達と遊ぶときも、本屋に行っても、テレビを見ても漢語が必要であり、ウイグル語を使う機会が多くなく、漢語ができないと日常生活、学校生活に不便だという考えも存在している。第3に、母語教育を受けることは重要だが、現在、職場や学校で漢語を使用することが多く、社会生活の面でも漢民族との交流も広がっているので、漢語ができないと不便が起こる。だから母語と漢語を同時に学ぶべきであるという考えが大多数を占めている。本論の調査地である漢民族が多く住んでいるコルラと、艾力が調査を行っているウイグル族が多く住んでいるホータン地域の状況は異なっているが、調査結果において、艾力の調査結果と似ている部分がある。それは、大多数のウイグル族はウイ

グル語と漢語を同時に習得する必要があると考えているということである。従って、調査地域が異なるとはいえ、現在ウイグル社会では漢語教育の民族伝統文化の継承と維持に影響を与えることを知りながらも、漢語教育を全面的排除するのではなく、母語と漢語を同時に習得することが必要でという考え方が主であると考えられる。

第2節　ウイグル族の言語使用状況

社会言語学の研究では、日常会話における言葉のストラテジー、(方略)、つまり人々が会話する際に、意識的に、あるいは無意識的にとる言語行動の研究が行われている。場所や相手が異なることで、言語行動がどのようになるかといった視点で研究が行われてきた。文化人類学の研究では、人々が実際に用いる言葉を観察しなければ、現実社会の言語問題に取りくめないとして、言語使用と社会文化的要素を融合した、包括的な言葉の民族誌と呼ばれるコミュニケーション理論が提唱された[真田信治2006:45]。筆者はこれらの研究方法を参考にしながら、家庭、学校と社会といった異なる場所、子供と大人、子供と先生などの異なる相手との間で用いられている言語を把握することで、ウイグル族の言語行動、すなわち言語使用状況を明らかにしていくことを目的とする。

筆者はコルラ市におけるウイグル族の言語使用意識を把握してから、実際の言語使用状況はどのようなものであるかを把握する必要があると考え、また同じ人々を調査対象として、彼らの言語使用状況、すなわち彼らの言語選択を考察していく。

「内地新疆班文化適応與教育対策」という論文において羅吉華[83]は、漢民族地域における「新疆高校クラス」の生徒たちを対象に、①心理的過程から、②行動過程から文化適応の状況を調査している。行動過程から調査を行う際、「新疆高校クラス」の生徒たちに、漢語がどのくらいできるか、周りの2言語(漢語と少数民族言語)ができる人々と、どの言語を使うか、授業以外の時間では漢語を多く使うかどうか、といった内容の質問を行い、高校1年と2年の生徒たちの答えに基づいて以下のように結論付けている。彼らは学年が高くなるにつれ、漢語能力が高まり、互いに少数民族言語と漢語ができる生徒同士の間でも、学年が高くなるにつれ、漢語をよく使うことに変わっていくという[滕星、張俊豪編2009:365]。この調査結果からは、漢民族地域であるので、漢語を使う頻度が高くなったと読み取ることもできる。筆者は逆に少数民族地域で

[83][滕星、張俊豪編 2009:345-453]

あるコルラ市における言語使用状況を考察することで、ウイグル族の実際の言語行動すなわち、言語使用状況を把握して結論づけていく。

事例報告—アンケート調査

言語使用状況を家庭、学校と社会という3つの方面から考察していく。

① 家庭における言語使用状況

（表7）80名の大人と 50名の子供合計130名

	大人同士(80名)	子供同士(50名)	大人と子供同士(130名)
ウイグル語が中心	73	12	87
漢語が中心	2	20	20
両方の言語混用	5	18	23

調査結果により筆者が作成

表7から見ると、家庭の中では主にウイグル語を使用しているが、漢語を使用することもある。具体的には、家庭の中で大人同士はウイグル語を使用し、子供同士はウイグル語と漢語を混用することがあり、大人と子供は主にウイグル語を使用していると考えられる。

② 学校における言語使用状況

学校における言語使用状況を把握するためには、4名だけが民族学校に通う、18名が漢族学校に、28名が「民漢合校」に通っている50名の子供を対象として調査を行う。彼らが学校ではどの言語を使うか、それは相手が異なることによってどのような変化があるのかを把握する。

（表8）小、中学校と高等学校の学生50名（民族学校生4名、漢族学校生18名、「民漢合校」生28名）

	ウイグル族生徒同士（名）	ウイグル族生徒と漢族生徒（名）	先生と生徒(名)
民族学校でウイグル語を使う （4名）	3		3
民族学校で漢語を使う （4名）	1		1
漢族学校でウイグル語を使う(18名)	2	0	0
漢族学校で漢語を使う （18名）	16	18	18
民漢合校でウイグル語を使う(28名)	20	0	11
民漢合校で漢語を使う （28名）	8	28	17

調査結果により筆者が作成

表8から見えてくるのは、学校の中では主に漢語を使用し、一部の学校ではウイグルと漢語を同時に使用することがある。具体的には、民族学校ではウイグル語を使用し、漢族学校では漢語を使用している。そして「民漢合校」で使う言語は主に漢語であり、ウイグル語を使用する場合もある。ゆえに、漢民族地域における学校であるか、それとも少数民族地域における漢民族の学校であるか、いずれにせよ2言語ができる生徒たちが漢語を使用することに変わりはない。

③ 社会における言語使用状況

コルラ市におけるウイグル族が社会の中ではどの言語を使用するのか、それらの状況は各場所や聞き手の違いによって異なるのか、彼らの言語選択の決め手となるものは何なのかということ明らかにすること目的とした調査を行った。このことを把握するために40代前半の大人たちが各年齢層の人々との間で使用する言語および同じ民族同士と異民族同士の間で使用する言語を把握し、彼らの言語選択に対して最も影響していることは場所と相手によるものであることが分かった。そこでそれはどのようであり、どのように異なるのかについて分析する。

調査対象者は、60代の年配世代は、33名（女性19名、男性14名）であり、40代前半の若い世代は、37名（女性18、男性17名）である。

（表9） 70名の大人を対象[84]として行った言語使用状況についての調査結果

	年配世代同士(名)	若い世代同士(名)	年配と若い世代同士(名)
ウイグル族同士でウイグル語を使用	33	37	70
ウイグル族同士で漢語を使う	0	3	0
ウイグル族同士でウイグル語と漢語を混用する	0	12	0
ウイグル族と漢族同士でウイグル語を使う	0	0	0
ウイグル族と漢族同士で漢語を使う	33	37	70

調査結果により筆者が作成

社会における年配の人々の間ではウイグル語を使用し、若い世代の間では主にウイグル語を使用し、漢語が混用する状況も存在する。具体的には、ウイグル族の年配世代は、同世代同士でも若い世代と会話する時もウイグル語を使用している。ウイグル族の若い世代同士は主

[84] 80名のインフォーマントの職業は、定年退職者、公務員、学校の教員、自営業者と農業従事者である。

にウイグル語を使用しているが、漢語を使う場合もある。漢民族とウイグル族の間では、年齢層に関係なく漢語を使用する状況が存在していることがわかる。このことから中国で実施されている「双語教育」は少数民族が漢語を学ぶ、漢語を使用することである思われる。また中国政府が「双語教育」の初期段階で掲げた、少数民族は漢語を学び、漢民族は少数民族の言語を学ぶという「双語教育」ではなくなり、漢民族は少数民族の言語を学習して使用することがなく、少数民族との間で用いられる言語は漢語であることが考えられる。

事例報告―インタビュー調査

言語使用状況についてインタビュー調査を行ったところ、2組の夫婦が以下のように言った。

例1)「私たちは日常生活の中で、自分より年上のウイグル族と話すときにはウイグル語を使っている。自分と同じ世代のウイグル族と話すときにはウイグル語を使うが、場合によって、例えば、漢族の学校を卒業したウイグル族がいれば、漢語を使うこともある。漢民族との交流の際は、年齢に関係なく漢語を使用している。親戚や家族との間で行われる各行事などに参加するときはウイグル語を使用しているが、仕事や政府関連の各行事の場合は漢語を使用している。私たちの両親の中には、当時漢語を話せる者が少なかったので、仕事をする際や会議などのときに、漢語をウイグル語に訳しながら行うことがほとんどだった。しかし、現在私たちと同じ世代のウイグル族の中では、漢語ができる者が増えたという考えがあり、仕事の内容などのすべてを漢語で伝えられることになり、訳することが徐々に少なくなっている。」

例2)「日常生活の中では、ウイグル族同士であれば、個人的付き合いにせよ、仕事の付き合いにせよ、いずれも主にウイグル語を使っており、漢民族とはどのような場合でも漢語を使う、例えば、多くのウイグル族と1人の漢民族の同僚が居たら、会話が漢語になる場合がほとんどである。こうしたことに対して、多くのウイグル族の人々は、漢民族の人々はウイグル語ができないからと説明するが、実際は長く新疆に住んでいる漢民族の中にはウイグル語をうまく話せなくても、聞き取ることができる人も多くいる。彼らはウイグル語を使おうとしないか、または自分がウイグル語を聞き取れることを知られたくないかといったこともあり、我々ウイグル族が漢語で話しているということである。」

まとめ

これらの調査結果から、まず、漢語学習の進行によって、ウイグル族の間で自らの言語に対して危機感を持ち、母語を失ってしまうことを恐れる人々が現れていることがわかる。彼らの間

で母語を大切にして、母語を使用し続けて行こうといった言語意識が比較的高いということが読みとれる。しかし、子供たちの中で、ウイグル語を学びたい、ウイグル語は将来の自分のためであると思う者が高学年になればなるほど少なくなっているという調査結果から、彼らは、ウイグル語よりも漢語を身につけた方が自分のためになると考えており、母語を使用する意識は大人に比べて低いものであると言える。

言語使用状況に関して、家庭の中ではウイグル語を使用していることに対して、学校の中では漢語の使用が中心であることも確かである。母語を使用する意識が高いということにも関わらず、世代が若くなればなるほど、漢語を使用することが目立ってきている。若い世代のウイグル族の人々は、現代社会の中で、徐々に高まってきている漢語の必要性を自分の目で確かめ、経験していくことによって、これからは漢語ができれば各場面において有利であると思っていると考えられる。同時に、母語の大切さを意識している大人の間でも、状況によっては漢語を使う状況が存在しており、特に漢民族の話者との言語使用状況は漢語が中心となっている。したがって、彼らの「ウイグル語を大切にする」という言語意識は、ウイグル語の実際の使用状況との間にずれが存在しており、母語を保護していきたいと思っているにも関わらず、自分が意識していないところで、母語を捨てており、ウイグル族の言語文化は、次第にウイグル語より漢語に変化しつつあるとも思われる。これらの調査には限界があって、調査対象の学歴、職種、世代別などによる比較的細かい点を区別して調査することができなかった。そして、また一部の調査結果とインタビュー対象である本人の言語意識の間には、矛盾している（本人が考えていることとその回答が異なっているのではないか）点もあるように感じる。これからも新疆ウイグル自治区ウイグル族の言語使用状況に引き続き注目していくことで、今後の課題の中で考察していきたいと思っている。

第5章　ウイグル族における宗教（イスラーム教）の受容

今日、中華人民共和国新疆ウイグル自治区の主要な信仰宗教がイスラーム教であることは広く知られている。歴史上、ウイグル族は様々な文化受容の過程を経験し、今に至るまでの各時代の中で、自民族文化の中にある文化要素を選択的に排除し、新しく受容した文化要素を再統合してきたと言われている。筆者は、現代ウイグル族の「標識」とされているイスラーム文化が経験した文化受容を考える上で、①ウイグル族は10世紀まで仏教やマニ教、シャーマニズムの信仰の影響を受け、現代ウイグル文化と異なった文化を持ったこと、②イスラーム文化を受容した後に、文化要素の再統合がなされたという2点に注目するべきであると考えている。

本章では、イスラーム教徒が数多く暮らす中央アジア[85]に位置している新疆ウイグル自治区を中心として、イスラーム教受容以前にこの地域に存在していた景教以外の仏教、マニ教、ゾロアスター教、シャーマニズムの信仰などについても触れながら、10世紀から19世紀の後半におけるウイグル族のイスラーム教の受容、つまり、イスラーム教がどのように新疆に流入し、定着していったのかを明らかにする。そして、新疆へのイスラーム教の伝播の過程について検討を行い、ウイグル族が受容したイスラーム文化、すなわち、現代ウイグル族の伝統文化におけるイスラームの

---

[85] ユーラシア大陸の中央部では、「世界の屋根」と呼ばれるパミール高原の東西には広い砂漠があり、砂漠の東方は中国に、西方はロシアやヨーロッパにつづいている。このパミール高原の東西の砂漠地帯は、トルコ系の民族が多く住んでいることからトルキスタン（トルコ人の土地）と称され、パミール高原より東は東トルキスタン、西は西トルキスタンと分かれ、前者の東トルキスタンは中国領の新疆ウイグル自治区を、後者の西トルキスタンは旧ソ連領のカザフスタン、ウズベキスタン、クルグズタン、タジキスタン、トルクメニスタンの5ヵ国をほぼ含んでおり、それに従って、東トルキスタンを中国領中央アジア、西トルキスタンを旧ソ連領中央アジアと呼ぶことができる。中央アジアには、イスラーム教を信仰しているトルコ系民族が集中して生活をしている地域であることは広く知られており、チュルク化とイスラーム化は中央アジアの歴史の中の大きな変容プロセスであると考えられている。しかし、アラビア半島で7世紀に誕生したイスラーム教はいったいいつ、どのようにこの地域に入ってきたのだろうか。また、イスラーム教の流入前にこの地域ではどの様な宗教信仰が存在したのか、それらは現在のようなイスラーム社会になるに従い、どの様に消滅或いは変容したのか、その原因は何だったのだろうか、という問いが思い浮かぶ。

要素について考え、ウイグル族が受容したイスラーム教と現代ウイグル族の文化の形成過程を探ることにする。

第1節　中央アジアの宗教(新疆ウイグル自治区)

新疆ウイグル自治区と言えば、シルクロードと関連づけられることが多い。シルクロードには、いくつかの本線と支線があるが、おおまかに1)草原のシルクロードというユーラシア大陸の北部を横断する草原地帯の交通路、2)オアシスのシルクロードという中央アジアの砂漠地帯のオアシスを通るオアシスの道路、3)海のシルクロードという東南アジア、インド経由でペルシア湾に着く海路、4)西南シルクロードと言われる四川、貴州、雲南、チベットを経由してインドと東南アジアに着く4本の交通ルートがあると言われている。この中で、一般的に言われているシルクロードとはオアシスのシルクロードを指しており、これは中国の長安から、河西回廊を通って新疆に入り、北路、中路、南路に分かれ、中央アジアを中心として東アジアと西アジア、アジアとヨーロッパおよび北アフリカを結んできた東西交通路である[周菁葆、邱陵1998:1]。砂漠の交易道路を指すシルクロードは時には戦争や侵略の道にもなったが、本来の機能は交易であって、その結果として東の匈奴、回鶻、丁霊などの諸民族やモンゴル人が西に移動し、ペルシア人、アラブ人とギリシア人がこの道を通って東に移動した。その移動の中で、各民族の文化交流や宗教の伝来があったことも事実である。

東西交易の道路であったシルクロードの中心地である新疆ウイグル自治区は、太古以来マニ教、ゾロススター教、ネストリウス派キリスト教(景教)、シャーマニズムの信仰の地域であったと考えられている。10世紀からイスラーム教の流入が始まり、現在、ウイグル族をはじめとする、イスラーム教徒が多く生活しているイスラーム教地域であることが広く知られている。

以下では、新疆ウイグル自治区における当時の人々は、イスラーム教を信仰する前に信仰したとされる各宗教・信仰について考え、イスラーム教の受容過程について参考文献に基づきながら考察を行うことにする。

1. シャーマニズム信仰

中央アジアに位置している中国の新疆ウイグル自治区の歴史から見ると、現代ウイグル族の祖先と言われている匈奴は紀元前2世紀以前からシャーマニズム信仰を持っていたと考えられている[周菁葆 邱陵1998:1]。突厥人とモンゴル人は天をTengriと呼ぶ。この言葉は紀元前3世紀前

に匈奴人によって使われていた。または匈奴人は自分たちの君主をTengriqut[86]と呼んだことから、自然への信仰の―天への信仰が紀元前3世紀前にはすでに匈奴人の中にあったことがわかるという[李進新2003:5]。現代ウイグル語でもTengriという言葉は神様という意味を持つ。例えば、天山山脈の天山はウイグル語のTengritagh(Tengri＝天、Tagh＝山)の中国語訳であり、このことからも古代ウイグル人には天や山への信仰が存在したことが分かる。

2. マニ教

マニ教は古代ウイグル族の中で広く信仰された宗教の1つである。この宗教はウイグル族が840年に西に移動するより前に、天山山脈の北部と南部に伝播した[維吾爾族簡史編写組2006:113]。マニ教は紀元3世紀のペルシアでマニによって創設された。紀元3世紀末期頃、ペルシア統治者がマニ教徒達を迫害したため、マニ教徒はイランから中央アジアに入った。まず、現在のウズベキスタンにあるトランスオキシアナ地方の主な住人であるソグド人[87]と呼ばれるイラン系の人々が影響を受けた[R.C.フォルツ著、常塚聴訳2003:33-34]。その後、央アジアの他の民族の中に広がったとされている[周菁葆、邱陵1998:79]。「回鶻」「回紇」という名前で歴史上に登場したウイグル人が744年に建国したウイグル帝国(回鶻王国)は、キルギス人の攻撃を受けて四散し、840年にウイグル帝国が崩壊し、ウイグル人は3つのルートで西へ移動した。一部のウイグル人はベシュバリク(現在のトルファンあたり)に移動し、866年高昌回鶻王国を建てた[海熱提江2002:248]。マニ教は高昌回鶻王国時代に一度盛んになり、数百年に渡って仏教と同時に存在し、14世紀にイスラーム教が流入してから廃れた[周菁葆、邱1998:80]。

3. ゾロアスター教

ゾロアスター教は、紀元前6世紀にペルシア人のゾロアスター(Zoreaster)という人(紀元前3世紀の人とも言われている[R.C.フォルツ著　常塚聴訳　2003:50]が創建した宗教であり、拝火教とも呼ばれる。3世紀頃から中央アジア地域に広がった。7世紀にはアラブがペルシアを統治、イスラーム教の勝利により、ゾロアスター教徒は東へ移動してきた[周菁葆　邱陵　1998:61]と言われ

[86] Qut は、古代ウイグル語で息子という意味を持ち、ここでの Tengriqut というのは天の息子という意味を表わす。

[87] ソグド人というのは、中国語文献で粟特人と言い、中央アジアのサマルカントとカシュガルを中心都市とした葉爾羌(ザラフシャン)河流域であるソグディアナで活躍した定住民族である。

ている。ゾロアスター教がいつ頃新疆地域に入ったのかについては明確な結論を出すことができないが、20世紀に新疆で出土したペルシアの銀貨が4世紀から7世紀のものであることが判明し、この銀貨の裏面にササン朝ペルシア[88]の国教ゾロアスター教の標識があったことから、新疆地域でゾロアスター教が流行したことが確認でき、ゾロアスター教が4世紀頃から、西域地域に存在したという[李進新 2003:78]。青木は、原始アーリア民族の大移動に際して中央アジアに残留したアーリア民族は、サカ(中国語では塞人という)族などの騎馬民族とソグド人などのオアシス定住民族に分かれた。ソグド人が活躍した歴史の舞台は、サマルカンドとカシュガルを中心としたソグディアナの本国だけでなく、東を目指して西域(現在の新疆ウイグル自治区)まで足を延ばしたのである。ソグド人の宗教文化は、漢語文献で「胡人、胡天を祭る、火神を祭る、拝火教、祆教、祆祠」などのキーワードで言及されている。ソグド人が信仰したゾロアスター教は、ペルシア帝国のゾロアスター教と異なったタイプであるがので、ソグド的ゾロアスター教と定義している[青木武2008:198-200]。そして、ゾロアスター教は中国語で祆教といい、祆の字は天神という2つの文字の省略である。一般的には火を祭るという意味であると考えられている[曹紅1999:250]。『魏書』巻101[89]には「高昌国[90]俗事天神」(高昌国の風俗は、祆教に仕える、すなわち信仰する)、また『魏書』巻102[91]では、「焉耆国[92]俗事天神」(焉耆国の風俗は、祆教に仕える(信仰する)と記載されている。このことから、周菁葆・邱陵両氏は、新疆地域ではゾロアスター教が信仰されていたことがわかるという[周菁葆、邱陵1998:61]。

4. 仏教

仏教は紀元前6世紀にインドで生まれた。仏教がシルクロードの南側の迂回路を通って西域のホータンに伝来したのは1世紀のことであると考えられており、伝説では、アショーカ王[93]の時代に僧侶がカシュミールからこの地域にやってきたとされている[R.C.フォルツ(著) 常塚聴(訳)2003:80]。『シルクロードの宗教』によれば、新疆には3つの仏教の中心地、すなわち、ホー

---

88 224 年創建し、651 年にイスラーム教徒に滅亡されたイラン王朝である。

89 『北史』巻 97 でも同じように記載されている。

90 現在の新疆ウイグル自治区のトルファン辺りの古名である。

91 『周書』巻 50 でも同じように記載されている。

92 現在の新疆ウイグル自治区のカラシャハル県である。

93 インド、マウリヤ朝の第3代王(紀元前 268～232 年在位)

タン、クチャと高昌があったという。当時、南側のホータンには、イラン系言語を話す住民が住んでおり、北側のクチャにはインド・ヨーロッパ語族の住民がいた。クチャから発見された仏教絵画はガンダーラ[94]様式の影響を受けていたことが、当時この地域では仏教が信仰されたことの根拠となっている。インド人の父をもつクチャ出身の僧侶であったクマラジューヴァ(Kumarajuva 344年-413年)は若い頃にカシュミールで仏教を学び、クチャに帰国してから仏教の支持者になり、402年に中国の首都洛陽に連れて行かれて、亡くなるまでその地に留まり、300近くの仏教経典を中国語に翻訳した[R.C.フォルツ(著)常塚聴(訳)2003:84]。高昌回鶻王国では、仏教への信仰は14世記にイスラーム化するまで続いたと考えられることが一般的である。

5. 景教

景教は大秦景教ともいい、ネストリウス派キリスト教の中国での呼称である。教祖ネストリウスがキリストやマリアの神性を弱めると解釈される説を主張したため、431年エペソ公会議で異端と決定された。そこで一派の人々は東方へ逃げ、ギリシアとメソポタミアやイランに入り布教した。ササン朝ペルシアの国教であるゾロアスター教の圧力を受けたが、後に国王の寛大な処置によって存続し、ソグディアナ、アフガニスタンの北部を経て新疆に伝来した後、7世紀に中国に伝来したと言われている[長澤和俊 2002:363]。現在のトルファン近郊の高昌で出土した景教に関連する文献や壁画などから、景教は中国内陸に入る前に西域で集会が行われたとされており、『洛陽伽藍記』の第4巻には、「百国沙門、三千余人、西域遠者、乃至大秦国」(様々な国の僧侶が三千人余り、西域、遠い者はひいてはローマから)と記載されていたことから、景教は6世紀頃に西域に伝来した可能性があるという[周菁葆 邱1998:156]。1625年に中国の西安から巨大な石碑が発掘された。碑題には「大秦景教流行中国碑」との文字が書かれており、正面には景教流行の由来を、側面には(シリア語と漢語で併記)副書と後代の加筆が記されている。この「大秦景教流行中国碑」の発掘によって景教についての研究が進み、唐王朝時代における景教の流入、繁栄、衰退の原因ついて、研究や討論が行われるようになった。

6. イスラーム教

[94] パキスタン北西部、ペシャーワル地方の古名である。紀元前後より数世紀間に渡って、この地域を中心にギリシア美術の影響を受けた仏教芸術が発達した。

イスラーム教は、アラビアのメッカ生まれのムハンマド（570年頃～632年）によって創始された。中央アジアの新疆地域に伝来したのは10世紀以降のことである。10世紀から15世紀までイスラーム教はカラハン王による新疆西部へのイスラーム教の伝播、東チャガタイ・ハン国時期の大量流入によって定着に至ったと言える。この500年ほどの間に、様々な形式で布教が行われ、現在では新疆ウイグル自治区の主な宗教になっている。イスラーム教の新疆への伝来について第2節で詳しく述べることにする。

以上のことをまとめると、中央アジアの中国領新疆ウイグル自治区には、イスラーム教地域になる前に土着信仰のシャーマニズムの信仰があり、そして外来宗教のマニ教、ゾロアスター教、景教、仏教などが存在したことがわかる。古代シルクロードの要衝であったことで、西と東の商業の道であるのはなく、西と東の宗教の伝播においても要衝であり、文化交流の文化伝播の道でもあり多宗教多文化地域であったと言えよう。

第2節　イスラーム教の新疆への伝播

新疆ウイグル自治区でのイスラームの伝播はカラハン王朝時代、東チャガタイ・ハン国時期、ヤルカンド・ハン国におけるスーフィズムとカシュガル・ホージャ家族時期、清朝後期に区分することができる。以下、これらの時期のイスラームの流入について述べることにする。

1．カラハン王朝時代

カラハン王朝による新疆西部へのイスラーム教の伝播について述べるとき、先に「回鶻」「回紇」という名前で歴史上に登場したウイグル人が744年に建国したウイグル帝国（回鶻王国）がキルギス人の攻撃で四散し、840年にモンゴル草原から西へ移動したことから始めるべきであろう。840年にウイグル帝国が崩壊し、ウイグル人は3つのルートで西へ移動した。一部のウイグル人はベシュバリク（現在のグチュン）に移動し、866年高昌回鶻王国を建てる。他の一部は、チュー河畔のバラサグンを中心としたカラハン王朝を成立する。この2つの王朝は、初めは西ウイグル帝国という一国家であったが、のちに宗教信仰の違いによって、完全に2つの王国に分かれ、クュサン（現在のクチャ）が高昌回鶻王国とカラハン王朝の国境になったとされる［海熱提江2002：248］。カラハン王朝は中央アジアのトルコ化・イスラーム化を促進したが、カラハン王朝の建国にはウイグル人が関わっていたと言われている［日本イスラーム協会2002：133、186］。

カラハン王朝時代では、イスラーム教の伝播をサトュク・ブグラ・ハン時代、ムサ・アルスラン・ハン時代、ウデュン（現在のホータン）とクチャなどへの2回の聖戦時代に分けられる。サトュク・ブグ

ラ・ハンは、サーマーン朝（875～999）の影響でイスラームに改宗し、カラハン王朝で初めてイスラーム教を信仰した人となった[維吾爾簡史編写組2006：132]。サトゥク・ブグラ・ハンは仏教を信仰する叔父から政権を奪い、カシュガルの支配権を握ると、ただちにイスラーム教を合法宗教と宣言し、人々にイスラーム教に改宗するよう呼び掛けた。当時、カラハン朝で主流だった宗教は仏教で、ほかのマニ教、景教、シャーマニズムを信仰する者多かった。そこで、サトゥク・ブグラ・ハンは旧来の宗教信仰を捨ててイスラーム教に改宗させるために強制的な措置をとり、アラビア国家をモデルにしたイスラーム法統治体制の宗教法庭を設置した。これで、カシュガルの支配者となったサトゥク・ブグラ・ハンはカラハン朝の半分をイスラーム教に改宗させ、カラハン朝は新疆のイスラーム化の先駆けとなった[丸山剛二 2008：57][95]。

ムサ・アルスラン・ハンはサトゥク・ブグラ・ハンの息子であり、彼がハン（君主）の位を継承し、960年にイスラーム教を国教と定め、20万帳[96]規模のトルコ人がイスラーム教を信仰した[維吾爾簡史編写組2006：133]。ムサ・アルスラン・ハンは、イスラーム勢力を自己の重要な支持基盤であると考え、王位争奪戦のなかでイスラーム教を広めるために、強制改宗政策を推し進めるとともに、イスラーム教の聖職者と密接に協力してイスラーム教の宣教運動を起こし、イスラーム教の布教活動を加速させたと言われる[丸山剛二 2008：59]。

カラハン王朝時代に起こった2回の「宗教戦争」、すなわち、聖戦は、于闐(ウデュン)、現在のホータン）とクュサン（現在のクチャ）などの仏教圏に聖戦を起こしたことであるとされる[日本イスラーム協会 2002：186]。960年にカラハン朝のムサ・アルスラン・ハンは、ウデュン王国の仏教地区に対する「聖戦」を起こす。これに対して、962年にウデュンが出兵し、「宗教戦争」が始まったのである。999年にカラハン王朝はサーマーン朝の首都ブハラを占領して、サーマーン朝を滅ぼした。それでサーマーン朝の支援を得て、ウデュンハン国を破って葉城(ヤルカンド)や莎車(カグルク)を占領し、1006年にウデュン王国を滅亡させたが、約40年後の1049年にウデュンの仏教徒が再び反乱を起こした。このように、ウデュン仏教徒および仏教を信仰する住民によるイスラーム占領軍に対する抵抗は半世紀にも及んだ[維吾爾簡史編写組2006：145]。2度目の宗教戦争では、1041年の内部抗争によってカラハン王朝は西と東に分かれ、1074年から1102年まで在位した東カラハン王朝のハンハロン・ブグラ・ハンは高昌回鶻王国を攻撃し、イリ河を渡り天山の北部

---

[95] http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php/BKS0000213.pdf?file_id=13374 2016 年 11 月 25 日アクセス

[96] （遊牧民族の）フェルトで作った天井の丸いテント

の地域から進撃して来た。このカラハン王朝対高昌王国の宗教戦争によって、再び大量の死者が出て、高昌地区の仏教文化は大きな破壊を受けたのである[維吾爾簡史編写組2006:145]。

丸山鋼二は「カラハン王朝と新疆へのイスラーム教の流入―新疆イスラーム教小史」という研究ノートにおいて、カラハン王朝時代のイスラーム教の流入に際して、サトゥク・ブグラ・ハンやムサ・アルスラン・ハンがイスラーム教を受け入れたり保護したりしたのは、政治的戦いの必要性があったためであるといえる。権力者の宗教に対する態度は、個人の好悪からではなく、大体が自己の支配を維持するのに有利かどうかから出発するものである。サトゥク・ブグラ・ハンがイスラーム教を受け入れたことは、カラハン朝はサーマーン朝からの「聖戦」を口実として攻撃を受けることを防いだ。また、イスラーム教の特色についていえば、カラハン朝で流行していた仏教・マニ教・シャーマニズム等の宗教と比べて、イスラーム教は信徒に対する結集力が強く、とくに「聖戦」の精神は権力者にとって自身の支配を維持して勢力を拡大するための手段として活用しやすいものであったことも、サトゥク・ブグラ・ハンやムサ・アルスラン・ハンのイスラーム受容の理由であったと考えられるという[丸山鋼二2008:58]。

2. 東チャガタイ・ハン国時代

モンゴル人は1225年にイランとイラクにイル・ハン国、中央アジアにチャガタイ・ハン王国、黒海、カスピ海、アラル海北方の大草原とロシアにキプチャク・ハン国を建てた。このうちのチャガタイ・ハン国は、13世紀にチンギズ・ハンの次男チャガタイが、4000人のモンゴル人と共に、中央アジアに移住して成立した国家である[余部福三 1991:237]。1318年頃、チャガタイ・ハン国は内部争いにより、サマルカンドを中心とした西部ハン国と東部チャガタイ・ハン国に分かれた。1346年トゥグルク・ティムルが東チャガタイ王国のハンになり、東チャガタイ王国政権は1513年まで166年間続いた。トゥグルク・ティムル・ハン(1346年～1363年)は東チャガタイ・ハン国の王族の中で初めてイスラームに改宗した人である。彼はイスラーム教を天山北部で強制的に実施し、16万人のモンゴル人をイスラーム教に改宗させた。天山南北に生活をしているモンゴル人は、定住化してイスラーム化し、ウイグル族に融合したという[維吾爾簡史編写組2006:233]

1407年にトゥグルク・ティムル・ハンの孫ムハモットがハンの位を継承してから、モンゴル人に対して非常に強制的な方法を用いてイスラーム教への改宗を実行した。『維吾爾簡史』によれば、ムハマット・ヘイデル・コラガニが書いた『タリヒーレシディア』(漢語訳第一部233)に、サッラ[97]をし

[97] イスラーム教徒が布を頭に巻くターバン。

ていないモンゴル人の頭部に釘を刺したという[維吾爾簡史編写組2006:236]。この時期に、ウイグル地域では、南方のカシュガルを中心としたイスラーム文化地域と東部のトルファンを中心とした仏教文化地域が形成したといわれる。

東チャガタイ王国時代に、トゥグルク・ティムル・ハンの王族がイスラーム教を受け入れ、ハン名をイスラーム式に変え、北部のモンゴル人が改宗しただけではなく、東部のトルファンを中心とした仏教文化地域に聖戦を起こし、15世紀末この仏教文化を持った地域でもイスラーム教が急速に広がり、16世紀初期にクムル地域の2人のハンが相次いで仏教からイスラーム教に改宗すること共に、新疆全地域がイスラーム化された[維吾爾簡史編写組 2006:232]。

チャガタイ・ハン国の勢力が14世紀以後に天山南北地域から退けたことなった。チャガタイ・ハン国の統治者たちのすべてがイスラーム生徒であったことによって、ハン国のすべての国務活動や軍事行政構造までが深く宗教色に染められたのである。このチンギズ・ハンの子孫たちは、カラハン王朝のブグラ・ハン王族が完成しえなかったこと完成したのであり、イスラーム教が布教された新疆の南方に次いで、仏教を盛んであった東部と北部のイスラーム化が完成され、新疆全地域で2回目のイスラーム教の定着が達成されたのである。

3. ヤルカンド・ハン国におけるスーフィズムとカシュガル・ホージャ家族時期

1513年東チャガタイ・ハン国のアフメット・ハンの3男サイーディ・ハンがヤルカンド・ハン国政権を打ち立てた。彼はイスラーム教徒であるため異教徒たちに、カシミール地域やチベット人に聖戦を起こしたことがあり、1533年ラダクに聖戦を起こした時に高山気温に合わなかったため死亡した[維吾爾簡史編写組2006:259]。ヤルカンド・ハン国時代にサマルカンドからイスラーム教の教派である霍加(ホージャ)家族が入ってきた。初めにヤルカンド・ハン国に入国したイサクホージャは宣教師としてスーフィズム(イスラーム神秘主義)を宣伝した。後に、ヤルカンド・ハン国のムハンメット・ハンがスーフィズムを支持し、ホージャ家の弟子になったため、スーフィズムの考えはヤルカンド・ハン国の都に入り、イスラーム教の統治者の地位を握ることになる。ホージャ家族はヤルカンド・ハン国政府の支持により、信仰者を急速に増やし、イサクホージャのグループが「黒山派」と称される。イサクホージャの弟の息子ユスフもヤルカンド・ハン国に入り、カシュガルで活動することになり、このグループは「白山派」と呼ばれる。イスラーム教のこの2つの教派は、王族から平民たちにまでに広がり、社会生活の全ての面に浸透した。ホージャ家族はスーフィズムの方法で広く信仰者を集めて軍事力を強化して、ヤルカンド・ハン国の末期にはホージャ家族の宗教軍事力が強くなっていく。後に、ホージャ家族の「黒山派」と「白山派」の間でも戦争が行われ、

「白山派」のアパク・ホージャが敗戦したときにチベットに逃げ出し、1678年にジュンガール政権のガルダン[98]に援助を求めた。その要請に応じてガルダンは1万2千人の軍隊を出し、アパク・ホージャと協力して、ヤルカンドを攻撃し、ヤルカンド・ハン国は滅したのである[劉志霄著1985:426]。

カシュガルでアパク・ホージャ家族政権の統治が始まったことによって、イスラーム教のスーフィズムが新疆南北に広がり、ウイグル地域で宗教勢力が政治勢力に変容していった過程ともなったが考えられている。スーフィズムは政治、経済領域で勢力を拡大し、ウイグル族の文化にも大きな影響を与えた。例えば、アパク・ホージャ時代には、個人自由、非宗教的な文学作品が姿を消し、宗教的特色を備えた内容やスーフィズムの迷信内容が中心となったのである。

4. 清朝後期

1864年に新疆で起こったムスリムの反乱(1864年夏にスデュク・ベグがカシュガルの「疎勒」コナシャハルを占領した事を指す)に乗じて、1865年1月にヤークーブ・ベグがカシュガルに入って、征服活動を展開し、1870年11月に新疆のほぼ全土を統治領域とする独立政権を樹立した。これを一般にヤークーブ・ベグ政権と呼称する[日本イスラーム協会 2002:507]。ヤークーブ・ベグはイスラーム法(シャリーア)を実施し、宗教法廷がウイグル族の都市と村落のいたるところまで設立されるようになり、数多くのモスク、マザールやイスラーム学校が設立され、宗教者に強い権力を与えた。異教徒に対する様々な措置を実施し、イスラームへの改宗を条件として命の保証がなされた[維吾爾簡史編写組 2006:377]。対外的にはオスマン帝国の宗主権下に入り、18世紀半ば以来清朝による統治下にあった地域に、中央アジアのムスリムによる政権を実現したという点において特筆される存在である。しかし、清朝は1876年に左宗棠の指揮下に軍を率いてヤークーブ・ベグの政権を打倒したのである。

このようにいくつかの時代のイスラーム教の新疆への流入を検討することにより、筆者は、丸山の「支配階級は政治的目的を中心に、自らイスラーム教へ改宗し、イスラーム教徒の聖戦精神を利用するため、被支配階級に強制的布教し、領土の拡大や統治力を強化する目的を達したのである」という考えに同意する。19世紀に後半から現在までにかけては、現代ウイグル族文化の形

[98] 16 世紀末、天山の北部とアルタイ山の南の地域で遊牧生活をしていたモンゴル部落の1つジュンガール部落が打ち立てた政権。1678 年チベットでラマとなっていたガルダンがジュンガール政権のハンであった弟の死後、天山北部に戻り、ハン位を継続した。

成の中で、逆転的な変化がみられる時期であり、ウイグル族の現代文化はこの時期に大きく転換したと思われる。さらに考えると、1876年に清朝の統治に入り、1884年に新疆省と称されたことに次いで、1950年の新疆の平和解放と1955年に新疆ウイグル自治区として中華人民共和国の一部として決められた中で、漢文化との接触と漢文化の影響を受け始めたことが思いおこされる。

第3節　現代ウイグル文化でのイスラームの要素

イスラーム教はウイグル族が10世紀に信仰するようになった後、ウイグル族居住地区で支配的な地位を占め、他の宗教を排除してウイグル族の中心的な宗教になった。これ以後、イスラーム教はウイグル族の経済、政治、文化、生活習俗などのすべての領域にわたって影響を深め、ウイグル族の伝統文化の中でイスラーム教の要素が見られるようになり、現在に至っている。

1．言語文字と日常生活用語

カラハン王朝時代では、公用語としてウイグル語と古代ウイグル文字（回鶻文字）が使われていたが、イスラーム教を信仰するようになってから、古代ウイグル文字はアラビア文字に取って代わっていった。『文学と歴史問題』という雑誌に発表されたA.ブヨプコウの「中央アジアの人々の文化史においてウイグル人が果たした役割」という論文にはカシュガル地域でのウイグル族は9世紀からアラビア文字を使っていたと記載されている[維吾爾簡史編写組2006：165]。

この時代に首都のカシュガルで宮廷人として過ごしたバラサグン生まれのユースフ・ハーッス・ハージブ（Yusup Khas Hajip）が1年半の歳月をかけて君主のあるべき姿、主君の守るべき道徳的心得を説いた『クタドゥグ・ビリグ（幸福になるために必要な知識）』を書いて、スレイマン君主に献呈した。この書物は一種の教訓・道徳書であるが、アラビア文字を用いたカラハン朝トルコ語の韻文で書かれ、現存するトルコ・イスラーム文学最古の作品であるとされている。そして、1074年に完成した『ディワン・ルガート・テュルクDivan Lughat Turk（トルコ語辞典）』の著者マフムード・カシュガーリー（Mahmud Kashgari）も、カシュガル生まれのトルコ人貴族であった。カシュガーリーはバグダードで教育を受け、アラビア語がよくできた人で、この辞書もバグダードで書かれたと思われるが、史上初のトルコ語・アラビア語辞典であるとされる。このことから考えると、イスラーム教が入ってきたことの他に、ウイグル族の文学作品が回鶻文字（古代ウイグル文字）とアラビア文字で書かれたことや、作品の内容としてイスラーム思想が強調されたこと、そして、世界初のトルコ語アラビア語辞典が発明されたことなどから、当時のウイグル族の考え方や、価値観に多大な影

響を与えた言語や文字に対して、イスラーム教の信仰を通じてアラビア語が大きな影響を与えていたことがわかる。

チャガタイ・ハン国時代に、チャガタイ語が形成された。チャガタイ語は音韻・文法・語彙がウイグル語の基礎となった言語である。よってウイグル字はアラビア文字を基礎としたチャガタイ文字を使うようになった。現在でもこのチャガタイ文字を基礎とした現代ウイグル文字が使用されている。ウイグル族がイスラームへ改宗してから、日常生活の中で使う言葉としてアラビア、ペルシア語から入ってきた言葉が現在でも多く存在している。例えば、dushmen(敵)、dunya(世界)、din(宗教)、dost(友達)などが挙げられる。

2. 祭りや各種の儀式

ウイグル族の祭りの日はイスラーム暦で定められている。イスラーム暦で毎年の9月1日は断食の始まりと決められ、それから1ヶ月経った後(イスラーム暦10月1日)にロザ祭り(開斎節)が行われる。開斎節から70日経つと(イスラーム暦12月10日)クルバン祭(宰性節)になる。この2つの祭は宗教的祭日である。この時にウイグル族は他のイスラーム教徒と同じように朝モスクでお祈りし、墓参りする。今日では、祭りが行われる3日の間、家族や、親戚、友人たち、同じ職場の人たちがお互いに訪問し、客を招いて娯楽活動を行うなど、自分なりのやり方でこの祭りを過ごしている[阿不都熱依木・阿西木2000]。この祭りはイスラーム教の伝来とともにウイグル族の間に入ってきたが、1000年以上の歴史の中でウイグル族の生活習慣と完全に融合し、現在ではウイグル族の伝統文化として定着している。

ウイグル族が行う通過儀礼で重視されているものは、割礼式、結婚式、葬式などであり、これらの儀礼はイスラーム教の形式で行われる。割礼はウイグル族の男の子が7歳になる前に行う儀式である。割礼儀式はウイグル語で「スナット・トイ」と称され、めでたいことであると言われる。当日に割礼をおこなう家に客を呼び親戚や友人たちで集まって宴会は始まる。家に招待された人々も、土産を持ち、割礼する男の子に祝いの言葉を述べる。宴会が終わってから、割礼を専門に取り仕切る長老が、手術するナイフ(メス)を子供に見せず、素知らぬ顔をして、物語りしながら子供に気晴らしさせ、子供の性器の薄い包皮の分をマッサージしながら、子供が気付かないうちに、素早く竹で作ったハサミで挟んで切ってしまう。子供が痛みを感じて泣きだそうとした時、ゆで卵もしくはナツメを子供の口に入れる。これを食べているうちに痛みがなくなり、割礼も終わる。現在では多くのウイグル族の子供たちの割礼は病院で行うことになっている。割礼もイスラーム教の受容と同時にウイグル族の中に入っており、現在では民族習俗になったとされる。

現代ウイグル族の結婚式では、「ニカフ」をとり行うことが結婚式の始まりだと言われる。「ニカフ」はイスラーム教の聖職者であるアホンが担当する儀式であり、具体的には次のような形で行われる。

結婚式当日の早朝、男性側が新郎を連れて女性側の家に来る。女性側の人たちは、色々な食べ物を用意して新郎たちを迎える。食事が終ってからイスラーム教のアホン[99]が「ニカフ」を担当し読経する。読経前にアホンが新婦の扶養費を決める。この扶養費は女性側に渡さない。もし結婚生活がうまくいかなくなって離婚する場合に女性の生活費として渡される。そして、結婚する2人の両親の許可を得て、茶碗の中に塩漬けのナンを入れ、コーランの経を読み、アホンが新郎に「あなたはXを妻として認めますか」と聞く、新郎は「認めます」と答える。次は、アホンはまた新婦に「あなたはXを夫として認めますか」と質問する、新婦が低い声で「認めます」と答えたら、アホンは続けて読経し、2人の夫婦になったことを宣言する。新郎新婦が塩漬けのナンを食べた後「ニカフ」の儀式が終わり、結婚式の宴会に入る。ウイグル族は、ナンと塩を非常に貴重なものと考え、塩漬けのナンを食べることは、私たち2人は、今日から一緒になり、苦楽を共にし、互いへの忠誠心が揺るぎないものであるという意味であると考えている。アラブ人の結婚儀式である「ニカフ」が、イスラーム教の受容と同時にウイグル族の間に入ってきた儀式であるとされる。

現代ウイグル族の葬式は非常に厳粛な儀式であり、イスラーム式で実施されている。ウイグル族の人々が死亡した時はまず、死亡者の顔を西南方向に向かわせ、きれいな白い布で顔を覆い、あごを白い布で縛って口を閉じ、死者の安らかな眠りを祈る。それから、友人や親戚に死亡通知をするが、真夜中に死亡した場合にでも真夜中に死亡通知をする。親戚や友人たちとの別れをするために、遺体は一日家に置かれる。葬儀前に死者の兄弟や専門の人が死体をきれいに洗い、白い布で遺体（男性は3層、女性は5層）を巻く。遺体を洗う時に他の人は中に入れず、アホンが扉の前で死者のために祈祷する。それから遺体をモスク内にある共同で使う死体寝台「タウット」におき、親戚や友人たちがモスクに運びアホンの司会でコーランの経を読んで葬儀を行う。それからマザル（墓）に行って埋葬する。埋蔵する墓は、長さ2m幅1m深さ3m四角い形であり、またその側面から穴を掘り、遺体の頭を西に足を東に向かわせてその穴の中におき、土の固まりで穴をブロックしてから土で埋める。埋葬が終わるとまたイスラーム経を読み葬式が終わる。この儀式は死者の「アッラー」の忠実な使用人であり、ムハマドの信徒任務を完成したムスリムであること表すと言われる。

---

[99] ウイグル族はイスラーム教指導者をアホンと呼ぶ。

3．生活習慣とタブー

一般的に、日常生活における毎日の挨拶の時『コーラン』の第10章10節、または51章25節に決められた世にアラビア語の「アッサラーム・アライクム（あなたに平安を！）」という挨拶の答えの挨拶として、またアラビア語の「ワ・アライクム・アッサラーム（あなたの上にこそ平安を！）」という言葉を使う。毎回の食事の前に「ビスムラ・ラヒマヌラヒム（アッラーの神のご加護のもとで）」食事が終ってから「アーミン・アッラフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」というのは、ウイグル族にとって一般的常識でもあると言われている。

長老たちを尊敬することが非常に重視されており、長老たちの前でタバコを吸ったり、酒を飲んだりすることが禁止され、長老たちと会ったら、立ち上がって自ら挨拶をし、席を譲ることが決められている。食文化の中でも、イスラーム教のコーランに書かれたように、豚を育てたり、豚肉を食べたりすること、死んだ家禽や家畜を食べること、猫、犬、ロバなどの動物を食べることは禁止されている。

モスクや墓の周り、水源地や食べ物と関係があるところをきれいに保つことが決められ、汚れものを持ち込んだりすることが禁止されている。モスクはウイグル族の文化の中で非常に重要な機能を果たしている[曹紅1999：286]。モスクはウイグル族から神聖な宗教施設と見なされている。1日5回の礼拝と週1回の大礼拝[100]以外は、宗教学校の講義場としても用いられてきた。新疆に於けるウイグル族のモスクは、同地域のイスラームを信仰する他の民族によりはるかに多い。特に南疆では、都市、村落を問わずいたるところに大小様々なモスクが分布している。モスクはウイグル族の日常生活において重要であり、1つの宗教文化としてウイグル族の思想や考え方に影響を及ばしている。また1つの独特の民族文化としてウイグル族の生活の中に浸透している。各モスクは人々を自然に集める力をもっており、非常に強い文化機能を表わしている。

以上のことから、ウイグル族が10世紀にイスラーム教を信仰し始めてから、生活のあらゆる面においてイスラーム教の強い影響が見られるようになっており、ウイグル族の伝統文化の形成の中で大きな役割を果たしてきたことがわかっている。そして、一部のイスラームの教義がウイグル族の日常生活習慣にとって代わっていたと言うことができると考えられる。ウイグルの人々にとって、イスラーム教は信仰と礼儀を支える宗教的原理の体系であると同時に、民族の伝統と集団的アイデンティティを構築する文化装置であり、民族知識を伝達する教育体系でもあると考えられる。

---

[100] イスラーム教では毎週金曜日の午後に行われるとジュマ称される大礼拝がある。

第4節ウイグル族の文化受容とイスラーム教

第3節の現代ウイグル族の伝統文化におけるイスラームの要素についての記述によって、ウイグル族が10世紀にイスラーム教を信仰し始めてから、ウイグル族の伝統文化の中でイスラームの要素が見られるようになってきたことがわかる。賀霊、佟克力は、『歴史民族文化』では、各民族の歴史における文化選択の表現は、積極的選択、強制的選択と自然的選択の3つの形式を持っているという[賀霊、佟克力2006:143]。イスラーム教の受容は、ウイグル族の歴史における大きな文化的選択であり、イスラーム教への信仰は現代ウイグル族の伝統文化の形成に大きな影響を与えて、ウイグル族独自の宗教文化の形成がなされてきた。筆者は、賀霊らの民族の文化選択における積極的文化選択、強制的文化選択、自然的文化選択の3つのプロセスを通して、イスラーム教の新疆への伝播と受容について説明することができるのではないか考えている。

1. 積極的宗教選択(受容)

第2節で述べたようにカラハン王朝(940年～1211年)時代、特に南疆はイスラーム化され、カシュガルを中心としたイスラーム文化圏が形成された。この時期300年以上の時をかけてウイグル族のイスラーム化を促進したカラハン王朝では、初めて支配者が積極的にイスラーム教を信仰した。たとえば、サトゥク・ブグラ・ハン(943年から956年まで在位)をはじめとする支配者がイスラーム教に改宗して、ウイグル族の中で初のムスリムになった。これをきっかけにイスラーム教はウイグル族の間で様々な形で広がり、現代ウイグル族の伝統文化の形成や強い役割を果たしたと思われる。

次の段階である東チャガタイ・ハン国(1318年～1565年)時代でも、トゥグルク・ティムル・ハンがチャガタイ王族の中で初めてイスラームを信仰したモンゴル人になり、ハン国の王族の中でイスラーム教が広がった。この時代にイスラーム教は国教と定められ、このモンゴル人族の人たちが、カラハン王朝時代にブグラ王族が聖戦を起こしてもイスラーム化することができなかった高昌回鶻王国のイスラーム化を完成させたことが分かる。

また、ヤルカンド・ハン国時代にも、アラブ国家で発生したイスラーム教のスーフィズムの考えを持つホージャ家が王族の中に入って、国家の政治や軍事力を握ったことになった。従ってイスラーム教のスーフィズムの考え方をウイグル国家の王族の中から、当時のウイグル族の思想やイスラーム教儀の考え方に大きな影響を与えたことが分かる。

このいくつかの時代のイスラーム教の伝播の過程について考えると時に、イスラームへの改宗は各ウイグル国家の王族から始まり、イスラーム教の聖戦精神(ジハード精神)が、権力者の国家統治を強化するための手段となった。

2. 強制的宗教受容

また同様に第2節の記述から、10世紀から16世紀前半まで続いたイスラーム教の新疆への伝播過程は、支配者が積極的にイスラーム教を受容したことと同時に、被支配者が強制的に改宗させられたことが分かる。例えば、カラハン王朝のサトュク・ブグラ・ハンの息子ムサ・アルスラン・ハンは在位中にイスラーム教を国教として強制的改宗が実施され、960年に20万帳のチュルク人がイスラーム教へ改宗したとされる。

またチャガタイ・ハン国時代でも同じように旧来の宗教信仰を捨てて、イスラームへ改宗させるために強制的な措置を実施し、16万人のモンゴル人がイスラーム教へ改宗したという事実ある。ここから、この時代では支配者たちの異教徒たちに対する聖戦や強制的改宗政策により、ウイグル族は自分たちの宗教を強制的に捨てさせられ、イスラーム教を受け入れたと同時に、イスラーム文化も強制的に受容されたことが考えられる。

東チャガタイ・ハン国のトュグルク・ティムル・ハンの息子ヒズル・ホジャ・ハン(1389年～1405年在位)時代にウイグル文字の統一がはかられた。この熱心な信者がイスラーム教を広めたと同時に文字改革を行い、アラビア文字を普及させ、多種文字を併用する時期を終わらせた[劉志霄-1985:299]。この文字改革を通して、東部が回鶻文字(古代ウイグル文字)、南部がアラビア文字を同時に使用した状況から、アラビア文字を基礎としたチャガタイウイグル文字を使用するようになったのである。またチャガタイウイグル文字を基礎とする現代ウイグル文字の成立が実現し、現在ではウイグル族の日常生活の中で非常に重要な交流手段となったのである。この例から、当時ウイグル族が強制的に受け入れたアラビア文字は、現代ウイグル族の言語文字文化の柱となり、ウイグル族の強制的文化受容が現代ウイグル文化の伝統文化の形成に大きな役割を果たしたことが考えられる。

以上のようにウイグル族のイスラーム文化の受容については、従来から支配者の積極的受容と被支配者の強制的受容があったと考えられている。筆者は、ウイグル族のイスラーム信仰の特徴であるスーフィズムに着目し、イスラーム文化の受容の中にはもう一つのプロセス、つまり自然的受容であったのではないかと考えている。以下、この点について詳しく述べることにする。

3. 自然的宗教受容

ヤルカンド・ハン国時代または、カシュガルのホージャ家族の統治時代では、イスラーム神秘主義のスーフィズムが、ウイグル族のイスラームへの改宗大きな役割を果たした。

何故イスラーム教のスーフィズムの考え方が、ウイグル族の間でそれほど深く影響を及ばすことができたのか。それはウイグル族が広い地域でシャーマニズムを信仰していたことが原因ではないかと考える。スーフィズムは、遊牧民のシャーマニズムと類似していたため、スーフィーはシャーマンと同様と認識されてウイグル族にとって受け入れやすかったのではないか。シャーマニズムを信仰したウイグル地域にスーフィズムが急速に入り込み、イスラームとシャーマニズムの接触の結果として、今でもイスラーム教徒でありながらのバフシやペレホン(シャーマンする人)が存在している。これから筆者は、ウイグル族がイスラーム教を受容したプロセスの中に自然的受容があったのではないかと考えている。

1) シャーマニズム

シャーマニズムとは、自らの魂が身体を離れ霊界へと赴くとされる「脱魂」や、ある精霊がその身体に乗り移るとされる「憑霊」によるトランス(人格転換)を通じて、超自然的な存在と直接的交渉し、治療や予言、祈願を行う宗教的職能者シャーマンを中心とする宗教実践を指す。この概念にあてはまるかどうかをある宗教がシャーマニズムであるかどうかの指標とするならば、新疆の伝統的民間宗教はシャーマニズムであったといえよう[片山隆裕編1999:74]。ウイグル族は2000年前からシャーマニズムを信仰してきた[阿不都熱依木・阿西2000:371]。現代のウイグル社会では、シャーマンと言える神や霊魂と交流する能力があると言われる占い師「ラッマル、パルチ(Remmal Palchi)」、祈祷師「ダハン(Dahan)」、太鼓を打って治療する呪術師「バフシ(Baxshi)」もしくは「ペルホン(Perexon)」 が存在している。このバフシやペルホンなどを中心としたシャーマニズムの「万物有霊、霊魂不滅」という思想がある[阿不都熱依木・艾比布拉-2000:371]。具体的な特徴は決められた規則や道具、服装があり、普通は2、3人のバフシが一緒に行う、②頭痛や、出産後の病気などを治療することが中心である、③霊魂をムスリム霊魂と非ムスリム霊魂という分け方することがある。バフシらが行う治療方法は、まず彼らが奇妙な使い古された服を着て、家の中を暗くして、家の中心部に木の柱を打ち込み、それを紐で天井とつなぐ。患者がその紐を掴んだまま座ってから、バフシが両手を顔の前にあげて「ドゥア(Dua)[101]」 をしてから呪術を始める。他のバフシたちは太鼓を打ち患者を立たせて家の真ん中に打ち込んだ柱をまわさせる。呪術が続き、

[101] イスラームで祈りをささげるとき両手を顔の前に合わせてすること。

太鼓を打つ速度も早くなり、患者はこのリズムによって周り続けて疲れ果てて倒れる。この時にまたイスラーム式の「ドュア」をしてから治療が終わる。これは「ペレオイニティシュ(Pere Oynitish)」言われる。紐を天井につなぐのは空で飛んでいる霊魂(善鬼)に対する懐かしさ、地面につなぐのは、霊魂(悪鬼)を地獄に追い出すことで病気が治ることを表わす意味をもつと言われる[阿不都熱依木・艾比布拉2000:403]。

占いすること(Remmalchiliq　Palchiliq)もウイグル族のシャーマニズムの信仰からの産物であると言われる。ウイグル族の占いは、白い石もしくはトウモロコシの種や箸などを使って行う。コーランを使う例もある。占い師の特徴的能力は、泥棒を捕まえて取られた物を戻すことができる、将来や運命などの説明ができることであると言われる[阿不都熱依木・阿西木-2000:404]。

占いは古代ウイグル族の中に広く存在したものであり、トルファンから出土された5世紀に属する占い箸、また9世紀に属する『エリクプテュク』(Palname)や小説、神話における人の悩みを解決してくれるヒズル「コーランダズ(Qurandaz)[102]ともいう」の表現、王族の隣にいつも策士「コーランダズ」がいるという説明も占い師の存在を表わしており、後にイスラームと融合し今日に至った[阿不都熱依木・阿西木2000:404]。

祈祷師は、経典を暗唱して呪うことで病気を治す呪術者であるダハン(Daxan)を指す。ウイグル族はダハンとバフシの区別がよくわからないが、治療方法はバフシと違っている。ある時にダハンが暗唱している経文を聞き取れることで区別することができるという。しかし暗唱している経典の大部分をバフシと同じく区別できない呪術語であることも事実である。

2)スーフィズム

イスラーム神秘主義のスーフィズムの起源について考える時、近代の研究は、スーフィズムの単一明確な起源に遡及できないと立証した[R・A ニコルソン著、中村廣治郎訳 1996:22]。スーフィズムの定義として、「スーフィズムは次のようなものである。神だけが知る行為がスーフィーの上をとり過ぎている(つまり、彼になされている)ようで、なければならないということ、そして、スーフィーは神だけが知る方法で、すでに神と共にあるべきだということである」、「スーフィズムとは完全な自己修行である」、「スーフィズムとは何も所有せず、何も所有されないことである」などがあるが、これはスーフィズムのある局面や特徴を簡便に叙述しているということができる[R・A ニコルソン著、中村廣治郎訳 1996:40]。

[102] ウイグル語であり、コーランを見て将来のことが分かる人という意味である。

スーフィズムにおいて修行とは人間が神に接近するための準備である。それはまず、自己の行為を形式的に倫理的に神の命令や意志に一致させるだけではなく、内面的にも自己と神と隔てる一切のものも取り除くことである。そのためにスーフィーは、通常のムスリム以上の神の法シャリーアと使徒のスンナ[103]を厳しく守るだけではなく、様々な禁欲的修行によって、神以外の一切の物への執着を断ち切り、神を求めるよう努力する。

この修行の過程について後に理論的反省が加えられ、修行者のたどるべき道として、神秘階梯(マカーマート)がまとめられている。マカーマートとは、①懺悔・回心、②律法遵守、③隠遁と独居、④清貧と禁欲、⑤心との戦い、⑥神への絶対的信頼である。修行志願者は断固たる決意を持って導師ピール(Pirはペルシア語を有来しており、現代ウイグル語では、専門家、プロという意味を持つ)の指導を受けながら、シャリーアを遵守するだけではなく、人々と交わらず、世俗の欲望を断ち、財産を捨て、一切の邪心を克服し、すべてを神に委ね、6つの階梯をひとつずつ昇っていく。こうして倫理的な面で準備ができると、一切の雑行や雑念を去り、ひたすら神の名を唱える。例えば、「アッラー、アッラー」と唱え、のちには「ラー・イラーハ・イッラーアッラ(神は唯一である)」という言葉を繰り返して、思念を神に集中するジクル[104]段階に進む。導師のピールが、単なる精神錯乱と違う正しい道を歩んでいるかチェックする。そして修行者のスーフィーは最後には自我意識を完全消滅し(ファナー)自分と神を分け隔てるものがなくなり、神と合一するという[日本イスラーム協会 2002:104]。

このスーフィーたちは、神と合一した状態から、元の醒めた状態に戻り、通常の社会生活を営む。しかし、神との合一を経験し、それを繰り返すスーフィーは、もはや自らと他人との区別なく、人々の悩みを聞き、助言するだけではなく、奇跡すら起こして悩める人々を救おうとする。すなわち、スーフィーは神の友として、神にとりなす能力を持つと信じられ、その墓は聖墓とされ、子供が欲しいなどの様々な願望がある人は参拝するようになったと言われている[金宜久 編 2009]。

3)シャーマニズムとスーフィズムの共通点

シャーマニズムとスーフィズムの説明から両方の共通点として、以下のことを述べることにする。シャーマニズムは、万物は霊魂があり、霊魂を「善霊」と「悪霊」に分ける。人々は、人に悪霊がの

---

[103] コーランでは、「昔の人々のやり口」「慣行」(8 章 38 節、35 章 43 節)、「神の慣行」(17 章 77 節、33 章 62 節)という説明があり、ムスリムの守るべき正しい基準を意味する。

[104] コーランに特徴的な用法は「神は偉大なり」「神に栄光あれ！」のような一定の言葉を口にして、「神の栄光を称えること」「御名を唱えて神を讃美し称える」ことである。

り移ったら病気になり、シャーマンは善霊を保護し、悪霊を追い出すことで病気を治すことができる奇妙な能力を持つと信じる。一方スーフィズムは、現在知られている最古の定義では、「神的実在の把握」あるが、イスラームの神秘家たちは、自ら好んで「実在に従う者」と呼ぶ。人々は、スーフィーたちの6つの階梯を昇っていくことで、ジクル段階に入って、神と合一になることを繰り返す中で、助言する、悩みがある人を助けることができる奇跡的能力を持つ神の友であると信じる。

この2つの説明から、シャーマンとスーフィーは、普通の人々と違って、人間の力を越えた奇跡的能力があるとされ、難病を治すことや、悩む人を救うことができると考えている当時のウイグル族に対しては、類似しているものとされたのではないか。シャーマンのバフシが治療するときに暗唱する呪術語とスーフィーの「神は偉大なり」「神に栄光あれ！」のような一定の言葉を繰り返しながら口にすることで、自分意識完全消滅してトランス状態になって神と一体となることをウイグル族は行為の面では類似していたものと考えられたのだろうか。

次は、現在ウイグル族の間で「サマーウスリ[105]（Sama　Usuli ）」という踊りが多く存在していることである。主にカシュガル、ヤルカンド方面に普及している踊りで、普通は毎年のロザ祭りとクルバン祭りの時に、祭りの1日目の早朝モスクで行われる礼拝が終わってから、3日間モスクの前で男性だけが踊る踊りである。「サマー」という言葉についてスーフィズムの術語では、音楽や舞踊を伴って、集団で神を祈念する修行を意味すると定義する。「サマー」はスーフィズムの初期から存在したと思われ、10世紀から書かれ始めたスーフィズム手引書のほとんどに「サマー」についての章がある[日本イスラーム協会2002：243]。現在ウイグル社会で存在している「サマー踊り」はスーフィズムの由来を通じて始められ、祭りの時に踊る民間踊りになったと考えられるだろうか。

その「サマー踊り」を中国語文献で「薩満舞（中国語のピンインではsamanwuと表記する）」と記載されているとおり、シャーマニズムは中国語で「薩満教」称されることから、そして踊る時に太鼓のリズムによって、連続で回転動作すること、その回転の緩慢さが段々と加速することを、シャーマニズムの「バフシ」が治療するときに太鼓のリズムに従って、回転することに似ていると考えられるのではないか。「サマー踊り」は、ウイグル族の土着信仰であるシャーマニズムの信仰に由来した踊りであるのではないか。この点について、『ウイグル族の生活方式』では曹紅が「この踊りは本来宗教的踊りであり、のちに祭りの時に踊る民間人の踊りになった」と述べているが[曹紅1999：89]、曹紅の言う「本来は宗教的踊りである」ということは、スーフィズムを指しているか、それともシャーマニズムのことを指しているのか不明であるので、この点についてまた今後の課題とし

[105] ウスリ(Usul)とは、ウイグル語で踊りという意味をもつ。

ておきたい。以上から、ウイグル族に対してイスラームのスーフィズムは、土着信仰のシャーマニズムに類似するものであった可能性があり、従ってウイグル族にとってスーフィズムは、自分たちの民間信仰であったシャーマニズムに類似していると思われたことで、受け入れやすかったと考えられ、イスラーム受容の中で自然的受容があった可能性もあるのかもしれない。

まとめ

本章で述べたことをまとめると、以下のとおりである。10 世紀から 19 世紀の後半にかけて新疆地域に流入したイスラーム教をめぐって、ウイグル族のイスラーム文化の受容は、積極的受容、強制的受容、自然的受容という3つのプロセスがあったと考えられるのか。1つめは、当時の支配者自らのイスラーム教の受容であり、イスラーム教徒の聖戦精神を利用して政治的目的においてイスラームへ改宗するという積極的文化受容である。2つめの強制的文化受容は、支配者はイスラーム法と強制的改宗措置を実施したことによって、被支配者がイスラーム教を強制的受容したことである。3 つ目は、ウイグル族には土着信仰としてシャーマニズムが存在していたため、当時のウイグル族の人々はイスラーム教のスーフィーと土着信仰のシャーマン（バフシ）を類似した者であると受け止めることで、イスラーム教は当時のウイグル族にとって受け入れやすかったと言えるのか、そうであるならばウイグル族のイスラーム教を受容するプロセスの中に自然的文化受容があったのではないかという考えである。本論で明らかにしようとしていることは、ウイグル族の言語文化と宗教文化の継承と維持について考察することであり、ウイグル族に定着していた言語文化と宗教文化が現在では、どのように変容しているのかということでことである。すなわち、ウイグル族が漢語を学習することで、漢民族との交流が深まることによって、イスラーム教を基礎としているウイグル族の宗教文化がどのように変容しているのかということであるので、本章において考えられた自然的な文化受容について、上で述べたように可能性があるのではないかということを提言することに留める。

ウイグル族の教育を歴史的にみると、宗教との密接な関係があることが分かる。シャーマニズム信仰時代では、バフシたちは最初に人々の病気を治すために呪術を行う役目を果たしたが、後には、占いを通して病気を予防したりする方法を教えることで、人々に教育する役目もこなした。これはウイグル族における最初の教育であるとされている[阿不都拉・塔里甫 1986：9]。

ウイグル族がマニ教信仰し始めたころ、762 年に唐王朝の依頼により安禄山の乱を鎮圧に向かったウイグル族将軍は、中原から 4 人のマニ教僧侶を西域につれて帰った。マニ教僧侶はウイグル地域の人々にマニ教の教義を教えたことで、宗教を学ぶという教育方法が出現

した。高昌王国時代におけるウイグル地域で、マニ教の寺、学校などが作られ、人々は光を象徴とした白い服を着たり、家の壁を白く塗ったりした[阿不都拉・塔里甫 1986:12]。

ウイグル族が仏教を信仰した時代では、クマラジューヴァと同様の教育者たちが、仏教の経典翻訳し、解釈することによって宗教教育を行った。この時代では、キジル千仏洞の壁画が描かれ、『金光明経』[106]が古代ウイグル文字に翻訳された[阿不都拉・塔里甫 1986:33]。

ウイグル族がイスラーム教信仰してから、宗教と教育の関係がさらに密接になった。イスラーム教の影響で古代ウイグル文字が、チャガタイウイグル文字に入れ替わり、イスラーム教の影響を受けた文学作品が数多く執筆された。モスクの別室やモスクの近くで宗教教義を教えるマクタブ、マドラサという学校が設置されて、ウイグル族の学校教育の新しい形態が構成された。文学、書道、音楽、哲学、倫理などの分野において、イスラーム教が重要な役割を果たすようになった。したがって、ウイグル族の教育事業の中で、宗教の影響が強く、教育は宗教教義を教えることから始まったといっても良いだろう。後には、ロシアなどの西洋の影響で、近代学校教育が始まり、宗教教育と同時に数学、天文学などの教育が同時行われるようになった[阿不都拉・塔里甫 1986]。

ウイグル族がイスラーム教を信仰したことで、イスラーム文化がウイグル族の間で広がり、言語、文字にまで影響して現代ウイグル文化の核となっている。日常生活の各面でも、目で見える、肌で感じることができるイスラーム教の教義がウイグル族の間で拡大して、一部のイスラームの教義は、ウイグル族の生活習慣となっている。しかし、新疆ウイグル自治区における「双語教育」が、次第に強化されたことで、漢語を話す、漢語を使用するウイグル族の人々も増え、ウイグル文化の核となるウイグル語を使用する者が減少してしまっている。ウイグル族の学校教育は宗教教育から始まり、後に、宗教教育と近代学校教育が融合していくことになるが、現在は中国政府が宗教教育の実施を規制したことで、宗教教育が教育の現場から次第に姿を消すことになった。したがって言語文化と同様にウイグル文化の核となる宗教文化の継承と維持の在り方は重要な課題になるだろう。これについて、次の第6章において考察していく。

[106] 4世紀頃に成立したとみられる大乗仏教の経典である。ウイグル語では、『Altun Yaruq』と称される。

第6章　新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の宗教文化の継承と維持

第5章では、ウイグル族におけるイスラーム教の受容について考察を行った。新疆ウイグル自治区におけるウイグル族は 10 世紀からイスラームを信仰し始めた。長い年月が経つ間にイスラーム教はウイグル族に伝統文化に深く影響し、一部のイスラーム教の教義が日常生活の各部分に深くかかわるようになり、イスラーム教の教義そのものがウイグル族の生活習慣として定着してきたことがわかる。そこで、ウイグル族の民族伝統文化を考えるときにイスラーム教についての考察を行うことが必要となる。すなわち、日常生活の中でイスラーム教をどのように信仰し、自らの民族文化としてイスラーム教の教義をどのように伝達しているのかという考察が必要となる。

中華人民共和国が建国されてから、新疆ウイグル自治区のウイグル族の人びとは、中国における 1 つの少数民族として歩むようになった。中国政府が宗教と教育を完全に分離させたことで、宗教教育ができなくなった。以前はモスクなどに設立された宗教学校のマドレス[107]Medris)がなくなり、新式学校[108]において宗教教育が行われなくなった。このような状況のもとで、宗教教育を通してイスラーム教を中心とする民族伝統文化を次世代に伝えることが困難になったウイグル族は、宗教文化の継承と維持のためにどのような方法を選択しているのか、特に学校教育における宗教教育がなくなり、漢語教育が徐々に強化されたことで、ウイグル族のイスラーム教への信仰はどのように変わろうとしているのか、かつてイスラーム教の影響を受けてきたウイグル文化がいま漢文化の影響を受けることになって、宗教文化の継承と維持の在り方はどのように変容しているのかという点が、これからのウイグル族の民族文化と民族アイデンティティの在り方について検討を行う際に考えるべき重要な課題であると考えられる。

第1節　ウイグル族におけるイスラーム教の伝達

1. 文化大革命以前

[107]現代ウイグル語では、「宗教学校」という意味をもち、当時は中学校レベルの宗教学校であった。
[108] 数学、化学などの科目が設置されている学校のことを指す。

新疆ウイグル自治では、19 世紀末までにウイグル地域における旧式小学校は、コーラン学校(マクタブ・Mektep[109])である宗教学校であった。マクタブのコーラン学校は、町や村落に開設されてアホン(Ahun[110]) 」やハリパト(helpet[111])と称するその地域のモスクのイマーム[112]或いは同レベルの宗教知識人が教師となり、モスクの空部屋や、アホンの自宅がコーラン学校の場所となった。生徒たちは年齢を問わず入学することができ、イスラーム教の知識のレベルによってクラス分けが行われた。学校ではコーランの暗唱やアラビア語の授業を受け、コーランの内容を理解するのではなく、コーランを読み取れる程度のレベルで勉強が行われた。旧式の中学校はマドレスと言い、アラビア語の文法、算数、哲学、コーランの解釈などが教えられる学校であった。

19 世紀の末期から、20 世紀の初期までにウイグル族の中の一部の人々は、当時塔塔爾(タタール)族が集中して暮らしている旧ソヴィエトのカザン市へ貿易に出かけ、タタール族と交流しながら彼らの工業、教育事業がトルコ系民族の中で進歩している事実を知っていた。中でも当時のウイグル人商人ウセイン・ムサバイーフとバウドン・ムサバイーフ兄弟は、近代学校教育[113]をウイグル族の間に持ち込んだ人々であった。彼らは 1870 年阿図什(アトュシュ)のイケサク村に、ウイグル族初の近代学校を創り、カザン市に人を派遣してタタール族の学校経営の方法を学び、タタール人の教師を招いて学校を運営させた。これがウイグル族の近代民族教育の始まりである[馬力克・恰尼西 2005:62]。それからしばらくは、旧式コーラン学校と新式学校が併存しており、新式学校でもコーランの授業が行われていた。そして、1913 年トルファンで新式学校が設立され、40 名のウイグル族の生徒たちにウイグル文学、算数、社会、地理、宗教などの科目が教えられた[馬力克・恰尼西夫 2005:63]。1910 年、伊寧(グルジャ)のタタール族は啓蒙運動を起こし、女子教育の重要性を改めて認識した上で、当時は女子が男子学生と同じ学校に通うことができなかったため、グルジャで女子学校が開設された。この学校は女子教育に賛成する知識人たちの支えと寄付によって、1914 年「光明学校」として正式に運営を始めた。この学校にはタタール族の生徒たちのほかウイグル族の生徒たちも入学し、小学校クラスでは、算数、作文、宗教、音楽、体育、刺繍、裁縫などの授業が行

[109] 現代ウイグル語では、学校という意味をもつ。
[110] 宗教知識人という意味をもつ。
[111] 宗教学校の先生という意味をもつ。
[112] イスラーム教のモスクの管理人。
[113] コーランだけではなく、数学や科学などの科目が設けられた学校のことであり、新式学校と称する。

われた。中学校クラスでは、文学、数学、社会、理科、アラビア語、宗教知識などの科目が開設されるようになった[馬力克・恰尼西 2005:38]。これらの新式学校では 1949 年の中華人民共和国の成立まで、学校教育において宗教教育も行われてきたが、中国共産党政府が学校教育と宗教教育の分離を進めたことにより、宗教教育が学校教育の中から無くなることになった。

2. 文化大革命以降

1966 年から 1976 年までに中国全土において文化大革命運動が行われ、宗教教育、宗教活動は古い考え方の迷信であるとされたことで、新疆におけるウイグル族だけではなく、全中国国民の宗教信仰は、大きな打撃を受けることになった。新疆ウイグル自治区では宗教に関する書籍などは旧思想の迷信と決めつけられ、イスラーム教の経典であるコーランを含む宗教に関連する書籍、雑誌などが燃やされた。新式学校で行われた宗教教育が完全に禁止され、隠れてコーランの勉強をすることも許されなかったという。ウルムチでは革命英雄専用のお墓があり、民族と信仰に関わらず一緒に埋葬されることもあったという人もいる。

1978 年以降改革開放政策が実施されることで、各国民の宗教信仰は自由であるという憲法の実施により、ウイグル族の宗教活動が再び活発になった。しかし、中国政府の教育と宗教を分離する政策が変わることなく実施されて、学校における宗教教育の復活はなかったが、モスクや、アホンの家に通うことでイスラーム教の教育を受けることができた。そのため小学校入学の1年くらい前から宗教教育を受けさせるために子供をアホンの家に行かせる親が多かった。子供が小学校に入学してからも休みの期間を利用して、週1回半日程度、イスラーム教の教義を勉強する生徒たちも多かった。改革開放以降宗教活動が活発になっていくことと同時に、学校における漢語教育の強化も徐々に実現していくことになり、漢語学習とイスラーム教の教義を同時に学ぶ生徒たちも現れた。この当時小学生時代を過ごしたある人は、「自分は6歳からアホンの家でイスラーム教について学んで来たが、小学校3年から漢語の授業があって、自分にとって漢語の勉強することが難しかったことを思い出す」という。

しかし、2001 年9月 11 日のアメリカ同時多発テロ以降、再び新疆におけるウイグル族の宗教活動が制限され、徐々に厳格に制限されるようになり、現在では宗教教育の全面的禁止が実行されている。したがって宗教教育は学校教育の中からだけではなく、モスクやアホンの家や各宗教儀式などの中からも消え去ることになった。これらのことについては「新疆の独立を希望するウイグル族の人々が宗教活動をとして過激なテロを起こす可能性があるので、中華人民共和国の統一を守るための行いである」と中国政府が説明する。ウイグル族の宗教

知識人たちには、宗教教育を行うと警察の取り調べを受けることになり、執行猶予なしの実刑判決を受けることは避けられないと語る人が多くいる。

第2節　事例報告

1. ウイグル族の一日の生活についてインタビュー調査

本章の第1節において、ウイグル族の宗教文化の伝達の歴史を簡単に述べたことで、現在ウイグル族の人々はイスラーム教について学ぶことができなくなっていることがわかる。そうだとすれば、彼らは日常生活の中で、イスラーム教徒としてどのように生きているのかということを把握するために、本論の調査地であるコルラ市の近くにある農村と町のウイグル族家庭の例を挙げながら彼らの一日の生活を詳細にみていく。

事例 1）農村の一家

コルラ市の近くにのある村で生活しているHさんは今年 63 歳になり、58 歳の奥さんと一緒に農業を営んでいる。3人の子供がおり、現在3人とも結婚して別に暮らしている。夫婦2人は熱心なイスラーム教徒であり、結婚してからずっとイスラーム教の行事をきちんと行っている。現在、夫婦2人は村で行われる宗教活動に積極的に参加しており、結婚式や葬式といった通過儀礼を行う際、村の人々の中では欠かせない存在となっている。奥さんは村で葬式が行われるときに、イスラーム教の教えによる遺体を洗う儀式、イスラーム教徒に着せる白い服を縫い上げて着せることを行う役割を担っている。彼女は次のように話してくれた。「私たちが住んでいる村では女性2人、男性2人の、亡くなった人の最後の告別儀礼を行う人がいる。我々を農村政府が選んでからこれらのことができるようになった。ここだけではなくほかの農村でも同じような人々がいて、彼らも村政府の推薦によって同じような職に就いている。本来できる人であればだれでも行ってよかったが、今は農村が推薦しなければ、遺体を最後に見送るための宗教的儀礼を実行することができない。1日2人もしくは3人が無くなった場合人手が足りなくて大変だけど、それでも別の人を手伝わせることができない。この村では自宅で礼拝している人が多くいるが、公共の場で宗教活動を行う人が少なくなっている。若い人の中では、特に葬儀の儀式ができる人があまりいないので、若い人を育てることが大事であると思っている。私たち夫婦は葬儀の場を借りて、若い人たちに教えることにしている」。

①Hさん夫婦の普通の1日の生活

朝4時に起床。起きてすぐに体を洗って[114]から礼拝をする。それから家や庭の掃除、羊や牛などの家畜に餌を与える。

8時半に朝食。基本的にお茶とナンとを食べる。飼っている牛が子供を産んだ時に牛乳を飲むこともある。

昼の 12 時に昼食。週に4回は手作りの麺におかずを乗せた料理ラグ麺を食べる。昼食後から夕食にかけて3回の礼拝をする。礼拝の合間には農作業をしたり、家事をしたりする。

夕方の6時から7時までに夕飯。基本的にお茶とナンと昼食の残りを食べる。夕食後は5回目の礼拝をする。毎回の食事の時にイスラーム教の教えを守り、ドゥアを忘れることがない。

② Hさん夫婦の特別な日の生活

朝4時に起床。起きて体を洗ってから朝の礼拝をする。この日は、知り合いの結婚式があるので、ご主人が結婚式の儀式であるニカフを主催するので、礼拝が終わってすぐに朝食を取り、7時前に家から出かける。ニカフ儀式を 9 時までに終えて、一度家に戻る。奥さんは家事をこなして、午後からの葬儀に出席しなければならないので、ご主人が帰ってきてから一緒に10時前後に出掛ける。先に結婚式に客として出席して、11時半に葬式を行う家に着く。奥さんは12時までに遺体を洗って埋葬服を着せて、午後1時から遺体をモスクに移動させ、礼拝をしてから遺体を墓に送る。それらのことを終えて家に帰る時間は午後4時過ぎになる。家に帰ってからも午後の礼拝を行って、午後7時ころがやっと夕食の時間になる。

H さん夫婦は熱心なイスラーム教徒であり、普通の日も特別な日でもイスラーム教の儀式をきちんと行っている。このように彼らの宗教活動が活発であることから、イスラーム教の聖職者であり、本来ならばウイグル族にとって宗教教育者でもあると考えられる。彼らは宗教知識人であるが、以前のように自分の家で宗教教育を行うことができず、政府の推薦によって自らの村の宗教活動に参加することができるため、イスラーム教の教えを婚姻や葬儀という通過儀礼の場所を利用して、自らの実践を通してイスラーム教の教義を次世代に伝えることができたと言えよう。政府の許可を得てからはじめて宗教教義を伝えることができるということから、民族文化の伝達の役割を果たしている儀礼に対しても中国政府が取締りを強化していることがわかる。

事例2）都市の一家

[114] イスラーム教では、礼拝前に体をきれいにしなければならないという規定があり、洗い方や各部分の順番が定められている。

Ｉさん夫婦は2人とも 40 代後半で1人息子と一緒にコルラ市で生活している。夫婦2人とも働いており、息子は 2016 年9月に大学4年生になったばかりである。以下、彼らの普通の日と特別の日の生活を述べていく。

① Ｉさん一家の普通の日

朝6時に起床。起きてすぐに朝食の準備をして、6時半に牛乳入りの紅茶とナンを食べて、午前7時半に仕事に出かける。バター入りの紅茶とジャムや蜂蜜でナンを食べる日もある。

1時前後に昼食の時間である。お昼はＩさんと息子が帰って来ない日が多く、奥さんが1人で家に帰って、麺やご飯に野菜炒めをのせた簡単な昼食をとる。

夕方6時以降帰宅して、3人そろって夕食を食べる。夕食はご飯に2種類のおかずをつくることが多い。 夜 10 時に就寝する。

② Ｉさん夫婦の特別な日

土、日曜日は仕事が休みであるので、起床が8時過ぎになることが多い。朝食は普通の日と同じ牛乳入りの紅茶とナンである。週末は結婚式や割礼式、葬儀などの行事が多く、1日に2か所に行かなければならない日が多い。午前 11 時に結婚式に出かける。昼食は家で食べることが少なく、各式場で食べて家に戻るのは午後4時過ぎになる。休みの日は、親戚や友達と集まることも多く、夕飯も出先で食べることがほとんどである。夫婦2人ともイスラーム教の礼拝をすることがあまりない。2人は「結婚式のすべての宗教的行事に自分で参加したことがあるので儀式を理解できるが宗教聖職者が行う儀式を実行することはできない。葬儀の場合遺体の最後の儀式についてほとんどわからない。私たちと同じ年の人々の中でもわからない人が多い。現在政府がイスラーム教の祭りの時に公共場で礼拝をすることを制限しているので、特に政府機関に勤めている人々の中では、礼拝に行く人が少なくなっている。仕事の忙しさを口実に自宅でも礼拝をしない人が多い。私たちは小学校入学前にイスラーム教の教義を学んだことがあるので、礼拝の仕方は大体わかるが、実際には自宅できちんと行っておらず、子供にも教えることがない。将来定年退職後にきちん実行できればと思っている。私たちと同じ年の人々の間では、礼拝していることを周りに話さずに、自宅で行っている人もいる」という。

Ｉさん一家の行動からは、次のようなことがわかる。彼はイスラーム教の教義を少し理解しているが、宗教儀式[115]を普通の日も特別の日も行っていない。自分たちはイスラーム教の義式

[115] イスラーム教徒が行うべき１日の５回礼拝することを指す。

を行う意欲はあり、彼らにとって結婚式や葬儀などに参加することは宗教文化について学ぶ場所であると言える。以上の2つ家庭の生活からは、ウイグル族にとって宗教教育を行う場所は家庭であり、各通過儀礼の場所であり、彼らはそれらの場所を借りて、自らの行いを通してイスラーム教の教義を教えたり、教えられたりしているということが考えられる。

2. 宗教文化(イスラーム文化)の継承と維持に関する事例報告

ここでは、現在ウイグル族の人びとは自らの民族伝統文化継承と維持やイスラーム教と伝統文化の関連性に対してどのように考えているのか、イスラーム教を中心とする宗教文化維持するためどのようにしているのかということを把握するために行ったアンケート調査とインタビュー調査結果を報告していく。

アンケート調査

2015 年8月に、コルラ市の 40 代前後(38 歳～45 歳)の 63 人と 10 代前後(9歳～18 歳)の 49 人を調査対象として民族文化の継承と維持についてアンケート調査とインタビュー調査行った。これらの人々調査対象にした理由は、10 代前後の子供たちがこれからウイグル文化を維持していく上で、40 代後半の人々は次世代に継承させていく大きな役割を果たす世代であることに注目したのである。彼らは民族文化の保持に対して関心があるのか、イスラーム教の教義を理解しているのかということを把握するために行った調査結果を以下の表において報告する。

(表 10) 宗教と民族文化の関連性について

	40 代前後 63 人		10 代前後 49 人	
回答(人)	はい	いいえ	はい	いいえ
ウイグル文化の継承と維持に関心を持っている	63	0		
民族文化の維持に関して宗教信仰は不可欠である	63	0		
生活様式の多様化は宗教信仰に影響与えている	46	17		
イスラーム教について教育受けたことがある	18	45	4	45
私はイスラーム教の教義をわかっている	48	15	2	47

以上の表から見ると、40 代前後の人々がウイグル文化の継承と維持に対して関心を持っていることや、伝統文化の維持において宗教信仰の影響が極めて重要だと考えていることが分かる。それに対して、10 代前後の世代の答えは大きく異なっており、一部の質問の答えが

得られなかったことから、質問を理解していないか、または文化の継承と維持に対して関心がないとも考えられる。

2009 年7月5日、新疆ウイグル自治区の首府であるウルムチで、ウイグル族と漢族の間で衝突が起こり、各メディアでは、ウイグル族による暴動で 98 名の漢民族犠牲者が出たことを報道した。それからはウイグル自治区の各地域では、政府がテロ対策に乗り出して、厳戒態勢が続いた。ウイグル族と漢族の間で以前から個人的に親密な関係を持っていた人たちもお互いに距離をおくようになり、両民族の関係が微妙になってきたという声が上がっている。同時に政府が厳戒態勢をとったにも関わらず、各地域で漢民族の政府官僚や警官を狙うテ活動がたびたび行われ、治安が悪化して一部の漢民族が漢民族地域へ去っていくことになり、商売や経済の減速にもつながったと言われた。一方でウイグル族の人々が宗教活動に熱心になり、例えばラマダンの時期に断食をする人が増え、女性の中ではヒジャプをする者が目立つようになった。男性の中では以前モスクの礼拝に行かなかった者が礼拝に行くようになり、人々の宗教信仰が強くなったことが目に見える形で現れたという人が多くいた。ウイグル族の宗教活動が活発になったとすれば、どのように活発になったのか、信仰の度合いがどのように強化したのかを把握するために、コルラ市における調査対象者に対して調査を行った。以下は調査結果である。

（表 11） 宗教信仰の度合いについて

	40 代前後 63 人		10 代前後 49 人	
回答（人）	はい	いいえ	はい	いいえ
自分は以前から宗教活動に対して積極的だった	51	12	2	47
自分は以前より積極的になった	63	0	34	15
自分が礼拝する頻度が増えた	48	15	10	39
周辺にはラマダンに断食する人が増えた	52	11	42	7
周辺で行われる各儀式に必ず参加する	63	0	22	27
周辺で行われる各儀式に全く参加しない	0	63	7	42
宗教活動は以前より活発化していると思う	63	0	49	0

これらの回答からは、40 代前後の世代は、宗教活動に対して積極的になり、礼拝する、断食する頻度が、または各儀式に参加する頻度が以前より増えたことが分かる。このことから筆者は、10 代前後の世代が最後の質問に対して皆宗教活動が活発化していると答えたのは、

決して自らが各宗教活動に積極的に参加しているということではなく、親の行動を見て感じたものであると考えている。ウイグル族の人々の間で、イスラーム教の雰囲気が強まり、宗教活動が活発になったことは、漢民族との関係が微妙になることで、自らのアイデンティティを改めて感じて自分が漢民族と違う民族であるという意識が強まったということである。自分が漢民族とは異なるウイグル族であり、イスラーム教徒であること意識をするようになったことで、ウイグル族の民族伝統文化を維持していくためにイスラームの教義を深く理解して自らの行動で実行させたのであると考えられないだろうか。

（表 12） 今後の宗教活動の在り方について

	40 代前後 63 人		10 代前後 49 人	
回答（人）	はい	いいえ	はい	いいえ
今後は各宗教活動に積極的に参加したい	59	4	37	12
イスラーム教について子供に教えたい	63	0		
イスラーム教についてもっと教えてもらいたい	63	0	32	17
民族文化を保護してほしい	56	7		

以上からは、やはり 40 代前後の世代は今後も宗教活動に積極的に参加し、イスラーム教の各教えをもっと理解すると同時に、子供にも教えてあげたいと思っていることが分かる。それに対して、子供たちはそこまで積極的ではなく、民族文化の維持や保護に対して、質問の意味が理解できてない、または関心がないと考えている。

インタビュー調査

40 代前後の3人に対して、宗教活動の現状についてインタビューした結果は次の通りである。

事例1)「ここ2、3年来、モスクに礼拝に行く人の数が増加している。職場や近所ではラマダンの時期に断食する人も増えており、ラマダンの時期の各儀式もよく行われるようになった。そしてテレビやインターネットを通じて、トルコなどのイスラーム国家のテレビドラマを見ることが流行っている。それの影響もあって、人々はイスラーム式に装うことを好むようになった。町ではイスラーム式の服装を売る店が増え、街中でもそのように着こなしている人を良く見かけるようになった」。

事例2)「私は、子供の頃イスラーム教について学んだことがなかったので、礼拝のやり方や日常生活の中でどのような教えがあるのかわからなかった。最近同じ職場の同僚の中で金曜日にモスクに礼拝に行く人が増えてきた。自分も同僚たちと一緒に行こうと思ったが、やり

方がわからないので行く勇気がなかった。こうなると自分の子供たちも私と同じようになってしまうので、先に自分からイスラーム教について学ぶことに決めた。今は少しできるようになったが、アラビア語がわからないので、覚えることに時間が掛かっている。それでも続けて学んでいけば、いつかはできるようになるし、子供も私の姿を見てイスラーム教について学びたいと思えるようになることを期待している。」

事例3)そして、宗教活動が活発化している理由について聞いたところこのような回答があった。第1に「学校進学、就職、仕事を続けていく中で漢語習得は必要である。我々も漢語学習は今後不可欠であると思っている。したがって、学校教育の中では漢語教育が強化され、子供たちの漢語能力が高まり、漢語を使用する状況が広がるにつれ、ウイグル語を使用する機会が減ってきている。第2に、ウイグル族の漢語習得に伴い、漢民族との交流が広がっている。マスメディアや文化交流を通して、漢文化はウイグル族の食文化、生活習慣、価値観、または考え方などに大きく影響を及ぼしている。民族文化の中で最も重要なのは民族言語と宗教であり、つまりウイグル語を使用してイスラーム教を信仰しているからこそ、ウイグル族が漢民族と異なっていると思っている。子供たちが民族言語で話せない者が徐々に増えてきている。だからこそ宗教信仰を強くする必要がある。つまり、今民族文化を維持するために宗教に頼ることが大事だと思っている」。

まとめ

中国全土において漢語教育が強化される中、各少数民族地域でも漢語学習が活発化し、新疆ウイグル自治区のウイグル族も、積極的に漢語を学んで習得している。その理由として考えられるのは、経済的豊かさを追求するためや、大学への進学、就職と職場における漢語の必要性が高まったことである。ウイグル族の漢語学習によって、日常生活の中で、ウイグル語と漢語との混用、もしくは若者の間での漢語使用が目立つようになっている。民族文化の継承と維持において、もっとも重要な役割を果たすべきウイグル語が危機に瀕し、またウイグル族の伝統が次第に失われつつあるようだと感じた人々は宗教活動を更に活発化して、民族アイデンティティを保護して民族文化を維持していくように努力している。そしてイスラーム教を中心とする宗教文化を次世代に継承させていくことが大事だとあらためて意識したと考えられる。これらの調査結果は、2015 年までに行った調査に基づいたものであり、その後中国政府が宗教活動への取り締まりを強化し、宗教信仰に対する規制などを実行したとすれば、宗教活動の在り方も異なる方向に向かうだろう。したがって筆者は、学校教育や社会生

活の中で宗教教育が制限されると、家庭教育を利用して特に親から子への宗教教育が必要になり、自らの民族アイデンティティの確立のために家庭の中で親が重い責任を背負うべきであると考える。もちろん、この状況は新疆全地域において、特に都市部と農村部の状況は異なっているだろう。それは今後の課題として考察していきたいと考えている。

終章　まとめと今後の展望

本章では、本論文の研究内容を各章ごとに整理して、その研究結果を踏まえて今後の課題と展望を述べる。

第1節　論文のまとめ

本論文の構成を概観すると、本論は、序章と終章を除いて、6章から構成されている。第1章では新疆ウイグル自治区と調査地の概要を、第2章では中国の少数民族政策を述べた。第3章で新疆ウイグル自治区の「双語教育」ついて検討し、第4章では新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語文化の継承と維持について考察を行った。その結果ウイグル族に対して「双語教育」を行うことで、言語文化がどのように変化しているのかということを明らかにした。第5章ではウイグル族における宗教文化の受容、第6章ではウイグル族の宗教文化の継承と維持について考察を行った。

ウイグル族は現代教育体制のもとで「双語教育」を受け、言語を通して異文化接触と異文化の影響を受けることで、イスラーム教を中心とする宗教文化がどのように変容しているのかということを明らかにした。以下各章ごとに内容を整理する。

序章

本論文の研究目的と方法、先行研究、論文の構成と本論の表記法などについて明確に説明した。

第1章　新疆ウイグル自治区と調査地の概要

まず、中国の新疆ウイグル自治区の概況、特に中国国内におけるイスラーム教を信仰する10 の少数民族のうち、9つ民族が居住する新疆ウイグル自治区の地理的特徴、民族の分布と主な民族の多彩な生活の様子や習慣について述べた。

次には、本論文の調査地であるコルラ市の概要、特にバインゴリンモンゴル自治州の首府であること、ウイグル族と漢民族の他にモンゴル族や回族が多く生活している地域であることで、新疆の中でも民族状況が政治的、文化的に極めて複雑であることを述べた。そして本論の調査対象であるウイグル族の歴史的沿革とウイグル語やウイグル文字について説明していくと同時に生活方式、住宅、服装と飲食、また倫理道徳について陳述した。

第2章　中国の少数民族政策

まず中華人民共和国の民族区域自治法と少数民族教育政策について述べることで、中国政府が各民族のなかで、以前は階級問題や民族問題が存在したために、民族平等の実

現ができなかったこと、そしてこの状況を変えるために、1952 年各少数民族地域において、「中華人民共和国の民族区域自治法」を実行することが定められたこと、また各少数民族の人材育成を目指して、「少数民族教育政策」を実施し、その特徴としてあげられる「双語教育」政策である漢語教育政策が中国全土の少数民族地域で実行されたことを明らかにした。

第3章新疆ウイグル自治区の「双語教育」状況

本論文の調査地であるコルラ市の主な教育状況、特に「双語教育」が実施された後、各学校の教育状況がどのように変化したかのかということについて述べた。同時に「双語教育」状況について、実例を挙げながら幼稚園から大学までの学校における「双語教育」状況と家庭における状況について考察を行った。①幼稚園における「双語教育」状況についてインタビュー調査を行った結果、コルラ市の少数民族の幼稚園は、少数民族が多く住んでいる地域に作られ、多くの親は、現在は小学校から漢語教育が行われているので、入学後に漢語の勉強をすればよい、小さい時は母語を学ばせたいという意欲があることがわかった。②小学校の「双語教育」状況について考察を行うことで、漢語を 1 つの科目として学んでいたのが、自らの母語を 1 つの科目として学ぶという状況に変わっており、ウイグル族の生徒たちにとって、母語を学ぶ場所が狭くなっていることが明らかになった。③中学校の「双語教育」についての調査結果をまとめると、子供の中学校進学は親の考えに基づくことが多いこと、親が自分の生活体験にもとに、子供の学校教育を決める傾向があることがわかった。④高等学校の「双語教育」状況を考えたときに、中国で注目され、推進されている「漢民族地域における新疆高校クラス」の状況について考察を行った。本部分では中国の広東省における深圳市松崗「中学」に通っていた「新疆高校クラス」の生徒たち調査対象として、アンケート調査とインタビュー調査を行った。学校における言語使用状況、学校生活に関する調査と民族アイデンティティの維持などの内容で調査を行い、彼らは自分が「新疆高校クラス」に合格できたことを誇りに思っており、漢語を習得できたことは自分にとってプラスであり、これを武器に勉強や仕事の面において十分に活用できると考えていることがわかった。彼らが漢民族地域で漢文化の影響を大いに受けることで、民族アイデンティティの維持には不利な要因となることが明らかになる。その反面、エスニックマイノリティとしての立場に立つことで、自分が漢民族と異なる文化、異なる言語をもっているウイグル族であることにあらためて気づいていることも明確になった。したがって、異文化の中から自らの民族文化を振り返ることができ、民族アイデンティティに対する意識が高まったとも考えられる。⑤新疆における大学の「双語教育」について考えたところ、大学は「双語教育」モデルを転換して、学生に対する漢語教育の要求を

さらに高めたことや大学の教職員たちにも漢語で教育することが義務付けられたことで、長年自らの母語で授業を行ってきた教師たちも、新たな状況に直面したことがわかった。

そして、家庭における「双語教育」の状況を明らかにするためには、漢語ができない親の家庭、漢語がよくできる漢民族の学校を卒業した親の家庭、ウイグル族の学校を卒業して漢語の学習したウイグル語と漢語ができる親の家庭の状況を取り上げた。この親たちは漢語を学ぶことに対して反対しないが、自分で見てきた周囲のことや自分が体験したことの違いによって、漢語学習に対する意識のが異なっており、子供に対する漢語教育の選択も異なっている。すなわち,ウイグル社会における漢語の必要性を感じており、子供の進学や就職のために必ず漢語を学ばせなければない、新しい科学技術や様々な知識を覚えるために、漢語を学習する必要があるという考えを持っている。また各家庭には母語の大切さや、ウイグル族のアイデンティティをずっと守っていく事を重視しているという共通点もあり、それぞれの家庭の親たちは、自分独自の考え方によって、それぞれの方法を用いて、家庭の中の母語教育につめていることが明らかになった。

第4章　新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語文化の継承と維持

新疆ウイグル自治区において、積極的に漢語を学び漢語を習得したウイグル族が続々と出現したことで、ウイグル族の言語使用状況は漢語を主とするように変化している。本章ではウイグル族が漢語学習をする中で、母語のウイグル語に対してどのような意識を持っているのか、その言語意識と実際の言語使用状況はどのような関連があるのかを明らかにし、多民族国家の少数民族地域における少数派の言語意識と言語使用状況について考察を行った。筆者は 2007 年から 2015 年までに本論のフィールド地である新疆ウイグル自治区のコルラ市で行ったアンケート調査とインタビュー調査を検討して、現地で生活しているウイグル人の言語使用意識に関連するいくつかの問題に対する回答と実際の言語使用状況について分析を行った。少数派が自らの言語と多数派の言語を同時に学ぶことで、母語に対する意識はどうなるのか、言語意識と実際の言語使用状況がどうなのかについて検討した。

まず、ウイグル族の言語使用意識を把握するために、大人と子供それぞれの言語意識について調査を行った。

調査結果から多くの親たちのウイグル語の使用に対する意識は高く、ウイグル語ができないと不便である、母語が民族文化と自らの将来のためになると考えていることがわかった。そして自分の子供にウイグル語を教えたいが、漢語も教えたいという親が圧倒的に多く、自らの母語を維持する意識が高い一方、子供の将来のために、漢語を学ぶ必要性が高いというこ

とも意識しており、ウイグル語と漢語の両方ができることが望ましいと考えていることが明らかになった。

それに対して、子供たちの間では漢語の必要性に対する意識が比較的高く、年齢が高くなればなるほど漢語の必要性が高いと思っている。それは彼らの日常生活や学校生活の中で感じたことによって左右されていると考えられる。そして、母語であるウイグル語を使用する意識は、大人たちより低いとはいえ、民族文化や民族アイデンティティのためには、母語の使用が大事であると認識しているとも読みとることができた。生徒たちがウイグル語と漢語の2つの言語を習得する必要があると思っていることから、彼らは、同レベルの2言語習得の必要があると考えているのではないかと考えている。

大人の間では、ウイグル語の学習を積極的に行うべきであり、子供たちに対しても母語の大切さを教えるべきであるという考え方がある一方、子供たちの間では、現在社会ではウイグル語を使う機会が多くない、漢語ができないと日常生活に不便という考えも存在していることが明らかになった。この問題については、艾力の『多元文化整合教育視野中的維漢双語教育研究』を参考にした。筆者と艾力のでは、調査を行った地域が異なっているが、それぞれの調査結果によって、現在ウイグル族の全地域では漢語教育の民族伝統文化の継承と維持に逆の影響を与えることを知りながらも、漢語教育を全面的排除するのではなく、母語と漢語を同時に習得する必要があるという考え方が主であるのではないかと考えている。

次に、家庭や学校、または社会での言語使用状況について調査を行った。調査からは家庭の中では主にウイグル語を使用しているが、漢語を使用することもある。具体的には、家庭の中で大人同士はウイグル語を使用し、子供同士はウイグル語と漢語を混用することがあり、大人と子供は主にウイグル語を使用していることが明らかになった。

学校では主に漢語を使用し、一部の学校ではウイグルと漢語を同時に使用している。具体的には、民族学校ではウイグル語を使用し、漢族学校では漢語を使用している。そして「民漢合校」で使う言語は主に漢語であり、ウイグル語を使用する場合もある。ゆえに、漢民族地域における学校か、それとも少数民族地域における漢民族の学校か、いずれにせよ2言語ができる生徒たちが漢語を使用することに変わりはないということが読みとれた。

社会生活においては、年配の人々の間ではウイグル語を使用し、若い世代の間ではウイグル語と漢語を混用する状況が存在する。具体的には、ウイグル族の年配世代は、同世代同士でも若い世代と会話する時もウイグル語を使用している。ウイグル族の若い世代同士は

ウイグル語を中心的に使用しているが、漢語を使う場合もある。漢民族とウイグル族の間では、年齢層に関係なく漢語を使用する状況が存在していることが明確になった。

漢語学習の進行により、ウイグル族、特に大人たちの間で、母語を大切にして母語を使用し続けて行こうといった言語意識が比較的高く、それに対して子供たちの母語を使用する意識は低いものであると言える。そして母語を使用する意識が高いということにも関わらず、世代が若くなればなるほど、漢語の使用が目立ってきている。同時に、母語の大切さを意識している大人の間でも、状況によっては漢語を使う状況が存在しており、特に漢民族と話す際言語使用状況は漢語が中心となっていることがわかる。したがって、彼らのウイグル語を大切にするという言語意識と、ウイグル語の実際の使用状況との間にずれが存在していることが明らかになった。

第5章　ウイグル族における宗教文化の受容

本章では大部分のウイグル族が信仰しているイスラーム教の受容について述べた。中央アジアにおける中国の新疆ウイグル自治区には、イスラーム教地域になる前に土着信仰のシャーマニズムの信仰が存在しており、また外来宗教のマニ教、ゾロアスター教、景教、仏教などが存在した。そして古代シルクロードの主要ルートであったことで、西と東の商業の道だけではなく、西と東の宗教の伝播においても要間であり、文化交流、文化伝播の道でもある多宗教多文化地域であったことを述べた。

まず、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族が、10 世紀からイスラーム教を信仰し始め、カラハン王朝時代、東チャガタイ王国時代、ヤルカンド・ハン国時代と清朝後期において、イスラーム教がウイグル族の間で定着していったことを述べた。10 世紀から16 世紀前半まで続いたイスラーム教の新疆への伝播過程の中では、支配者が積極的にイスラーム教を受容し、被支配者を強制的に改宗させたことがわかった。例えば、カラハン王朝のサトュク・ブグラ・ハンの息子ムサ・アルスラン・ハンは在位中にイスラーム教を国教として強制的改宗を実施し、960 年に 20 万帳のチュルク人がイスラーム教へ改宗した。チャガタイ・ハン国時代でも同じように旧来の宗教信仰を捨てて、イスラームへ改宗させるために強制的な措置を実施し、16 万人のモンゴル人がイスラーム教へ改宗した。東チャガタイ・ハン国時代にウイグル文字の統一が図られ、支配者がイスラーム教を押し広めると同時に文字改革を行い、アラビア文字を普及させ、そのアラビア文字は、現代ウイグル族の言語文化の柱となっている。

ヤルカンド・ハン国時代、またカシュガルのホージャ家族の統治時代には、イスラーム神秘主義のスーフィズムが、ウイグル族のイスラームへの改宗に大きな役割を果

たしたこと述べた。この時代には支配者がスーフィズムの考えを持つイスラーム教の聖職者を王宮に招き入れ、彼らの考えを参考にして一般市民に推し進めたことで、イスラーム教の神秘主義がウイグル族の間で深く広がることになったことを述べた。筆者は当時ではウイグル族が生活している広い地域でシャーマニズムの信仰が存在しており、スーフィズムは遊牧民のシャーマニズムと類似していると認識されて、ウイグル族にとって受け入れやすかったのではないかと考え、今でもイスラーム教徒でありながらシャーマンであるバフシやペレホンが存在していることを取り上げつつ、シャーマニズムとスーフィズムの定義やそれぞれの行いについて考察した。そしてシャーマニズムは、万物は霊魂があり、霊魂を「善霊」と「悪霊」に分ける。人々は、人に悪霊がのり移ったら病気になり、シャーマンは善霊を保護し、悪霊を追い出すことで病気を治すことができる奇妙な能力を持つと信じる。一方スーフィズムは、現在知られている最古の定義では「神的実在の把握」であるが、イスラームの神秘家たちは、自ら好んで「実在に従う者」と呼ぶ。人々は、スーフィーたちの６つの階梯を昇っていくことで、ジクル段階に入って、神と合一になることを繰り返す中で助言し、悩みがある人を助けることができる奇跡的能力を持つ神の友であると信じられていることから共通性があると読みとれる。当時のウイグル族は、シャーマンとスーフィーは、いずれも普通の人々と違って、人間の力を越えた奇跡的能力があるとされ、難病を治すことや、悩む人を救うことができると考えていたので、類似しているものであると考えたかもしれない。シャーマンのバフシが治療するときに暗唱する呪術語とスーフィーの「神は偉大なり」「神に栄光あれ！」のような一定の言葉を繰り返しながら口にしてトランス状態になって神と合一になることを、ウイグル族は行為の面では類似していたものと考えた可能性があるということを指摘した。そして、ウイグル族の教育は宗教教育から始まっており、シャーマニズム信仰のバフシやペレホンが教師としての役割を担うことからウイグル族古代教育始まったと考えられ、歴史的に宗教と教育の関係が密接あったこと、特にイスラーム教を信仰してから、学校教育の始まりが宗教教育であったことを述べた。

第6章　新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の宗教文化の継承と維持

　長い年月が経つ間にイスラーム教はウイグル族の伝統文化に深く影響し、一部のイスラーム教の教義が日常生活の各部分に深くかかわるようになり、イスラーム教の教義そのものがウイグル族の生活習慣として定着した。そこで、ウイグル族は日常生活の中でイスラーム教をど

のように信仰し、自らの民族文化としてイスラーム教の教義をどのように伝達しているのかという考察を行った。

まず、中華人民共和国の建国までにウイグル族は家庭の中やモスクなどで設置されたコーラン学校を利用して宗教教育を行ってきた。後に、新式学校教育が始まるが宗教教育は学校教育の中でもが行われてイスラーム教の教義が次世代に伝えられてきた。中華人民共和国建国後、学校教育と宗教教育が分離されたことで、モスクや宗教聖職者の家で設置されたコーラン学校利用して宗教教育が行われてきたが、それは 1960 年代の文化大革命や、2001 年のアメリカの同時多発テロ後には、すべての形の宗教教育が全面的に禁止され、目に見える形で宗教教育を行うことが不可能となったことを述べた。

次に、本論の調査地であるコルラ市の近くにある農村と町のウイグル族家庭の例を挙げながら彼らの一日の生活について考えた。教える側、または教えられる側としての行動から、以下のことが明らかになった。ウイグル族にとっての宗教教育者は、以前は自分の家、モスクや宗教聖職者の家であったが、こうした宗教教育を受けることができなくなった。教える側は、政府の推薦によって自らの村の宗教活動に参加し、婚姻や葬儀という通過儀礼の場所を利用して、自らの実践を通して、イスラーム教の教義を次世代に伝えている。そして教えられる状況から、イスラーム教の教義を子供の頃に親から教えられたことがあるが、現在は普通の日も特別の日も宗教的儀式に参加することが少ない。イスラーム教の儀式を行い、教義を身につける意欲はあるものの教育の場がなく、結婚式や葬儀などに参加することは彼らにとって唯一の宗教文化を学ぶ手段であると考えている。

そして、現在ウイグル族の人々は自らの民族伝統文化の継承と維持やイスラーム教と伝統文化の関連性に対してどのように考えているのか、イスラーム教を中心とする宗教文化維持をするために、どのようにしているのかということを把握する目的でアンケート調査とインタビュー調査を行った。調査結果から、大人たちはウイグル文化の継承と維持に対して関心を持っており、伝統文化の維持において宗教信仰の影響が極めて重要だと考えていることが判明した。宗教活動に対しても積極的であり、礼拝、断食、また各儀式に参加する頻度が前より増えたことが明らかになった[113]。

[113] これらの調査を行った 2007 年から 2013 年間には、宗教活動が活発化したことが、調査結果で明らかになった。しかし、2016 年から政府の宗教活動に対する取り締まりがより厳粛化し、服装や公の場で宗教活動を行うことが制限されていることも事実である。

新疆ウイグル自治区におけるウイグル族と言えば、ウイグル族自身もウイグル語を話し、イスラーム教を信仰する中国の西の方に生活している人々であると認識する人が多いだろう。ウイグル語とイスラーム教を取り上げることで、ウイグル族を中国の他の民族と区別し、自分が他の民族と異なるウイグル族であるという民族アイデンティティの確立を強調する。したがってウイグル文化という言葉が出たときには、独自の言語を持つイスラーム文化を有することを指し示すことになるだろう。ここで言うウイグル語とイスラーム教は、ウイグル文化の核心になり、ウイグル族における言語文化と宗教文化がほぼ現代ウイグル文化を指しているといっても過言ではない。

改革開放政策の実施に伴って、各少数民族地域において「双語教育」政策を実施したことで、少数民族の間で漢語が話せる人々が徐々に増えていった。新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の中にも漢語ができる者が増えるようになり、漢民族との交流が深まっている。漢語ができると将来的に有利であると考えることで漢語学習が広がり、母語が話せない、文字の読み書きができない若者が増えるようになっている。漢文化の影響は広がることになり、ウイグル族の食文化、服装などの生活習慣に影響を及ぼすことになっている。そこで母語を意識し、ウイグル語の使用を心がけるような行動も現れており、家庭の中で自らの母語を使う、夏休みや冬休みの期間を利用して漢語で教育を受けている子供たちにウイグル語を教えるという状況が現れている。しかし、母語を使用しようという言語意識が高いにも関わらず、学校や職場においては漢語を使用する状況も存在しており、意識と現実との間にずれがあることも事実である。そして漢語教育のさらなる強化の象徴とも言える漢民族地域における「新疆高校クラス」の事例から、以下のことが考えられる。高校の4年間授業料が無料になること、卒業したら名門大学に進学できること、大学卒業後も就職率が高くなることはウイグル族人々にとって魅力的であり、子供を「新疆高校クラス」に入学させたいと思う親が増えている。一方で、入学した生徒たちは学校生活の満足しており、自分が「新疆高校クラス」に入学できたこと誇りに思っている。他方、漢民族地域に移り住むことで、自分が漢民族と違うウイグル族であることにあらためて気づくことになり、ウイグル語で話したい、ウイグル族の学生と仲良くしたいという思いもある。しかし、それはあくまでもウイグル語を使用したいという意識に留まっており、実際の言語使用状況は主に漢語であることも事実である。

こうした状況で、ウイグル族の言語使用状況が漢語に変わりつつあり、ウイグルの人々はウイグル語が危機に瀕していると感じている。またウイグル文化は漢文化に同化してしまうことを恐れている人々が増加している。彼らには、イスラーム教の信仰を強めることで、ウイグル

族の伝統文化を維持していくという思いがある。特に2009年のウルムチ暴動の後は、漢民族との関係に緊張が高まり、民族アイデンティティをあらためて感じ、自分が漢民族とは異なるウイグル族であり、イスラーム教徒であること意識をするようになったことで、ウイグル族の人々の間でイスラーム教の雰囲気が強まり、宗教活動が活発になっている。しかし、漢語で学校教育を受け、宗教教育が全面的に禁止されたことで、宗教文化の伝達が難しくなり、特に若い世代の中で宗教知識を身につけられる者が極めて少なくなっていることも事実である。

最終的な結論として、次のように述べた。ウイグル語を話す、イスラーム教を信仰するウイグル族の言語文化と宗教文化は「双語教育」をはじめとる漢文化の影響を受けることになり、伝統文化の継承と維持は厳しい道のりを歩むことになるだろう。漢民族と言葉の壁を超えて交流することで、ウイグル族が徐々に漢語で話すことになり、自らのウイグル語を使用する機会ますます少なくなっていく。ウイグル語の読み書きができなくなることで、イスラーム教の教義を学ぶ機会も減少し、イスラーム教徒でありながらイスラーム教の儀式が継承できない者が増えていくだろう。中華人民共和国という国家体制が続き、中国における「双語教育」政策や宗教と教育分離政策が継続していくならば、ウイグル族の民族伝統文化の継承と維持が徐々に新しい文化変容、漢文化への同化に迫られることになるだろう。

第2節　今後の課題

本研究を踏まえて、今後に残された研究課題と展望を述べる。

第1に、他の少数民族、特に漢語を話してイスラーム教を信仰する回族とモンゴル語使用してチベット仏教を信仰するモンゴル族の状況について考察していく必要がある。この課題を進めることによって、民族文化の変容の在り方についてより深く比較検討することができ、これからのウイグル族の民族文化の継承と維持について考察することに役に立つからである。

第2に、本研究の中で捉えることができた文化の継承と維持は、言語と宗教を中心に考察した結論である。これからは中国国外に住んでいるウイグル族の状況を調査して、母語と離れて生活するという状況の下で、文化の継承と維持にはどのような形態が存在するのかということも考える必要がある。そして、外国に住んでいるウイグル族以外のイスラーム教徒たちの宗教文化を詳細に把握することで、イスラーム教徒という同じ枠組みの中にはどのような相違が存在するのかということも捉えていく必要がある。

ウイグル族の社会は今後も変化し続けるだろう。筆者は続けてウイグル社会における言語と宗教に留まらす、社会構造の各面から家族構造、ジェンダーといった視点からウイグル族の文化変容に引き続き注目していきたい。

【参考文献】

＜日本語文献＞

アイネル・バラティ

「新疆ウイグル自治区のウイグル族女子教育について」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』4:105-121 2009 年

アイネル・バラティ

「ウイグル族におけるイスラーム文化の受容に関する一考察」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』 2009 年

アイネル・バラティ

「中国少数民族文化の維持と継承に関する一考察 ウイグル族の教育状況を手掛かりとして」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』6:21-51 2012 年

青木 健

『ゾルアスター教史 古代アーリア・中世ペルシア・現代インド』 刀水書房 2008 年

余部福三

『イスラーム全史』 勁草書房 1991 年

綾部恒雄 編者

『文化人類学の 20 の理論』弘文堂 2006 年

藤山正二郎

「ウイグル語の危機」新免康(編)『アジア遊学(特集:越境する新疆・ウイグル)』1:40-53 勉誠出版 1999 年

権藤与志夫 編者

『ウイグルその人びとと文化』朝日新聞社 1991 年

浜田正美

『(世界史リブレット)中央アジアのイスラーム』山川出版社 2008 年

羽田 亨著

『西域文化史概論・西域文化史』 平凡社 1992 年

費燕

「新疆におけるウイグル族の中国語教育、学習の現状について」『成城文塾』198:110-192 号 2007 年

ジョン・スチュアート原著 賀川豊彦 熱田俊貞共訳

『東洋の基督教 景教の東漸史』豊文書院刊 1928 年

川口一彦 編著

『(シルクロードを東に向かったキリスト教)―景教』 いのちのことば社 2002 年

片山隆裕 編著

『アジアの文化人類学』 ナカニシヤ出版 1999 年

熊谷瑞恵
『食と住空間に見るウイグル族の文化―中国新疆に息づく暮らしの場』昭和堂 2011 年
M・ S バーガリーノ著 木山英明、(大平裕司訳)
『文化人類学の歴史』 新泉社 2001 年
丸山孝一
『周縁文化の視座 民族関係のダイナミックス』九州大学出版会 2010 年
丸山鋼二
「カラハン王朝と新疆へのイスラーム教の流入－新疆イスラーム教小史」『文教大学国際学部紀要』第 18 巻 2 号 2008 年
宮崎幸江
「多文化の子どもの家庭における言語使用と言語意識」『Sophia University Junior College Division Faculty Journal 34』34:117-135 2014 年
宮岡伯人編
『言語人類学を学ぶ人のために』 世界思想社 1996 年
長澤和俊 編
『シルクロードを知る辞典』 東京堂出版 2002 年
日本イスラーム協会、島田襄平、阪垣雄三、佐藤次高
『新イスラーム辞典』 平凡社 2002 年
岡本雅享
『中国の少数民族教育と言語政策』評論社 1999 年
小川佳万
『社会主義中国における小数民族教育―「民族平等」理念の展開』東信堂 2001 年
R.C.フォルツ著 常塚 聴訳
『シルクロードの宗教』古代から 15 世紀までの通商と文化交流 社教文館 2003 年
真田信治
『社会言語学の展望』 くろしお出版 2006 年
祖力亜提・司馬義、吾買爾江・艾山
「新疆自治区における「民考漢」と教育言語問題－新疆大学中心に」大西広(編)『中国の少数民族問題と経済格差』[220-242] 京都大学学術出版会 2012 年
崔淑芬
『中国少数民族の文化と教育』 中国書店 2012 年
篠原清昭
『中国における教育の市場化』 ミネルヴァ書房 2009 年
覃光広等 編著、伊藤清司監訳
『中国少数民族の信仰と習俗』 (上巻) 第一書房 1993 年

宇山智彦　編著
『中央アジア知るための 60 章』 明石書店　2003 年
山下晋司　船曳建夫(編)
『文化人類学キーワード』有斐閣双書　2008 年

＜中国語文献＞

艾力・伊明
『多元文化整合教育視野中的維漢双語教育研究』民族出版社　2011 年
巴音郭楞蒙古自治州概況編写組
『巴音郭楞蒙古自治州概況』民族出版社　2009 年
巴州教育局　編
『巴州教育文史資料汇编』巴州增刊　2009 年
曹紅著
『維吾爾族生活方式』 中央民族大学出版社　1999 年
党育林、張玉璽著
『当代新疆簡史』当代中国出発　2003 年
恩常編
『中国少数民族宗教』雲南人民出版社　1985 年
金宜久　編
『伊斯蘭教』中国社会科出版社　2009 年
金星華
『中国民族語文工作』民族出版社　2005 年
賀霊、佟克力著
『歴史民族文化』 新疆人民出版社　2006 年
劉志霄著
『維吾爾族族歴史』 民族出版社　1985 年
李進新著
『新疆宗教演変史』 新疆人民出版社　2003 年
劉維新　主編
『新疆民族辞典』新疆人民出版社　1995 年
楼望皓著
『中国新疆民俗』新疆美術撮影出版社　2003 年
羅吉華
「内地新疆班文化適応與教育対策」滕星、張俊豪(編)『教育人類学視野－中国民族教育的田野個案研究』346-453　民族出版社　2009 年

毛公宁 主編
『新疆研究文論選』民族出版社 2007 年
馬力克・恰尼西夫著
『中国塔塔爾族教育史』 民族出版社 2005 年
宋張碧波、董国
『中国古代民族文化史』黑龙江人民出版社 1145-1146 1993 年
滕星・王軍 編
『20 世紀中国少数民族与教育』民族出版社 2002 年
王振本、梁威、阿布拉・艾買提、張勇
『新疆少数民族双語教学與研究』民族出版社 2001 年
王勇・高敬 編者
『西域文化』時事出版社 2011 年
武金峰著
『新疆高校民族予科教育研究』民族出版社 2004 年
『新疆維吾爾自治区概況』編者組
『新疆維吾爾自治区概況』民族出版社 2009 年
熊坤新・李建軍
『新疆諸民族倫理思想研究』 中央民族大学出版社 2006 年
徐暁萍・金鑫
『中国民族問題報告』中国社会科学出版社 2008 年
楊聖敏著
『回紇史』吉林教育出版社 1991 年
張迺翥
「跋洛陽新出的一件唐代景教石刻」葛承雍 主編『景教遺珍 ― 洛陽新出唐代景教経幢研究』文物出版社 2009 年
周菁葆 邱陵著
『絲綢之路宗教文化』 新疆人民出版社 1998 年

＜ウイグル語文献＞

阿不都熱依木・艾比不拉
『維吾爾族風俗誌』 新疆人民出版社 1993 年
阿爾斯蘭・阿布都拉 主編、亜熱・艾拝都拉、阿布都熱依木・熱合曼 編者
『現代維吾爾語』 新疆人民出版社 2010 年
阿不都拉・塔里甫
『維吾爾教育史概論』新疆人民出版 1986 年

安尼瓦爾・拜図爾、海仁薩・斯迪克
『新疆民族史』 民族出版社 1999 年
海熱提江
『東西文化交流與維吾爾人』 新疆人民出版社 2002 年
加帕爾・斯拉木、玉素音・哈徳爾 訳
『民族区域自治法講話』民族出版社 1985 年
『維吾爾族簡史』編写組
『維吾爾族簡史』 新疆人民出版社 2006 年
新疆維吾爾自治区人大办公庁翻訳処 編訳
『中華人民共和国民族区域自治法』 新疆人民出版社 2001 年
伊不拉音・熱依木 著
『維吾爾族伝統礼儀』新疆青少年出版社 2014 年

＜インターネット＞
「中華人民共和国国家統計局」http://www.stats.gov.cn/tjgb/rkpcgb
「中華人民共和国教育部」http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/
「新疆維吾爾自治区教育庁」http://www.xjedu.gov.cn/xjjyt/jxxw/zhzx/2010/26824.htm
「深圳市松崗中学」http://sgzx.baoan.edu.cn/content.aspx?news453257
「巴音郭楞蒙古自治州统计信息網」http://tjj.xjbz.gov.cn/html/xstj/652801/2003051506
「烏魯木斉人口網」http://www.wspop.gov.cn/sy/rkgk.html
「庫爾勒市人民政府網站」http://www.xjkel.gov.cn/structure/zjkel/keljjjj.htm
「新疆教育信息網」http://www.xjedu.gov.cn/
「新疆巴州政府網」http://www.xjbz.gov.cn/

Uyghurche Paydilanghan Eserler

Abdurehim hebibulla
『Uyghur Etnigurafiyisi』 Xinjiang helq neshiryati 1993-yil
Arslan Aabdulla ,Yari Ebeydulla,Abdurehim Rahman tehriri
『Hazirqi Zaman Uyghur Tili』 Xinjiang Xelq Neshiryati 2010-yil
Abdulla Talip
『Uyghur Maaripi Tarixidin Ochiriklar』Xinjiang Xelq neshiryati 1986-yil
Enwer Batur,Xeyrinisa Sidiq
『Xinjiangdiki Milletlerning Tarixi』Milletler neshiryati 1999-yil
Gheyretjan
『Uyghurlar Sherqte we gherpte』Xinjiang Xelq neshiryati 2002-yil
Jappar Islam,Yusup Qadir terjimisi
『Milli Teritoriyilik Aptunomiye Qanuni Heqqide Leksiyiler』 Milletler Neshiryati 1985-yil
『Uyghurlarning Qisqiche Tarixi』ni yezish Guruppisi
『Uyghurlarning Qisqiche Tarixi』Xinjiang Xelq neshiryati 2006 -yil
Xinjiang Uyghur Aptunom Rayonluq Xelq Qurultiyi Daimi Komititi Bangongtingi Qanun Nizamlarning Terjimisini Bekitish Gurupisi Terjime Qilghan
『Zhonghua Xelq Jumhuriyitining Milli Teritoriyilik Aptunomiye Qanuni』Xinjiang Xelq neshiryati 2001-yil
Ibrahim Rehimi
『Uyghur En'eniwi Orp Adetliri』 Xinjiang Yash Osmurler Neshiryati 2014-yil